……彼は嬉しかつた。たまらなかつた。で、蜘蛛猿みたいに黒長い腕を頭のうへゝあげて女のまはりをふらふらと踊りまはつた。

「わしはもうなにもいらぬ。わしはもう苦行なぞはすまい。なにもかも幻想ぢやつた。これほどの樂しみとは知らなんだ。罰もあたれ。地獄へも墮ちよ。わしはもうこの娘をはなすことはできぬ」

「それにしてもわしは年よつてゐる。そして醜い。これからさきこの娘はわしと樂しんでくれるぢやらうか。いやいやとてもかなはぬことぢや。あゝ、わしはあの男のやうに若う美しうなりたい。さうしたら娘も喜んで身をまかせてくれるぢやらうに」

彼は醜惡ではあるが悲痛な樣子をした。

「さういふめにあつてみたい。一日でもええゝ。たゞの一遍でもええゝ。おゝ、なんたらうまさうな體ぢやあろ」

そこで身をかゞめていひきかせるやうにいつた。

「これ娘、わしはどうでもそなたをはなしはせぬぞよ」

「わしはこの娘をひとにとられぬやうにせにやならぬ。若い男はいくらも居る。あゝ」

彼は悶えた。泣きだしさうな顏をした。そして久しいこと思案してたが終になにか思ひ浮んだらしくひとりうなづいた。

「さうぢや。わしはこれの姿をかへてしまはふ。ふびんぢやがしかたがない。わしらは畜生になつて添ひとげるまでぢや。よもやまことの畜生に見かへられもすまい。若い男も寄りつかぬぢやあろ」……

彼女は跳ね起きた。そしてなんだかすつかりこぐらがかへつたやうな氣持のする自分の體を見まはした。それは狐色の犬の姿であつた。そしてそばに長い舌を吐いてはあはあと喘いでる同じ毛の大きな僧犬(そういぬ)を見た。彼女は聲をあげて泣いた。それは犬の悲鳴であつた。その時彼女は急に腹のなかをひきしめられるやうな氣がして藁床のうへにつつぷした。その拍子に胎兒を產み墮した。それはまだ形の出來あがらない人間の子だつた。彼女はその血臭いきたならしい肉塊に對して眞底愛著を感じた。そして自分の尻のはうに頸をのばしてべろべろとなめた。これまでその存在をたゞ胎壁の感覺に於てのみ認めながらもあれほど大切に望みをかけてた子どもをこんなにして闇から闇へやつてしまふのがたまらなかつた。それが戀人との唯一の鎖、唯一の形見だといふやうな理由ばかりでなく、譯もたわいもないたゞもう本能的にいとしくていとしくてとてもそのまゝはなしてやる氣になれなかつた。まつたくそれは「業」とでもいふべき恐しい奇怪な力だつた。彼女はまた僧犬が怖かつた。

「あの人はこれが邪教徒の子だといふのであんなに憎んでゐる、あんなに忌々しさうに睨めつけてゐる、出來た子になんの罪咎もないものを。あの人はほんとにこの子をどうするかしれやし

ない」

さう思つて非常な不安を感じた。と同時にまたそれを未來永劫自分のものにしてゐたいといふ氣が……で、舌を手傳はせながら首をひとつ大きくふつて奥齒のはうへくはへこんだ。そして二つ三つぎゆつと噛んでその汁けを味つたのちごくりと呑み込んでしまつた。ほつと安心して落ちつくことができた。これらのことは些の躊躇も狼狽もなくごく自然に、平氣に、上手に、ちやうど生れつきの犬であつたかのやうに爲された。彼女は張りつめた氣がゆるむとともに堪へがたい疲勞を覺えてそのまゝ深い深い眠りに落ちた。

目をさました時には夜があけかゝつてうす明りがさしてゐた。彼女はかたはらに、揃へてのばした前足のうへに顎をのせてのたつとねてる僧犬を見た。彼は犬の姿になつてもそこにまざまざとあのいやらしい苦行僧を思ひ出させるところのものがあつた。そのがつしりした骨組、瘡蓋だらけの皮膚、額の割れた相の悪い顔、睫毛のない爛れ目、そして相變らずの臭い息が嗅覺の鋭敏になつた彼女をむかつかせる。彼女はまた自分の體を見まはした。それは若く、美しく、脂づいてはゐるけれどもまがふかたない犬であつた。

「あゝ、私は犬になつてしまつた。この人も犬になつた。さうしてこゝにかうして一緒にねてゐる。まあどうしたことだらう」

彼女は自分が犬になつたことよりも聖者が同じ姿になつてそばにくつついてるのが一層情なかつた。……それでなんともいひやうのないやるせない淺ましい氣がして思はずわつと泣いた、涙のない犬の悲鳴を。僧犬はぱちつと目をあいた。彼はそろそろと身を起し、背中をそらせ、尻をもちあげてのびをした。その次には先と反對に前へのり出すやうにして後足を一本づゝぐうつとのばした。それからぶるぶるつと二三遍身ぶるひをしてしゆんと鼻をふいた。そこには彼女を切つても切れぬ自分のものとしたうへの安心と落ちつきがあつた。彼は彼女の體をあちこちと輕く嗅ぎまはしたのちいつた。

「目がさめたかな。わしもようねた」

奇妙なことにそれは犬の言葉ではなかつた。また人間の言葉でも。いはゞ人間の言葉を犬の舌で發音した獸人の言葉だつた。その人畜いづれにも通じない言葉がすらすらと彼女にわかつた。彼らはまさしく獸人だつたのである。僧犬のこの短い言葉の調子には自分が彼女の所有者であるといふ意識と所有した女に對するうちとけた馴れなれしさがあらはれてゐた。彼女は蟲唾が發しるほどいやだつた。

「そなたはひもじうはないか。あれを食べたらどうぢやな」

さういつて供養の食物のはうへ目まぜをした。彼女は胎兒を食つたし、それに今はそれどころではなかつたのでほしくないといつた。

「それではわしが食べよう」

僧犬は木皿へ鼻をつゝ込んでぺちやぺちやたべはじめた。そして見るみるきれいにさらへて皿をあちこちに轉がしながらべろべろとなめまはした。彼女は知らぬまに理不盡に與へられたこの境涯と伴侶をどうしてもすなほにうけ入れることができなかつた。それでまた烈しく泣き叫んだ。

「何事も濕婆の思召しぢや。わしらはありがたくいたゞくまでぢや」

いひながら僧犬は口のまはりを手ぎはよく舌で掃除した。それからどさりと尻もちをつき後ろへ捩ぢむいてがちがち齒を噛み合せながら尻尾のつけ根にこびりついた瘡蓋を掻きはじめた。彼にはさしあたり強ひて彼女を說得しようとするほどの熱心もなかつた。

「どうでももう己のものだ。いつでも自由になる」

さうした下劣な無關心があつた。

「わしらは人間ではつれ添ふことができなんだ。それでこのやうにしてくだされたのぢや。もう婆羅門も吠奢(びしや)もない。わしらは濕婆にめあはされた立派な夫婦ぢや」

犬になると同時に彼が婆羅門であり聖者であることに對する彼女の崇敬は彼の「強さ」に對する動物的な「恐れ」と處をかへた。唯彼の智慧に對する盲目的習慣的な信賴のみはもとのまゝに殘つてゐた。それで彼の言ふことをそのまゝ信じたところで彼女には餘儀ない運命に對するすてばちなあきらめのほかなにもなかつた。そしてあきらめようとすればするほど生憎に彼が厭はしかつた。

外には鳥の聲がきこえた。

「わしはちよつとそこまで行つてくる。そなたは體が大事ぢや。ま少しさうしとるがえゝ」

實際彼女は大儀で起きあがる氣にもなれなかつた。僧犬は鼻の先で草庵の藁を押し分けて出ていつた。彼女はひとりになつてしみじみとあたりを見まはした。自分が畜生になつたばかりでほかのものは冷酷にもとのまゝである。濕婆の像も、水甕も、みな。たゞ脫がされた彼女の著物と不用になつた髑髏の瓔珞とがちらばつてゐた。彼女はせめて僧犬がそばにゐないことが嬉しかつた。そして底しれぬ悲嘆のうちに綺麗にしんしんと戀の湧き起るのを覺えた。

「あの人は今日たつてゆくのぢやないかしら。私はどうしてもあの人がゐるやうな氣がする。きつと蟲が知らせるんだらう。あゝ逢ひたい。ひと目なりと見たい。それにしてもこの姿で」

彼女は戀人に抱かれたかつた。そしてこれまではまためぐりあひさへすればいつでも抱愛されるものと思つてゐた。とはいへその望は汚く無慘に塗り消されてしまつた。二人のあひだは婆羅門と旃陀羅よりも遠かつた。彼女はもはや穢らはしがられる資格さへなかつた。旃陀羅の女は萬に一つは婆羅門の戀人とならぬとは限らない。尠くともその肉體は抱愛をうけるに足る形態上の條件をそなへてゐる。今や彼女にはそれさへもなかつたのである。畜生道の、溷濁した、暗黑な嘆きが彼女を壓した。その時がさがさと音がして大きな僧犬の頭がぬつと現れた。そして肩から尻へとすぽりとぬけてはひつてきた。彼はなにか口に

ふくんできたものを彼女のまへに吐き出した。それはひどく青臭い二つの丸いものだつた。
「身體の藥ぢや食べなさい」
彼女は嗅いだばかりでむかむかする變な物を眺めて躊躇してゐた。
「……」
ついぞ見たことのない肝だつた。彼女は
「早く丈夫になりたい」
「なにはともあれ丈夫にならなければ」
といふ氣はあつた。で、いやいやながら一つを口に入れた。それはぬらめいて澁みのある、こりこりしやきしやきした物だつた。彼女はあらまし嚙み碎いて苦勞して呑みこんだ。むつとする噯氣が出て殘りの一つはどうしてもたべる氣にならなかつた。
「では養生にわしがもう一つ食べよう」
僧犬はぺろりとなめ込んだ。そしてそのわる臭い口で彼女の口をねぶつた。彼は出來るだけよそよそしくしてる彼女に寄りそつて腰をおろし顏の向き合ふやうに身體をまげて腹這ひながらにたにたとしていつた。
「……」
彼女は吐きもどしたいやうな氣がした。僧犬は平氣で話しつゞけた。

「わしはクサカの町へ行つてみた。邪教徒の奴めらひどいことをしをつた。クサカの者はみな殺しにされて町はきれいに燒かれてしまうた」
彼女はぎよつとして僧犬を見た。住みなれた町の滅びたことについてもたとしへない寂しさをおぼえたし、日頃自分を虐使した主人たちに對してもさうした場合人が人に對してもつほどの氣持はもつことができた。それに反して僧犬は彼女よりは一層完全に犬になつてゐた　彼はもしもとの彼であつたならいかに詛ひ且怒るであらうかと思はれるこの出來事について全くよそ事のやうに冷淡だつた。それはたゞ「食物」についてのみ彼にかゝはりのあることだつた。
「わしらもこゝにゐては食ふ物に困つてしまふ。もつとも二日や三日は屍骸を食つてもすまされうが」
彼はその屍骸から睾丸をくひちぎつてきたのだつた。
「わしらはどこぞほかの町へ行かにやならぬ。そなたに早う丈夫がつけばえゝが。あれでぢつきに肥立つぢやらうと思ふが。それにあれはえらい根の藥ぢや。そなたは程なうもとの體になるぢやあろ。犬の壽命は短いものぢや。そのうへわしは年よつとるで、わしらは根を强うしてせいぜい樂しまにやならぬ」
あの不自然な出產のあとであるにかゝはらず彼女の健康は奇蹟的にはやく恢復した。それは所謂根の藥のせいもあつたらうが一つには彼女が人間ではなくて犬であつたからでもあつた。翌日

の午後彼女は空腹に堪へかね產後の疲れをおして僧犬と一緒にクサカの燒け跡へ餌を漁りに出かけた。彼女は通ひなれた道をはじめて四つの足で歩いた。そして太い尻尾をきゆつと卷きあげてゆく僧犬のあとからだらりと尾を垂れてしほしほとついていつた。森を出て彼女は町のはうを眺めた。町はあとかたもなくなつて此處彼處に餘煙があがつてゐる。そして遙に物の燒けた臭ひ、特に屍骸の燒けた一種かうばしい臭ひが漂つてくる。終に燒け跡へきた。ぷすぷす燻る灰燼のなかにちらばつたまつ黑な屍骸を野犬の群が爭つて食つてゐる。それらのものは彼ら、殊に僧犬の大きいのに驚いて遠くから煩く吠えたてた。それらは彼女たちを自分らと同じ齒や爪をもつた仲間として人間や他の動物に對するのとは別の、もつと近接した關係、もつと切實な意味に於ての恐怖や敵意を示した。彼女は情ない思ひをした。僧犬はそんなことには一切無頓著にみえた。彼には何物もうち消すことのできぬ、何物をも忘れさせる大きな喜び——彼女をわがものにしたといふ——があつた。それはさうと現實にひしひしと迫つてくる饑餓は否應なしに彼女を驅つてその不愉快な場處をあちこちと嗅ぎまはらせた。彼女は少しづゝの食物を見つけて辛うじて腹をみたすことができた。そこで腰をおろして休みながら後足で耳のうしろを掻きはじめた。僧犬はいふ。

「このとほりでとてもわしらはこれから始終こゝで餌をあさるといふ譯にはゆかぬ。どこぞほかへ宿がへをせねば。それでわしの考ではチャクチャの町がよからうかと思ふ。えゝかげんな町

ぢやし、それにこゝからはまづいちばん近いで」

彼が同意を求めるやうに彼女を見たのでどこでもかまはないと氣のない返事をした。

「あそこに見える森をまはつて、それからひとつ丘を越えて、三拘盧舍(くるしや)たらずもあるぢやろか。そなたにはまんだちと難儀ぢやらうな」

彼女は今のぶんならどうぞかうぞ歩けさうだからこれからすぐ行かうといつた。歸るにしてもどうせ歩くのだし、それにあの草庵がいやでならない。で、とにかく行くことにした。

彼女は燒野が原となつたもとの住みかを名殘惜しく眺めやつた。それからとぼとぼと歩きだした。いよいよ燒け跡を出ようとする時そこに運よく逃げのびて邪教徒の毒手を免れた僅の人たちが集まつてゐた。彼らは邪教徒たちの去つたのをみて三々五々戻つてきた。そして目前に慘澹たる光景を見ながら性懲りもなくこの見込まれたやうな處に彼らの住居をさだめようとしてるのである。彼女は彼らのそばを通らうとして抑へがたいものいひたさの衝動を感じた。彼女は自分ひとりの胸に疊んでおくにはあまりに多くの思をもつてゐた。で、僧犬があはてゝとめようとしたかひもなく彼女は我を忘れてあられもない獸人の言葉をもつて彼らに話しかけた。彼らは肝をつぶして彼女を見た、氣味のわるい囈言みたいなことをいふ狐色の牝犬を。そしてかやうな際ではありてつきり彼女に惡魔が憑いたのだと考へて彼女を打ち殺さうととてんでに石ころや棒きれをもつて追つかけてきた。彼女は僧犬と一緒に命からがら逃げだした。彼女は自分の境涯のなんであ

るかをしみじみと知つた。

彼らは市外の森についてまはつてから一つの川の渡渉場――それは聖者が浴をとり、彼女が水を汲みなれたその同じ流の下流にあたつてゐる――をわたり、一つの丘を越え、幾つにも枝わかれした路をとほつて日の暮れる頃やうやくチャクチャの町へついた。そこで彼らはやはり邪教徒に破壊された天祠の廢墟を見つけてそこに住むことにした。崩れ落ちた瓦石の蔭にちやうど雨露を凌ぐに恰好な空洞が出來て、まだほかの獸の臭ひもしなかつたし、それに一方口で都合よく安全であつた。彼らはそこに疲れた四肢をやすめた。

ほかの犬に對する懸念から彼らは毎日つれだつて食をあさりに出かけた。彼女はよく立ちどまつてはじつと人々の顔を見つめ、またその話に耳を傾けた。

「あゝ、ものがいひたい。もとの姿になりたい」

そればかりが思ひであつた。人々のなかには時には食物を投げ與へ、また稀には愛撫してくれるものさへあつた。そんな時に彼女はいかに嬉しげに耳を垂れ、尾を振り、身をすりつけてその感謝と思慕の情を示さうとしたか。たゞ彼女はあの苦い經驗に懲りてどこまでも本物の犬でゐることを忘れなかつた。僧犬はそのやうに彼女が人間に狎れ親しむことの危險を懇々と說きゝかせた。それは至極尤もなことだつたが彼がさうする眞の動機は實は別にあつた。彼には人間に對する彼女のさうした態度は己に對する冷淡、嫌忌の反映であるやうに思はれてよしそれが性的なものでないまでも彼に邪な嫉妬を起させたのである。

くよくよとみじめな犬の日を送るうちに彼女にとつてつらいことがはじまつた。それは當然早晩起るべきことで、しかも彼女が故らにそれを忘れ、若くは忘れたことにしてたところのものであつた。僧犬は彼女に……迫りだした。最初のうちは產後まだ身體が本復しないといふ口實のもとにどうやら一日のがれをしてたけれどそれはいつまでもはとほらなかつた。僧犬は……。

「そなたは嘘をいうてゐる。そなたの身體はもうはい本復してゐる。わしにはちやんとわかつとるのぢや」

彼は異性を嗜む者の忍耐と、根氣と、熱心をもつて諄々と彼女を說きはじめた。

「譯のわからぬことをいふものではない。二人は濕婆にめあはされた夫婦ぢや。わしの永年の信心と苦行が思召しにかなうたがゆゑにそれそのかはえゝそなたをわしにくだされたのぢや」

こゝまでいつて彼は苦しげな樣子をした。彼は自分のいふことが赤嘘であることにはさしてなにも感じなかつたが己が彼女に授けられたものだといはうとしてどうしても巧い理由が見つからなかつたのだ。

「そなたはわしに授けられた。卽わしがそなたに授けられたのぢや。よくよく深い宿緣ぢや。二人は切つても切れぬなかぢや。う、濕婆の思召しはありがたういたゞかにやならぬ。夫婦の……はとりもなほさずあなたへのおつとめぢや。道ぢや。

また樂しみの隨一ぢや。そなたにはむつかしいかしらぬがそなたは平生リンガを拜んだぢやらう。あれは濕婆の……ぢや。それからリンガの立つてゐる圓い臺はあれはヨーニといふておつれあひのパールヴチー……

彼女は彼の言葉を無條件にうけいれた。けれどもなんたる因果かいかにしても彼のやうに喜び勇んで神意にしたがふことができなかつた。彼女は一旦あの人にさゝげたと思ひこんだ體を餘人にまかすに忍びなかつた。戀人の血で淨められた大事の胎を厭はしい人の血で穢すに堪へなかつた。

「えゝ子ぢや。の、おとなしうせるぢやよ」

僧犬は機嫌をとりとり……

「あゝ、いやだいやだ。なんといふ情ないことだらう。こんなにしてるうちに私はきつとこの人の胤を宿してしまふだらう」

……さうしてそれが「あの人」に對してしんからすまなかつた。

「ゆるしてください。私の體はこんなだけれど心は決してさうぢやないんです」

そんな氣持だつた。彼女はそれが「神意」であることを疑はなかつたとしても「惠」と考へるにはあまりにもつらかつた。寧ろそれは「罰」であつた。

……

「この人はあゝしてしまへば氣がすむのだ」

と彼女は思つた。

僧犬の獸慾は戀がたきに對する嫉妬によつて一層刺激された。……

傷ましい日が幾日かつゞいた。ある夜の明けがた彼女はふと戀人の夢をみた。それは彼女の見なれた印度の町ではなくて異教徒の國である。そこには異教徒の男女が蟻のやうに群つて凱旋の軍隊を迎へてゐる。彼女はそのなかにまじつて自分も異教徒であつたかのやうに平氣で「あの人」を待つてゐる。と、ちやうどそこへ約束したやうに「あの人」の姿が現れた、よく夢にあるやうに。彼は一隊の騎兵の先頭にたつて立派な栗毛の馬に乘つてゐる。そしてぴかぴかする甲冑をつけてすばらしく長い鎗をもつてゐる。彼女が嬉しまぎれにかけよつて鞍にとびつくと彼は別段驚いた樣子もなく

「知つてるよ」

といふやうに笑ひながら彼女を抱きあげた。馬にのつて鎗をもつてるくせにどうしてかひよいと造作なくかゝへた。そこで一所懸命にからみついて口つけようとすると生憎ずるずるとすべり落ちる。やつとこさと這ひあがつて口つけようとするとまたずるずるとおつこちる。じれつたい思をして幾度も幾度もそんなことをくりかへしてるうちになにかのはずみでふわーつと鞍から轉げ落ちたと思つて目がさめた。彼女は今の今とうつてかはつた自分の周圍を眺めた。そして啼き叫

ばうとしたがそばにゐる僧犬を見て聲をのんだ。氣ちがひのやうな……に疲れ横つ倒しに四肢を投げだしていぎたなく眠つてゐる。彼女は夢に見た人が戀しくて矢も楯もたまらなくなつた。

「私はガーズニーへゆかう」

彼女はガーズニーの名をきいてゐた、そこは異教徒の王様の都だといふことも、あの道をあの方角へ行くのだといふことも。もう神意もなにもなかつた。たゞ戀のみがあつた。

「あゝ、私は行かう。どうしても行かう。私は命がけで行かう。どうかして途中で死んだつてかうしてるよりはましだ。私はどうしても行く。どうしたつてゆく。駱駝の足あとを嗅いで行けばゆけないことはない、あんなにたんと駱駝が通つたんだもの。それにあの車の轍や馬の足あとでもわかるだらう。……でも私はこの姿で……」

彼女は當惑した。

「いえいえどうだつてかまはない。ものがいへなくても、私だといふ事がわからなくても、私はそばにゐさへすればいゝ。顔を見るだけでも、聲をきくだけでもいゝ。私は尾を振つて、あまえて、あの人の手をなめよう。私はこの姿でせいいつぱいのことをしよう。あの人はきつと私を可愛がつてくれるにちがひない。あゝ、さうしよう。私はあの人のとこへ行かう」

クサカまでの道は彼女が人間であつてはとてもできないほどかなりはつきりと覺えてゐる。彼女は僧犬を見た。正體もなく寢込んでゐる。彼女は息をころしてそつと身を起した。そして忍び

足に、僧犬の目ざとい動物の眠りをさますことなしに首尾よく住みかをぬけだした。外はまだ暗かつた。彼女は今こそ天恵となつた鋭敏な犬の感官を極度に働かせて出來るだけ速くクサカのはうへかけだした。彼女はあせりにあせつたけれど路のわかれたところへくると間違ひなく方向をきめるために暫くは躊躇しなければならなかつた。彼女は氣が氣でなかつた。僧犬が目をさますまでにせめてあの川を越してしまはねばならぬ。追ひつかれぬうちに、早く早く。彼女はひた走りに走つた。幸に道も違はず、夜のしらしらとあけるころ川岸へついた。彼女はそこですこし息をつかねばならなかつた。そして汀から頸をのばして水をのまうとした。その時彼女はばたといふ足音とはげしい息づかひをきいた。

「もうだめだ」

と彼女は思つた。

「くやしい。くやしい。逃げそこなつた」

僧犬は半狂亂で駈けつけた。凄しい形相をしてゐる。肉交の相手を失はうとする時の醜惡な忿怒だ。

「ごめんなさい」

彼女は尻尾を後足の間へ巻き込んでちゞこまつてしまつた。僧犬は猛りたつて無性にばつぱつと砂を蹴上げた。彼はどうして自分の感情をあらはしてよいかわからなかつた。勿論この際彼女

の立場になつて考へるなどは思ひもよらない。自分があゝまで熱愛して——全然肉的にではあるけれども——一生の幸福をそこにかけてる相手が無情にも自分の寢息をうかゞつて逃亡しようとする。彼はくやしさ、腹立たしさにふるへた。女の肉がくひちぎつてやりたかつた。けれどもさうすればもうあゝした樂しみはできなくなる。僧犬のなかの人間がそんなことを考へた。で、さういふ場合人間、殊に自分の弱點を知つてる人間が賢くも示すことのある寬容と忍耐とをもつていつた。

「なぜ逃げたのぢや」

彼女は吃りどもり答へた。

「クサカの樣子が見たくなつて……私はすぐ歸るつもりだつたのです」

嘘なことはわかつてゐた。が、それを本當にしてつれて歸るよりほかしかたがなかつた。

「ばか者が。クサカなぞ見てどうする」

そのまゝ彼らはチャクチクの住みかへ歸つた。

それからまた僧犬にとつては生きながらの地獄の生活がつゞいた。彼女は逃げたいといふ氣は寸時もやまなかつたけれど逃げ出せる望はまつたくなかつた。僧犬はその後それについて一言もいはなかつたがあれ以來すこしも氣をゆるさない。それにあの時の恐しさもまた彼女に再擧の勇氣を失はした。

「今度こそ嚙み殺されてしまふだらう」

彼女は命が惜しかつた。それは單に生命に對する本能的な執著ばかりでなく、さうなれば「あの人」と未來永劫あへなくなつてしまふ——と彼女は思つた——のがたまらなかつた。彼女は未練にも　生きてさへゐればいつかまた「あの人」の顏なりと見、聲なりときく時がないとも限らない　と思ふ。そのうへ生憎彼女はあの夜と同じ夢をくりかへしくりかへし見るのだつた。それはさめればいつも堪へがたい思をさせたけれどそれでも見ないよりはよつぽどましであつた。彼女はそんな夢が見られるだけでも生きてたかつた。戀するものゝ常として夢のなかの戀人はその貴さ、大事さ……に於てすこしも現の人にちがはなかつた。彼女はその夢を嬉しくわが胸に祕めてひとりで思ひかへしてゐた、人しれぬ逢ふ瀨ののちのやうに。そんなにしてるうちに彼女はいつか自分が身重になつたことに氣がついた。彼女は切つても切れぬ强靭な汚らしい肉繩で僧犬と自分がしつかりと結びつけられてしまつたやうな氣がした。それはひつ張ればひつ張るほど飴みたいにのびてきてどうしてもちぎれない。いやな、因果な、宿命的なものだ。彼女はまつ黑などろどろした悲しみに沈んだ。嘗て「あの人」の子をもつた場合の回想などは勿論毫もこの目前の事實を潤色し緩和するに足らない。それで彼女はただなにもかも「神罰」とあきらめるほかしかたがなかつた。同じことを僧犬はまつたく別な風に考へた。それは彼が彼女のなかに宿つてその血肉に養はれることであり……またすごすごと彼女のところへ歸つてきた。

さうかうするうちに彼女の二列にならんだ乳房は著しくふくらんで地につきさうになつた。ある朝彼女は腹のなかにちやうど糞をする時のやうな衝動を感じた。そして思はずすこしいきんだらぴよこりと子が産まれた。なんの造作もなかつた。彼女は早速臍帶を噛みきつて唯もう本能的な愛情をもつて子どもをなめはじめた。それが何者の子だなぞいふことはてんで念頭に浮ばなかつた。分娩のため神經過敏になつてる彼女に幸に本能がそんな思念の起る餘地を與へなかつた。それは血臭ひぶよぶよした裸の肉塊であつた。そしてなんともいひやうのない情愛が味となり匂ひとなつて舌や鼻から全身にしみこんできた。うとうとしてた僧犬は目をさましてすぐに事態を見てとつた。

「おゝ、生まれたか。お手柄ぢやつたの」

流石に彼も父親としての情愛を覺えて歩みよつて子どもをなめようとした。

「あ、その口でなめられちや」

と彼女は思つた。併しやつぱり嬉しかつた。そのうちにまたぴよこりと生まれた。暫くして三番めのが。そして最後に第四のものが生まれて依怙贔負のない母の愛撫をうけた。これらの四個の肉塊が尻からひり出されると同時に彼女の世界は一變した。恰も世界がその四個のものに收縮してしまつたかのやうに彼女の心がそこに集中した。彼女は幸福だつた、もしそれが幸福ならば。子どもは目が見えないのでめくら滅法に乳くびをさぐりあてゝちゆうちゆうと吸ひつく。裸の、

敏感な、愛情にうづくところの乳房が彼らの口にふくまれ、すべつこい舌にまかれてぺちよぺちよと吸はれるのがぞくぞくするほど嬉しい。彼らは胎内にゐた時からすつかり彼女に信頼しきつて、そして「目は見えなくてもちやんと知つてますよ」といふやうに些の疑念もなく慕ひよつて鈴なりになる。彼女は自分の愛情が、湧いて、煮えて、甘い乳となつて、とくとくと彼らの口に迸り入つて、その五體にまんべんなく行きわたつてそれを養ひ育てゝゆくのを感ずる。母性の醉はあれほど自分の變形を嘆いた彼女に生れた子が四足であることを忘れさせた。彼女はまたその抑へきれない母の矜りと喜びを相手かまはずわかちたい氣持だつた。そこで僧犬は二重の滿足を得た。子供の出生に對する父としてのそれと、その子が不意に無心に齎したところの彼女との融和に對するそれと。

子供が心配なのでそれからは彼らは交替で食を求めに出ることにした。僧犬は彼女の逃走についてはもうすこしも懸念しなかつた、子供をおいてゆけぬことは目に見えてたので。ある日彼は子供に乳をやつてる彼女にむかつていつた。

「どうぢや、夫婦といふものゝうまみがようわかつたぢやらう。わしがいふことをきゝさへすればこの樂しみぢや。これはわしらが血の塊ぞよ。かはゆかろ。わしもかはえてたまらん。これからはつまらぬ駄々はこねぬものぞい」

彼はにたにた笑つて彼女の顏を見た。彼には勝ちほこつた氣持とこれから先の性交の豫感があ

つた。彼女は默つてゐた。なんともいふ氣にならなかつた。今までたゞ盲目的に働いてた母性、有頂天に跳躍してた愛情が突然ひどい衝撃をうけた。彼女は自分の腹にくつゝいてふるへてる四匹のものをじつと眺めながら思つた。

「あゝ、これがあの人の子だつたら」

それ自ら滿足してた彼女の母性はそれが夫婦の情愛と結びつけられようとした時に俄然として反抗した。今こゝにかうして彼女の全心を占領してる四匹の子供、それは强要された性交の餘儀ない、宿命的な、生理的結果なので、決して相互の愛情の產物ではない。またその理由にもならない。はたその夫婦關係を肯定し或は享樂させるところの理由にも原因にもならない。彼女の矜りや喜びは母子のあひだの神聖な問題で僧犬にはかゝはりのない、かゝはつてほしくないことなのである。覺醒した彼女の心は今やそこに一點情ない汚斑のあることを見た。

「あの人の子だつたら」

いはゞそれは戀人の子に向けらるべき筈であつた母性がその正當の對象を得ないために、失つたゝめに、こゝに戀によつてゞはなく運命によつて授けられた僧犬の子に對して假に補償的に働いたにすぎなかつた。それはいかに熱烈であらうともさうであつた。

その次の日の午後のことである。僧犬はよほどまへに食を求めに出かけたまゝ待てど暮せど歸つてこない。彼女はひどく空腹を感じてきた。乳が出なくなつたので子たちはひつきりなしにき

ゆんきゆん啼いてひとつの乳くびから他の乳くびへと吸ひついた。その聲が頭へ針を刺されるやうにこたへる。さぞひもじからうと思ふ。そしてゐたゝめに、こゝに戀によつてゞはなく運命によつて授けられた僧犬の子に對して假に補償的に働れどどうしても啼きやまない。乳くびは血のにじむほど痛くなつてきた。彼女はじりじりした。

「えゝ、早く歸つてくれゝばいゝものを」

彼女は彼がまたどこかで牝犬の尻を追ひまはしてるのにちがひないと思ふ。彼は口を拭つて知らん顏してるけれど彼女はその體についた牝犬らしい匂に氣がついてゐた。彼女は唾でも吐きたかつた。そして嫉妬からではなく子供に對する愛情から腹が立つてならなかつた。もう我慢ができない。子たちは啼き死ぬほど啼いてゐる。彼女は餘儀なく子供をおいて餌をあさりにでかけることにした。そしてそろそろと身を起した。子たちは乳房につるさがつたがぢきにはなれて轉がつた。そして一層聲高く啼いた。彼女はその聲に心を殘しながら穴を出た。そしていつもいちばんはじめに行く大きな芥捨て場へいつたがあらかたもうほかの犬にあらされて空虛な胃の半分をみたすほどの食物も見出せなかつた。彼女は途中で僧犬にあひもするかと思ひおもひ歩いたけれど運惡く出あはなかつた。その癖ほかの犬には度々出くはしたが、彼女には子をもつた母獸の狂的な勇氣があつたのですこしも怖くなかつた。それから雜沓した市場のはうへ行つた。そこで時時意地の惡い人間にいぢめられながらも相當の餌を拾つた。それはいつもならばもう充分なほどだつたが今日のやうな極度の空腹とからつぽの乳房をみたすにはまだ足りなかつた、心あたりの

處は殘る隅なく歩いたのに。彼女は様子の知れぬ場處へ行くのには動物的な不安を感じた。それにおいてきた子供も氣がゝりでならない。彼女はさんざ迷つた揚句今頃はたぶんもう僧犬が歸つてるだらうとあてもない氣やすめをしながら思ひきつてこれまで行つたこともない横町へ曲り込んだ。うす氣味のわるい小路をぐるぐるかひもなく捜しまはつた末やつとのことで路ばたに拾てられた大きな魚の頭をみつけた。で、大急ぎでぐわつと噛みつき無茶苦茶に噛み碎いてのみこんだ。彼女は幾度も喉に骨をたてゝはぎやつと吐き出した。それでやつと堪能して歸ることにした。彼女は腹の重いだけ氣が輕かつた。彼女は腹一杯の食物が一足ごとにこなれて、全身にまはつて自分を元氣づけ、甘い、溫い、養ひになる乳となつて乳房に溜つてくるのを感ずる。その乳が早くのませてやりたいと思ふ。彼女はいそいそとして足の運びもかろく歸つてきた。住みかへ近づいたのはもう暮れ方だつた。

「おや」

子たちの聲がきこえない。

「ねてるのかしら」

彼女は孔からとびこんだ。ゐない！　僧犬もゐない。變な匂がする。妙な足あとがある。犬の匂ではないし

「あ、豺（やまいぬ）だ」

彼女は氣ちがひのやうにかけだした。豺は夜など時折このへんまでも忍んでくることがある。彼女はその匂を知つてゐた。彼女は地べたに鼻をつけて出來るだけの速さで追跡した。まだ間もないやうだ。はつきり殘つてゐる。彼女は匂をたどつて終に町からかなりはなれた大きな森へはひつていつた。なんにも怖くなかつた。絶望的な怒りが影を見せない敵にむかつて燃えあがつた。森へはひつてからは急に追跡が困難になつた。そこにはいろんな鳥や獸の匂がごちやごちやに他を消しあつてゐる。彼女は縦横無盡にかけまはつてどうでも敵を見つけようとした。そして奥へ奥へと進むうちにぽかりと小さな沼のふちへ出た。大木がないかはりに灌木と雜草がもうもうと密生してゐる。彼女はそこまできてはたと當惑した。象の群が水をのみにきたのだらう、そこらぢゆうめちやめちやに踏みつけられてなにがなんだか譯がわからない。彼女は藪を押しわけ、くぐりぬけ、難儀をして嗅ぎまはつたが豺の匂は絶えてしまつた。しかたなくひきかへして別の方向へ捜しはじめた。まはりまはつて歩くうちまた沼のところへ戻つてきた。で、またひきかへした。歩一歩と夜が近づいてくる。あせりにあせつて別のはうへと捜すうちにまたもとの處へ出てしまつた。どうすることもできない。確に敵はこゝへきたには相違ないけれどそれから先がわからない。足あともない。匂もない。到るところ象にへし折られ、踏み躙られた枝や葉を見るばかり。彼女は絶望した。精も根もつきてしまつた。その時その凄しい怒が忽然として深い深い悲みと思慕の情にかはつた。彼女は仰向いて喉をのばしあはれな長吠えをして子供を呼ん

だ、あの無心なものが豺のあとについてちよこちよこ歩いてゞもゆくかのやうに。彼女はくりかへしくりかへし呼んだ。そして今一度呼ばうとした時にがさがさといふ音をきいた。彼女は赫として身がまへした。そこへ僧犬が現れた。彼は歸るとすぐ事變のあつたことを感づいてあとを追つてきたのだ。彼女は手短かに一部始終を話した。

「あきらめるよりしやうがない」

彼も流石に悄然としていつた。そこに感情の共鳴があつた。

「わしが早う歸らなんだのがわるかつた」

彼女はもうそんなことを咎めだてする氣もなかつた。彼らはだらりと尻尾を垂れいひ合はせたやうに默つて住みかへ歸つた。

夜である。彼女は坐りなれた穴の隅にすわりそこにまざまざと殘つてる子たちの匂を嗅ひで悲しい悲しい聲をあげた。彼女はまた豺の匂を嗅ひであらたに母獸の怒を燃やした。

「あゝ、あの子たちはどんなにか啼いて私を呼んでゐたのだらう。それをあの口の裂けた豺めがきゝつけてそつと忍んできたのにちがひない。あの子たちはそれを私だと思つてよちよちと慕ひよつたのだらう。それをまあよくもよくもむごたらしく一つ一つくひ殺して……かにしておくれよ、かにしておくれよ、私がわるかつたのだから。私さへゐればこんなことにはならなかつたのに、おまへたちがひもじからうと思つたばつかりに……あゝ、私はどうしたらいゝだらう。出

る時にあんなに慕つて啼いたものを……のませてやりたい、のませてやりたい。このまゝ乳をのませたらどんなにかよろこぶだらう」

彼女の乳房ははちきれさうになつてうづいた。彼女は彼らの頭や前足がそこに觸れて、それが小さな口につるりと吸ひ込まれる氣持を思ひ出す。そしてこらへきれぬ物足りなさ、心さみしさを覺える。

さらぬだにいねがての犬の夜があけて朝の光が堆石のすきまからさしこんできた。それは昨日とは似てもつかぬ日であつた。

……

「水くさいではないかえ。わしがこれほどに思うてゐるにそなたはすこしも報いてはくれぬ。それではあんまり情がうすいといふものぢやぞえ」

彼女はなんともいふことができなかつた。實際そのとほりだつた。それはまつたくせうことなしのおつきあひにすぎなかつた。……

先の短い命をこのやうにして暮すのが思うてもつらい。それはわしもよう得心してゐる。そなたがわしを嫌ふのも尤もぢや。わしは醜い。それにこのとほり年よつてもゐる。が、の、こゝをようきゝわけてくりやれ。いやなものを無理難題をかけると思ふかしらぬがの、それが戀ぢや。どうでも思ひきれぬのぢや。わしは氣のちがふほどに思うてゐる。可愛い、いとしいと思はぬ時

はないのぢや。今までは默つてゐたがわしはそなたをひと目見た時から戀ひ慕うてゐたのぢや。わしは迷うてゐる。思ひこがれてゐる。の、すこしは察してくれよ。その思ひをはらすにはそなたを抱くよりほかはないのぢや。そなたがせめてわしが思ひの半分も汲んでくれうならわしはもういふことはないのぢや。これ、わしはつらいのぢや。ふるふほどせつないのぢや。の、そなたも木や石ではないぢやあろ。察してくりやれ。夫婦らしうしてくりやれ。慈悲ぢやぞえ。の、これ、あはれと思ふてくれ」

彼は手を合はせぬばかりにしてかきくどいた。彼女はうなだれて默つてゐた。彼女にはよくわかつた。それほどまでに思つてくれるのをありがたいとも思つた。そんな苦しみをさせるのはすまないとも思つた。出來るならどんなにでもしたかつた。が、どうにもしやうがなかつた。それは彼女の力に及ばぬことだつた。彼女は彼をさだめられた夫として承認した。人間御供にあがつた氣持で泣くなく身をまかせた。それがせい一杯のところだつた。それ以上は彼女にとつていはば背理であつた。彼女の肉體を構成する細胞の一つ一つが絶對にそれを拒絶した。それは彼女がまだその時期に達しない處女であつて、それを彼に弄ばれるのと同然だつた。彼女はそれをしも忍んだ。それ以上なにが望まれようか。

「ごめんなさい」

彼女はいつた。それはしんそこからの詫びであるとゝもに斷乎たる拒絶でもあつた。僧犬は溜

息をついた。しかも彼はなほ懲りずまに執念くかきくどいて夜となく晝となく彼女を惱ました。

「わしはこんな體ぢや。さきはもう見えてゐる。わしはこのまゝでは死んでも死にきれぬ」

そんなこともいつた。實際彼の體はひどく弱つてきた。全身の惡瘡はますます烈しくなつた。彼は間がなすきがなそれを爪と齒で掻きむしる。そのたんびにばらばらと毛がぬけて赤肌から血膿が流れる。爛れ目のうへに眉毛も髭もなくなり、肉ばかりの尻尾がちよろりと垂れて見るもいやらしい姿になつた。彼は痒さに責められて疲れきつた時のほかはおちおちと眠ることもできない。氣力も體力も衰へはてゝ今はたゞ猛烈な獸慾ばかりが命をつないでゐる。こんな有樣で思ふやうに彼女と樂しむこともできずに死んではまつたく死にきれないのであらう。とはいへ彼女のためにすてばちな無關心、冷淡な從順は彼の執拗な强要のために再び積極的な嫌惡となつた。それは本然の傾向に悖つたものをわる强ひされる時に現はれる抑へがたい自然の反抗であつた。彼女はうるさくかきくどかれるほど生憎に「あの人」が戀しくなつた。そして始終「あの人」の夢を見た。それがいよいよ彼女を堪へがたくした。彼女はまたもや逃走を考へはじめた。

「今度こそ命がけだ。が、もうしかたがない。どうでもなるがいゝ。もう一度逃げてみよう。どうしても逃げおほす。さうしてあの人のところへ行く。あゝ、私はガーズニーへ行こう。ガーズニーへゆかう」

ある夜彼女はそつと穴をぬけだした。そしてまつ暗な路をクサカのはうへひた走りに走つた。

二度めなので迷ふこともなかつた。彼女は自分の足音をさへ恐れた。僧犬は弱つてはゐるが慾望や嫉妬はその四肢に魔物のやうな力を與へるだらう。彼女は無二無三に走つてやうやく渡渉場のところまできた。胸がさけさうに苦しい。足が萎えてへたへたとつぶれさうになる。

「こゝを渡ればひと安心だ」

彼女は一所懸命氣をひきたてゝ渡りはじめた。岸に近いところは靜におどんでたがまんなかへ出れば出るほど流が強くなつてくる。彼女は鼻先を水面に出して必死と泳いだ。併し氣ばかりはあせつても足の力がぬけて充分に水を掻くことができない。それで目あてのはうへまつすぐに行けないばかりか時々ぶくりと頭までもぐる。彼女は見るみる押し流された。流れはますます早く、水は深く、川は廣くなつてゆく。精も根もつきてしまひさうになつた。で、思はず喘がうとしてがぶりと水を呑んだ。彼女は最後の努力をした。嬉しい！　岸が近づいた。流もゆるくなつた。たうとう泳ぎついた。が、そこには適當な足場がなかつた。彼女はやつと前足をかけても後足をあげることができない。そしてもがいてるうちにまた押し流される。そんなことを何遍もするうちに氣がぼうつとしてきた。

「あゝ」

彼女は無茶苦茶に泳ぎついてははなれ、泳ぎついてははなれした。そのうちどさりとなにかにぶつかつた。脇腹に強い痛を覺えた。それは天の佑(たすけ)であつた。大きな木の根が水の中までのびだ

してゐた。いゝ按排にそれに身を支へられて辛うじて這ひあがることができた。そこで急に氣が弛んでよろよろとした。そしてずぶ濡れのまゝへたりと倒れてしまつた。

「私はこれなり死ぬのかしら」

そんな氣が夢のやうに頭に浮んできた。そして死にさうに喘いでゐた。そのうちふと彼女はかすかに遠吠の聲をきいたやうに思つた。そしてはつと起きあがつた。恐怖が彼女を力づけた。彼女は見當をつけ密生した藪を斜につゝきつて本道へ出ようとした。僧犬のけはひもなかつた。ほど困難したがともかく目的を達した。

「まあよかつた。もうすぐクサカだ。それからガーズニーへ」

彼女の胸は喜びに躍つた。案內知つた路を勇んでかけだした。なにはともあれ僧犬をまいてしまふまでは走らねばならぬ。で、わざとクサカの燒け跡へははひらずにぼかぼかした草地を横ぎつて町から大きく迂回して街道の先のはうへ出ようとした。そして匂をまぎらすためにそこいらに澤山ごろごろ眠つてる野飼ひの牛の間を縫ふやうにして行つた。さうしたらひよつくりといつぞや異教徒が祭をしてた榕樹のあるところへ出た。星あかりにすかしてみたら新しい堆土のうへに大きな石がおいてある。

「あゝ、こゝだつた」

と思つた。それから森のはうへ行かうとした時に彼女は突然恐しい勢で走り寄る足音ときゝなれ

た僧犬のうなり聲をきいた。彼女は立ち竦んだ。それと同時にぐわつととびかゝるけはひを見て危く身をかはした。彼女は鼻の先で猛りたつ彼の疎な毛が針みたいに逆立つてるのが見えるやうな氣がした。

「どこへゆく」

僧犬は忿怒にふるへながらいつた。その時彼女にはもう恐怖の影もなかつた。たゞ氷のやうな絶望があつた。

「どこへ行くのぢや」

嚙みつきさうにいふ。彼女は默つてゐた。

「わしは知つとるぞ。おのしは彼奴のとこへ行くのぢや」

彼はさも憎さうにいつた。

「これ、血迷はずとようきけよ。あの男は死んだぞよ」

「え」

彼女はぶるぶるとした。

「嘘です。嘘です。あなたはひとを騙すのです」

「嘘ぢやといふか。彼奴はこのわしが殺してやつたわ」

「お默りなさい。あの人はあなたなんぞに殺される人ぢやない。さあ、いつ、どこで、どうして殺しました」

僧犬は「いいい」といふやうな、いやな、絞り出すやうな聲をした。嫉妬がこみあげたのだ。

「ばかめが。毘陀羅法で詛ひ殺したのぢや」

彼女はぎよつとした。半信半疑になつた。呪法の力は知つてゐる。

「そのびだら法とはなんです」

「知らずばいうてきかしてやる。屍骸をやつて人を殺させる法ぢや。名さへ知ればど奴でも殺せる」

「それごらんなさい。あの人の名も知らないで」

「彼奴はヂェラルというた」

「え、あなたはそれは名ぢやないといつた」

「ふ、ふ、嘘ぢや。わしは彼奴の名を知つたばかりか現在彼奴を見た。彼奴は苦行をして居るわしのまへを通つてこの顔に唾を吐きかけをつた。おのしのいふたとほりの男ぢやつた。誓くして森の中でヂェラル、ヂェラルと呼ぶ聲をきいた。ヂェラルといふ名は邪教徒にあるのぢや」

「でもあの人は屍骸なんぞに殺される人ぢやない」

彼女は強情に盾ついた、さうすることが戀人の命を救ふことでゞもあるかのやうに。

「まだいふか。これ女、ようきけよ。彼奴がどれほどの腕前があらうと呪法には勝てぬぞよ。

屍骸には鬼が憑くのぢや。逃げもかくれもできぬのぢや。もしいち相手に行力でもあつて殺せぬ時は戻つてきて呪法の行者を殺す。いづれか殺さねばおかぬのぢや。わしは命がけの呪法を行ふた。それもおのしのぢや。屍骸は戻つてこなんだ。どうぢや、彼奴はどうでも死んだのぢやい。それ、これが彼奴の墓ぢや」

「え、ではほんたうに……」

「殺したがどうした。切りこまざいても飽き足らぬわ」

彼女はぐらぐらとした。凄しい女の怒に燃えた。彼女はのしかゝつてし ふところへぐわつとくひついた。僧犬は不意を襲はれて仰向けに倒れた。 つかとおさへながら死物狂に頭をふつて喉笛をくひちぎらうとした。そして僧犬がげえげえとか すれた聲を出してはねかへさうとも がくのをどこまでも嚙みふせてゐた。たうとう 息がとまつた。ぐたりとしてころがつた。彼女は血みどろの口をはなした。そして戀人の墓石に 身をすりつけて悲鳴をあげた。それから彼女は犬にも人間にも通じない獸人の言葉で濕婆の神に 祈つた。

「濕婆の神様、私をあはれと思召すならばこの身の穢れを淨め、今一度もとの姿にしてどうぞ あの人のそばへやつてください」

獸人の祈は神にとゞいた。彼女は突然五臟六腑がひきつるやうな苦痛を感じ背中を丸くしてぎ

やつと吐いた。わる臭い黒血がだくだく出た。それは體内をめぐつてた僧犬の血だつた。同時に 彼女はくるくるとまはつてばたりと昏倒した。

やゝあつて彼女は我にかへつて立ちあがつた。そしてなにか一皮ぬいだやうな氣のする自分の 身體を撫でまはした。それは完全な女の姿だつた。彼女は狂喜の叫をあげた。それは人間の聲だ つた。彼女は濕婆に感謝すべく地にひれ伏した。その時大地がくわつと裂けて彼女は倒に奈落の 底へ堕ちていつた。闇から闇へ、戀人のそばへ。

大正十一年三月八日　初稿

菩提樹の陰

十何年まへのことだつたらう。私は膝のうへにのつてお話をねだるかはいいもののためにひとつの童話をかいてやつたことがあつた。そののち月日がたつうちに彼女は私の膝からおりていつのまにか立派な娘ざかりになつてゐた。で、私はその童話を彼女の年にふさはしく書きかへてやらうとおもつていつものたどたどしい筆をはこんでるあひだにはやくも彼女は若い母となり、自分のかはいいものを膝にのせるやうになつてしまつた。いま巴里の假住居で搖籃でもゆりながら遥にこの話の完成を待つてるであらう若い母に希くは平安と喜樂のあらんことを。

昔印度のアマラーヴティーの市にナラダといふ老年の彫刻師があつた。彼はもともと凡庸の彫刻師だつたところへいつたいにその道の榮えたこの地方にはほかにいくらも腕ききがあつたゆゑ彼は永年こくめいに仕事をつづけたにもかかはらずいつかう名聲もあがらず、したがつてその日ぐらしといふほどではないがかなり餘裕のない生活をしてゐた。併しさすがに彼も藝術家にはつきもののうぬぼれだけは人なみにもつてたのでなにかひとつ仕上げるとそれを自ら出來るだけ高く評價して

「これはなかなか安うは賣られんわい」

といつて鼻をうごめかしたが、それが月日のたつうちにはきまつて

「わしのものもせめてもう一割がた高く賣れてくれたら」

といふ嘆息にかはるのであつた。

ナラダには十四になるチューラナンダといふひとつぶ種の娘があつた。彼女の母親は產後のわづらひがもとで永いあひだ床についたあげく死んでしまつたのだが、そのいまはのきはに彼女は自分に對する愛と子供の幸福のためにチューラナンダをまま母の手にかけないやうに　とくりかへしくりかへし懇願した。誠實なナラダはそのことを忘れずにたまたま家婢の手をかりるほかにはまつたく男の手ひとつで苦勞してチューラナンダを育てあげた。彼は年をとつてからのこの

ひとり子、不仕合せな母なし子が眼にもいれたいほど可愛くもあり、ふびんでもあつた。さうして彼のやうな地位におかれた父親が誰しもするやうに亡き母親の分までの愛情をもつてその子をまつたばかりか、自分が妻に對してそそぐべきであつたはずのそれを父親の愛と形をかへることによつて知らずしらず慰められ、かつその報を求めてるのであつた。そのうへまた彼は己には薄く恵まれて、しかも老いさきの短い身にはもうどうしやうもないこの世の中の精神的物質的の幸福をならうことなら娘の將來によつて賠はれようといふ望をもつてゐた。そして幸か不幸かチューラナンダは彼のさやうな無分別な期待を理由づけるほどその母に似てみめよく、すこぶる氣だてのよい子だつた。ナラダは暇さへあればチューラナンダを膝へ抱きあげ、どことなく猛じみた鬚むしやの顔をいたいけな頬におしつけて困らせながらおきまりの

「チューラナンダ　おまいは誰の子だ」

をいつて彼女がもう飽きあきしてる答へをくりかへさせた。

「お父様の子」

彼は顔をはなして己の眼の下にあふむいてる小さな口からもともと自分の教へたこの答へをきくのがなにより嬉しかつた。そのわかりきつた答へがそのたんびに新しい喜びを齎した、あだかもそれによつて彼が自分の全き幸福をそのうへにおいたところの親子といふ關係がいよいようちかたく固められ、神聖にされでもするかのやうに。そのつぎには彼はそのおなじ口から、それはチューラナンダにとつては父からおぼえさせられたほんの「名まへ」で幻でさへも影でさへもなかつた母といふものの名をいはせて、彼にとつては決して空しい「名まへ」ではなかつたところのものにこの水いらずのまどゐのいはば仲間入りをさせるのが常であつた。

ナラダにはプールナといふひとりの內弟子があつた。彼が弟子入りをしたときには貧しいながら兩親ともそろつてたのが間もなくそのへんいつたいをあらした疫病のために二人ともあと先になくなつて、ほかに身寄といふもののない彼はまつたくの孤兒になつてしまつた。ナラダは自分の娘の身のうへにひきくらべて心からプールナを憐んだし、今はもう賴るものもなくなつたプールナのはうでもナラダを實の親のやうに慕つていつた。彼は忠實で熱心なばかりかほんとは師匠よりずつとよい天分をもつてるのをナラダはその性質のよいはうばかりに氣がついて天分のはうはすつかり見のがしてしまつた。そんなふうで世間的にはいつかう恵まれなかつたナラダの家も家庭的には大きな缺けめはありながらにまづ圓滿であり、幸福でもあつた。プールナはチューラナンダよりは三つ年うへの十七だつた。

ナラダの家は町筋からすこしはなれてあまり大きくない川のそばにあつた。流はそのへんでおんもりと淀んで油のやうな水がいつぱいに滿ちてゐる。その岸に近くひと株の古い菩提樹があつて逞しい幹のまはりに無數の氣根を柱のやうに立てならべ、そこへいろいろな葛蘿がもうもうと攀ぢのぼつてさまざまな形をした葉のあひだに色の濃い花を咲かせてゐる。またなかば草地のう

へに、なかば水のうへに蜿蜒とひろがつた枝からは蘭や羊齒の類が簑のやうに垂れさがり、ひらめきやすい鏑がたの若葉は紅に梢を彩つてゐる。そこは豪奢な羽毛をもつ熱國の鳥の樂壇となり、水をのみにくる家畜の涼みどころともなつた。そしてなにかのもの日には木皿に乳糜や果物などを盛つてその木の神樣に供へるのがかはいらしいチューラナンダの役めで、彼女はそれを子供が自分の氣にいつた役めをいひつけられたときの喜びと矜りをもつてはたすのであつた。かぎりなく豐な印度の自然は世に惠まれることのうすい老彫刻師にもかやうにその富をわかつてをしまなかつたが、人人はそのあるじよりはよつぽど目だたしいこの木の緣によつて誰いふとなくナラダの家を「菩提樹の家」と呼びならはした。

プールナは師匠の仕事の手つだひや雜役の暇にはその木蔭でむくむくと蟠つた根つこに腰をかけ、今はない兩親のうへを思ひふけるのが習ひだつた。その追慕はよりかかつてる太い幹が後ろへ倒れてゆくやうな賴りなさを彼におぼえさせたけれども彼はさうしてもはやすがりよるよしもない人のかはりにはかない追慕の胸に抱かれてるのがせめてもの慰めであつた。彼の境涯はその氣もちからも、みめかたちからも年にふさはしい若若しさを奪ひさつた。その善良な顏は憂鬱に、どことなし分別くさくみえた。市外に近く聳えたつ岩がちの丘陵を、そのうへを迦留羅鳥の姿に飛んでゆく空の雲を眺めながら彼の思ひつづけることは決して靑春の夢や歌ではなかつた。それはわが身のこしかた行く末、世間、生活、運命、そして生や死であつた。

まだほんのたわいのない子供であり、かつ不幸な仕合せには生れおちるから母の味を知らなかつたチューラナンダは亡き母に對してプールナのするやうな追憶も思慕ももつことはなかつた。彼女はその木蔭に湧きたつ花の香に醉ふ蝶蝶をつかまへたり、縞のある尾をひいてぬらめきある く蜥蜴を追ひかけたり、おとなしい羊の子に靑草をとつてたべさせたり、靜な淵に石を投げてひろがつてゆく波紋にうち興じたりした。またプールナの手のあいてるときには彼を誘ひだしてどちらかといへばさうした遊び仲間には不向きな彼に鬼ごつこの相手をさせたりもした。彼女はしやいできやつきやつと叫びながら、つかまるまいとして汗みどろになりながら、あだかも樹神がこの可愛らしい子のためにしつらへておいてくれたかのやうに誂へむきにならんでる氣根のあひだを走りぬけ、走りぬけ、息をきらして逃げまはつた。そのやうに栗鼠みたいに跳ねまはるチューラナンダのかたきになつてふざけてることはとかく沈みがちなプールナにとつて樂みでないまでもいい氣ばらしにはなつた。

しかし二人のあひだにはをりつまらぬいさかひがはじまつた。種をまくのはいつもチューラナンダで、彼女は自分より年うへながら家來格であるプールナを思ふやうに統率し顚使しきれず、遊びにおいても優越を示し得ないところからじりじりするのだつた。さうしてますますかたくなに主人風をふかせて手まへがつてな駄駄をこねたり、いひがかりをいつたりしてプールナを困らせた。彼女は　待つて　といつてるのに彼がつかまへたといつてぷりぷりした。また自分で

木の根につまづいてころんだのを彼のせゐにしてあやまらせようとしたりもした。そしてぢきにお父様にいひつけてやる　といつて彼を睨んだ。正直一途なプールナはそんな場合に手ぎはよく相手の鋒先をそらすことはしえずに、まともに、不器用に抗議をしたり、いひわけをしたりしていよいよ彼女の氣嫌をそこねた。時には彼女はほんとに泣きだして父のところへ訴へにゆくこともあつたがちやんと事の起りを見ぬいてるナラダはいつも笑つてとりあはなかつた。どうかしてあんまり泣きつかれると當惑さうに

「よしよし　わしがプールナを叱つてやる」

などといつてぶよぶよな顔から涙をふきとつてやることもあつた。しかし月がたつにしたがひ二人はそんなたわいのないいざこざもおこさなくなり、そのかはりにはうちとけていつしよにふざけあふこともなくなつてしまつた。

さうかうするうちにもプールナの腕はさすがのナラダにも氣がついたほどめきめきと上達した。ナラダは師匠らしい喜びを感じた。

「これでこそわしも骨折りがひがある。わしもいつなりと心殘りなく目をつぶることができるといふものぢや」

今はもういつぱし彼の話し相手であつたチューラナンダにむかつて彼はそんなこともいつた。それをきくのは彼女にとつても嬉しいことであつた、父のためにも、プールナのためにも。ナラ

ダはかやうにプールナを認めたけれども己と弟子の天分の相違については自惚れと凡庸が相變らず彼を盲目に殘しておいた。

プールナは暇をぬすんで小さなものをこしらへてみた。そしてもしいくらかにでもなることがあればその金はみんな師匠のはうへいれてしまつた。ナラダはプールナを下男がはりに追ひつかつてるのではあるし荷厄介といふ譯でもなかつたのだが、くらしに追はれてもゐ、それにすこし吝嗇なはうでもあつたので僅なことでもさうさうされるのがことのほか氣もちがいいのだつた。

チューラナンダの胸にならんだ禁斷の果はいつしかまとはれた衣のかげにふくらんだ。彼女のなりのよい肩のゆりかたにも、かはゆい足の運びにも娘らしいしながそふやうになつた。評判のよい彼女には緣談があとからあとからあとあつた。なかにはナラダの身分につりあはぬほどの口もあつたが彼のあまりに高い理想がいつも話をこはしてしまつた。彼はかんじんの娘よりは附きもののの自分を評價しすぎてゐた。そしてかねがね彼がわけまへをもたうとしてる將來の幸運について法外に望が大きかつた。

チューラナンダはその年ごろの者が誰しも感ずることのあるあのあてのない青春の思慕を感じてゐた。そしてその恰好な對象を、それは彼女が失つたといふよりはむしろもつたことがなかつたところの母において見いだした。けれどもそれは彼女がまつたく知らないものであるゆゑに彼女の感情は行きつくはてがなかつた。そのうへそれは未來永劫彼女の知ることを得ないものであ

るがゆゑにあいにく理不盡になつかしかつた。彼女はプールナのするやうに菩提樹の蔭へいつて山をみたり雲をみたりしながら母を思つた。

「お母様」

彼女はまだ一度もほんたうに呼びならつたことのないその名を呼んで涙を流した。

それと同時に彼女は似よつた境涯にあるプールナに對して心からの同情をもつやうになつた。プールナのはうでももとより深く彼女の身のうへに同情をよせた。で、彼らは間がなすきがなあの木蔭でくりかへしひとつことを語りあつて飽くことをしらなかつた。彼らは「思慕」といふ骨身にしみて冷い霧につつまれながら「同情」といふ溫い飲みものを汲みあふのがこよなく嬉しかつた。それは味のかはりに匂をかぐやうなもので缺けたものの補ひにはならなかつたけれどもそれによつて彼らはよく慰めあひ、慰められることができた。かりそめになか絶えた二人の親しみは過ぎし日のそれとは別の形において涼しい菩提樹の蔭に蘇つた。

プールナはチューラナンダの緣談のあるごとに憂鬱になつた。どこまでも身のほどを忘れぬ彼は彼女の手を得ようなどとは夢にも思はなかつたけれども彼女を失つてしまふことはやつぱりつらかつた。彼はこの美しい、やさしい同情者と別れて己ひとりもとの寂しい孤兒、もとよりはいつそう寂しい孤兒として殘されるに忍びなかつた。彼はいつまでもかうしてゐたいと思つた。が、そんなことの望めないのはわかりきつてゐた。そこで彼は緣談のあるたびに居ても立つてもゐら

れない思ひをした。

「あたしどこへいつたつてお氣の毒なあなたのことは忘れはしませんわ」

チューラナンダはプールナの胸のうちを思ひやつてさういつたけれどそれは彼にはすこしも慰めにはならぬ感謝をおこさせるにすぎなかつた。終にひと夜彼は思ひあまつて彼女のまへに身を投じ悶えに悶えてさんざんに泣いた。そのとき彼女は涙にむせびながらきつと心をきめていつた。

「プールナさん　安心してちやうだい、あたしいつまでもあなたのそばにゐますから。だからあなたもあたしを慰めてちやうだい。あたしたちは兄弟になつてお互に慰めあひませう。あたしはどこへもゆきません。きつとゆきません。さああなたももう泣かないでちやうだい」

彼女の言葉はプールナを狂喜させたけれどもしかし分別のある彼をおちつかせはしなかつた。それは盲目な感情の幼い叫びにすぎない。さやうないひぶんがナラダのまへにとほるはずはない。またとほつたからとて自分がおめおめ彼女をひきとめておけた義理ではない。彼は師匠が彼女の將來にいかに大きな望をかけてるかをよく知つてゐた。

親のない二人の胸のうつろに湧いて溜つた同情の泉は性の酵母によつていつしか芳しい戀のうま酒とかはつてゐた。彼らは「知らぬふり」と「うち消し」と「ためらひ」のいく日ののちたうとう菩提樹の蔭に戀をかたつた。と、これまで底燃えしてた情火が一時に燃えあがつた。戀。戀。戀。明けても暮れても戀であつた。彼らは戀に生きた。彼らはその戀を耳に

たのしむべく蜜語をささやきあつた。さうして戀をするものみながかこつやうに人の言葉のもどかしさをかこつた。彼らは語りつくせぬ戀を舌に味ふべく狂しい口つけをした。が、そこにも脣のひまからのがれさる意地の悪い戀があつた。彼らは終に戀を目にみるべく紀念の浮彫をこしらへることにした。チューラナンダがモデルに、プールナがそれを像に刻むのである。で、その構圖について相談しあふのがまた彼らの嬉しい仕事になつた。二人は飽くことない戀をもるなにかの構圖でもあるかのやうにあれかこれかと氣迷ひしたあげくチューラナンダがいつものやうに菩提樹の蔭に立つて慕ひよる小羊にひとたばの青草をやつてるところにきめた。プールナは翌日から多くもない暇をぬすんで一片の大理石の屑に一所懸命それを刻みはじめた。二人の戀は美しい石のおもてに彼の手によつて、彼女の姿においてそれが日に日にすこしづつ出來あがるのを彼らは戀がそれだけづつ成就するやうな氣もちで眺めるのであつた。ところがその大切な紀念像がやうやく輪郭だけできたときにひと晩チューラナンダは俄に高い熱をだして意識を失つたなり死んでしまつた。あまりに不意な、あまりに大きな衝撃に打ちのめされてプールナもナラダもはじめは涙すらこぼせなかつた。さうして幾日かののち彼女の死がやつとはつきりとわかつたときにとりかへしのつかないものに對する嘆きとあこがれがしみじみと彼らの胸の底から湧いてきた。彼らは心から悲しみをわかちあつた。彼らはこれまでも隔てのない師弟であり假の親子でさへあつたのだがこのときほどお互の心がしつくりと融け

あひ結ばれあつたことはなかつた。戀人を、ひとり子と望を、おのおのちがつたものを失つた彼らはそれゆゑのおなじ心の闇のなかでしつかりと抱きあつた、彼らは共に美しいチューラナンダを失つたゆゑに。

その悲嘆の淵から浮みあがつてやうやくすこし氣力を恢復したときにナラダは忘れても忘れきれないチューラナンダの思ひ出に彼女の大理石像を刻まうといひだした。プールナも心からそれを喜んだ。それは等身の立像といふことになつた。ナラダは夜となく、晝となく、神氣をつくしてその仕事をした。この凡庸な彫刻師に恩愛の情がはじめて神興をもたらした。そして拙い老腕を不思議に力づけた。彼の眼は耀いた。彼は別人のやうに鑿を使つた。プールナはその鑿をとだり、不用な石の角をとつたりなどの雜役のほかには手を出すことができなかつたけれどもそのほかにもうひとつもつとも重要な役めを果した。それは父親の老眼がうかうかと見のがしたり見わすれたりしたチューラナンダの體の細かい特徴を睫毛のはしさへ見きはめずにはおかない戀するものの若い眼の助力によつて思ひつかせることであつた。ナラダとプールナの心はこの仕事においてまつたく幸福に溶けあつた。

ある時ナラダは手をやすめてやうやく形になりかかつた彫像を見あげながらいつた。

「ほんにあれがゐてくれたならわしらはどれほど仕合せぢやつたらう。ゐない今となつてつくづくとそれが思はれてならぬ。わしはあれをおまいにめあはせ、おまいにこの家業をゆづつて安

樂に餘生をおくるつもりぢやつた」

さういふ彼は實はまだ一度もそんなことを考へはしなかつたのだがこの場合かういふことをいつてお互の感情を一層かたく結びつけるのは愉快だつたし、それに本人は二度とふたたび歸つてくる氣づかひはないのだからなんの不都合も起るはずはなかつた。プールナはそれをきいて飛びたつ思ひをした、知れきつた空な喜びだけれども。かつて彼が渇するばかりにしながらもかひない夢とのみ思ひあきらめてたそれはもはやきれいにさめはてた今となつてかへつてまことであつたことがわかつた。さうしていづれかへらぬことながらやつぱり夢よりはまことのはうが頼もしかつた。內氣な彼はナラダにさういはれたところで己と彼女のあひだの戀をさてうちあけるほどの氣にはなれなかつた。が、それから彼はこれまでよりもなほなほ深く親身にナラダを敬愛するやうになつた。

二人はそのやうにして寂しいながら幸福に頼り頼られて仕事をつづけた。日に日に彼らの戀愛が無情な石にしみ入つてそれを彼女の形にやはらげてゆく。とはいへどうしてもその冷な胸に溫い血の波をうたせて彼女を生氣づけることはできなかつた。あたりにならんでる多手多頭の怪しい神神の像は手をふり、足をあげ、或は怒り、或は笑ひながら角角しい石くれが美しい乙女の姿になつてゆくのを眺めてゐた。

幾日ののち誠心をこめたナラダの仕事が終つて貴い彫像が形になつたときに待ちあぐねたプー

ルナのところへやつとのことで役がまはつてきた。それは彼女に磨きをかけることであつた。これまでの齒痒い、かひのない手助けにひきかへて彼はそれしきの仕事を恰も正身の戀人が彼の手にまかされたかのやうにもの狂ほしい熱心をもつてやつた。それは熱心よりはむしろ愛執であつた。彼は息の絕えたものを呼び生けようとする人のやうにみえた。磨きがすんでいよいよ彫像が完まれた石くれを絹の衣と乙女の肌にしようとするやうにみえた。

成したときにナラダはそのまへに立つてしげしげと眺め入りながら思はず會心の笑みをもらした。彼はこよない愛子の紀念像をもつと同時に己の腕についての盲目な自負心の充分な滿足を得た。

プールナは眼のまへにかたときも忘れない戀人の立ち姿を見た、ひきまとはれた衣の襞（ひだ）のしたにふくらんだその胸を、玉飾りをつけたたをやかな頸を。彼は戀に痴れてナラダがそばにゐないときにはひそかに彼女を抱き、彼女に思を語つた。さはいへ彼女の眼は彼を見ず、可愛い耳朶は彼の囁きをきかず、蒼白い脣は彼の口つけに對して死人のそれのやうに冷たく結んでゐる。彼はいつしか心うつつけてしらずしらず戀人を待ち設けてたのに彼女はいはば彼の眼と手觸りにだけわづかに歸つてきたにすぎなかつた。彼はこのまじものめいた彫像に對して焦躁を感じた。彼はそれに堪へられなくなつた。父の愛がその子の型に滿足したところに戀する者は命をもとめてやまないのであつた。彼は戀に悶えた。戀に病んだ。戀に狂つた。ある日彼はチューラナンダの冥福を祈るといふ口實のもとに町から程近い耶摩の祠へ詣でて　彼女の魂を彫像に還してたまはれ

といふだいそれた願をかけた。およそこの世に生をうけた者は轉輪聖王といへども拒むことを得ない神の掟をかへて、しかも肉體をはなれてすでに久しい女の魂を名もない彫刻師の刻んだ石に還さうとする痴れ者の褻瀆に對して耶摩は恐しい怒を發した。耶摩はその日プールナのうたた寐の夢にあらはれて彼を威しながら

「愚な者よ　汝チューラナンダの魂を還さんとならば命をもつて命を贖へよ」

といつた。どこまでも戀に迷つた若者はわるびれもせずただちに己の命をささげる旨を答へた。そのうへおくれさきだつ嘆きのないやうに二人の壽命をおなじにとまで願つた。耶摩は厚かましい祈願者をして自ら褻瀆の報いを知らしめんがため乞はるるままにその願をききいれた。プールナの命數は十四年であつた。それゆゑあらためて七年づつの命が彼らにさづけられる。チューラナンダの魂は明日の朝の最初の光とともに大理石の像に還るであらう。ただこの神の祕事をいづれの時、いかなる處においても、夢にも、ひとり言にも口にもらすならばたちどころに最恐しい神罰を被るぞ　と。

プールナはさめるやいなや彫像のところへいつた、それがすぐにも生きて、彼をおいていつてしまふかのやうに。彼はそこに坐りこんで彼女が蘇つたときのあらゆる場合を想像し、あらゆる計畫をめぐらした、先の先までも。さうして定められた七年の後には彼らの幸福——彼は幸福ばかりを豫期した——が間違ひなく終るのだといふことは頭には考へてもすこしも彼の心を暗くすることができなかつた。ナラダはプールナの有頂天な樣子を彫像のすばらしい出來ばえに醉つてるのだと思つて頗る上氣嫌だつた。

「プールナ　自分の嫁樣のやうにさう見とれるなや」

さういつてナラダは笑つた。プールナはと胸をつかれた。そして火の出るやうに赤くなつた。プールナはその晩まんじりともしなかつた。そしてやつと夜半をすぎたばかりに居たたまらなくなつて仕事場へしのんでいつた。彼はまつ暗ななかを彫像のはうへさぐりよつて胸をどきつかせながらそつとさはつてみた。それは人の戀をも、神の力をもなみするやうに冷たく心なく立つてゐる。彼は神の誓を危むかのごとく床のうへにひれ伏してくりかへし耶摩に祈つた。さうしてまるで自分が產み出されるかなぞのやうに緊張して夜の明けるのを待つた。

やがて紺黑の夜があけて朝の光がさしそめたときに、大地が深い眠りからさめて豊な胸に生の脈動がはじまつたときに、滿天の星が影をかくして廣野の露になごりをとどめたときに、林の鳥がねぐらをたつて蘇利耶の讃歌をはじめたときに、そのときに彫像のなかにも生氣が湧いてしづかに五體をめぐりだしたかのやうにみづみづしくみえた。プールナはそら恐しさにわなわなと慄へながら出したい手を握りしめ息をころして見つめた。それは今しも殻を出た蟬の子がはじめて見、はじめて聽き、はじめて觸れるこの世界に怖ぢをののくやうに短くちぢれた翅をふるはせるとみるみるそれが扇みたいにひろがつて美しくそびらを蔽ひ、白じろとした體がいつとはなしに

色濃くなつてゆくやうに、ちやうどそのやうに彼女はさし昇る太陽の光から新しい色彩の粋をば吸ひとつて肌は貴い黄金の色に染み、髪は嵐の雲をみだし、瞳は耀く黒玉をきりばめ、脣はもえたつ珊瑚をきざんで、纏つた玉の飾から、緒から、衣のはしまでもみなそのままことのものとなつてしまつた。プールナは見てはならぬことを見たやうな、あつてはならぬことが起つたやうな氣もちに襲はれた。と同時にそのかしこい神祕の正體にさはつてみたいといふ欲望が抑へきれなくなり、をののく手をのばしてすんなりとふくらんだ彫像のはぎのあたりをそうつとつかんだ。と、彼はさつと顔を赤くして手をはなした。それはもうみだりにさはつてならぬものになつてゐた。プールナは飛びたつ思ひをやつとおさへその場にひれ伏して耶摩に感謝をささげた。彼が起きあがつたときに彼女は殻をでた雛みたいにきよときよとしてゐた。

「チューラナンダ」

プールナは矢庭に抱きしめて狂氣のごとく口つけた。彼女の脣は熱かつた。胸の果は甘やかに柔かつた。彼女はながい眠からさめたやうに深いため息をついた。そのとき彼女の滑な舌からまろびでた最初の言葉がなにであつたかは老いせぬ印度の太陽にとへ。そのやうにして彼女の魂は彫像にかへつたけれどもそれはもとのチューラナンダではなかつた。ただその生きうつしの彫像が姿にふさはしい十七の乙女として新に生をうけたにすぎなかつた。飛びさつた魂は誓のままにかへつてもなかたえた戀は蘇らなかつたのである。さりながらたとへ戀は蘇らずとも彼女はプル

ーナにとつてはまさしく戀人であつた。が、彼はこのとりつくしまもない見ず知らずの戀人をどうすればいいのかわからなかつた。彼はさやうに途方にくれながらも彼女のそばをはなれたくなかつた。人まぜをしずにいつまでも二人きりでゐたかつた。そこへナラダが彼女の聲をききつけてはひつてきた。

ナラダにとつては二重の喜びがあつた。彼はなくした娘の申分のないかはりをもつたばかりでなく自分が世にも稀な名人だといふ自信と名聲を得た。この彫像が生きだしたのは一心こめた彼の技の力によるものだと人も自分も思つたのだ。かうした不思議は誰でもが話にだけはききなれてることゆゑ今目に見たところで驚きこそすれ疑ふ者はひとりもなかつた。ナラダは有頂天だつた。世間は彼を祭りあげてありつたけの敬意を表した。そして禮をつくし辭をひくくしてあとからあとへと仕事を頼みにきた。實のところその後はひとつも動きだした彫像はなかつたのだが人たちはめいめい自分に眼がないと思はれまいために彼の作とさへいへばなにもかも大變な名作にしてもてはやした。で、ナラダはこれまでとはうつてかはつて裕福な、鼻息のあらい男になつた。

「どうぢや、これみいや」酒にでも醉ふとナラダはよくこんなことをいつた「世間の奴らもたうとう目があきよつた。技ほど恐しいものはないでな。これでわしが永年の辛抱もやうやう報いられたといふものぢや。世間の奴らびつくりしよつて金をもつてくるわもつてくるわ。これまでの罰があたらんやうにとぢやろわい。さうしてこのわしに恐れ入りよることはどうぢや。ぢやが

プールナもようきけよ。これといふもわしが天分のことはさておいてつまりは勉強と信心のお蔭ぢやぞよ」

そのくせさういふ彼はあんまり信心深いはうではなかつた。氣のいいプールナはかうした見當ちがひの自惚れのためにナラダを侮つたり惡く思つたりはしなかつたけれど、それにしても師とも父とも力にしてるものの愚しさがあまりにもまざまざしく目にみえてなさけなくもあり、頼りなくもあつた。彼らの心はその喜びにおいては悲しみにおけるがごとくふたつなく結ばれることができなかつた。彼らはおのおの別別の喜びをもつてゐた。

彼女はふさはしくチューラナンダと名をつけられた。彼女は幸福だつた。世界は彼女にとつてまつたく新しく、かつもの珍しかつた、それに人がその年頃になるまでにはすでになにほどかは經驗しなければならなかつたところの人生の憂さつらさをまつたく知らなかつた。ナラダとプールナはもとより心からの愛をそそいだ。世間は自分に不都合の生じないかぎりおほかた善良なものを愛するといふ古い習慣にしたがひ多分の好奇心をまじへた好意をもつてこの無垢で無邪氣な、まだすこしも傷けられない少女を歡迎した。チューラナンダのその父——ナラダは自分を父と呼ばせた——に對する敬愛は言葉につくせぬほどのものであつた。彼は深い深い親の愛情——そのときは彼女にむけられたものではなかつたけれども——と非凡の技術をもつて、今彼女が目のあたり見るやうな硬い、冷たい、角角しい、非情な石くれからこのやうな美しい體をこしらへて嬉

しい、樂しい、喜ばしいこの世界に生れさせ、そのうへなくなつた我が子にかへてこれほどまでにかはいがつてくれる。彼女はたびたびナラダの頸にすがりついていつた。

「私ほんとになんでもお父様の仰しやるとほりにしますわ、私の一生はお父様にささげますわ、だつてお父様はこんなに私をこしらへてこんなに幸福にしてくだすつたんですもの」

そんなときにプールナは妬むというわけではないが寂しい思ひをした。彼女に形を與へたのは——それさへ彼の助力がどれだけ役だつてるかしれない——ナラダだけれどそれに魂をいれたのは自分だ。彼女は親の愛よりはむしろ戀から生れたのだ。それを彼女はつゆ知らずナラダにばかりあのやうにする。プールナはいくたびこの言葉を喉まで出しかけたであらう。

「おんみを生かしたのは私だ。私の戀だ。命だ」

と。しかし神に對する恐れが危くそれを堰きとめた。彼はもとの戀人を姿さへそのままに今目のまへに見ながらそれをさうとその人にうちあけられぬところに堪へがたい寂寥と焦躁を感じた。

ナラダはもとのチューラナンダのかたみの品を悉く新しい娘に與へた。プールナは祕めた戀をささげた。彼はもとのチューラナンダの話をきくのがなによりも好きだつた。ナラダがその愛と技によつて彼女をこしらへてくれたならばその人はその肉體によつて彼女に美しい型をさづけた。彼女は不思議な緣でその人の顏かたちをもつてこの世に生をうけたのであつた。さう思へば彼女はしみじみとしてもとのチューラナンダがなつかしかつた。さて、彼女が刻まれるときにさうだ

つたやうにこの場合にも愛のたどたどしいところを戀が苦もなくなしとげてプールナはナラダよりもずつとよい語り手だつた。それはプールナにとつて嬉しいうへに貴い仕事だつた。彼は戀人の像を刻むことができなかつたけれどもいはばその別の像、別の姿を餘の人ならぬ彼女の胸に刻むのであつた。で、この語り手と聽き手はその宿緣ふかい物語の色絲によつて知らず知らず日に日に解きがたく結びつけられていつた。プールナはたびたび彼女を菩提樹の蔭にさそつてもとの彼女が立つたやうに立たせ、もとの彼女が坐つたやうに坐らせて、奇しくもふたたびかへつてきた過ぎし日の夢を夢みながらつきせぬ物語のをだまきをくりかへしてゆく。あるとき彼女は涙をうかめていつた。

「私もとのチューラナンダさんが生きてゐらしつたらほんとにどんなに仲よくするでせう、チューラナンダさんがそんなにいいかたなら。さうしてそんな綺麗な……」

さういひかけて彼女はさつと顏を染めた。

「でも私どうしてもチューラナンダさんとはお逢ひすることができない運命なのだわね、もしそのかたが生きてなら私はこの世にゐないはずのものですもの」

彼女はさびしさうにさしうつむいた。彼女は自分で自分を慕つてるのだといふことを自ら知るよしもなかつた。プールナは彼女のさうした言葉をきくと巧なわなにかかつてうまうまと騙されてるうぶな子供をみるやうないぢらしさをおぼえた。おとなしい羊の子は彼女をもとのチューラ

ナンダだと思つて喜んでその手から青草をたべた。淵にすむ魚はまたもや水にうつる見なれた影に口つけるべくしづかに浮みあがつてきた。人間のなまじひな智慧があやまるところに彼らの無智がかへつてまことを見た。

ある日チューラナンダはいつもの木蔭の柔い草の茵（しとね）に腰をおろし兩膝をたてて流のはうへ傾斜してゆく岸に足をならべながら、その膝のうへに肱をのせて頰杖をつきながらうつとりとして思ひにふけつてゐた。彼女のかういふ日常のしぐさはもとのチューラナンダそつくりにこしらへられた彼女の五體の構造からしておのづからその人のしかたに生き寫しになつてゆくのであつた。梢をはなれた花がときどき水に落ちてそのままそこに浮ぶとみえながらかすかな曲線を畫いていつとはなしに岸をはなれてゆく。彼女の思ひもそのやうにしづかに流れてゆく。彼女はもとのチューラナンダを思つてるのである。彼女はたまたまその人の死を緣として生れた。二人はいはばはじめからこの世とかの世とに宿命的にかけへだてられた雙生兒であつた。彼女は夢のなかの幻をさぐるやうなおぼつかなさ、不思議さをもつてもとのチューラナンダをなつかしんだ。

プールナはふとそれをかいまみた。かはいらしい頸筋や、圓くなつた肩や、弓なりに撓んだ背中や、すらりとした脛や……彼はそのままのもとのチューラナンダをみた。彼は愛情が湧きおこつた。彼は堪へられなくなつた。彼はけどられぬやうに家を出、ぬき足さし足しのびよつて矢庭に後ろから二の腕のへんをつかまへた。そして不意をうたれたチューラナンダが　あつ　といつ

てふりむくひやうしにそのみづみづしい頬にきつく口つけた。

「まあひどい。びつくりしたぢやないの」

彼女は顔を赤くした。それに答へずにプールナはいつた。

「なにをそんなに考へてゐるの」

「あたしまたあのチューラナンダさんのことを考へてゐたのよ。さうしたらあんなことをしてゐたやうな氣がするわ」

……折角いい夢をみてたのに目がさめちまつたやうな氣がするわ」

さういつて彼女はちよつとプールナを睨めるまねをした。で、それから仲のいいさかひがはじまつた。そしてああのかうのの末が心なく彼女の晝の夢をさました罪の贖ひにプールナはあの作りかけの浮彫を完成して彼女に贈ることになつた。これはプールナにとつてこよない嬉しい仕事だつた。かしこくも耶摩の通力と己の命がつなぎとめたところのあのなか絶えた戀のかたみをふたたび刻みつづけることはおなじ戀を二度するやうな氣もちがした。否、それよりもいつさうあやしく心ときめくものがあつた。チューラナンダにとつてもそこに二重三重の喜びがあつた。自分が慕ひなつかしむ人の彫像がそのまま自分の像として、そしてもとのチューラナンダに對する自分の思慕の、同時にプールナと自分とのあひだの戀の記念として役だつのであつた。プールナは空しくうちすてられてあつたあの浮彫をとりあげてまたもや一心不亂に刻みはじめた。

裕福な名高い彫刻師のひとり娘で、人柄がよくて美しいチューラナンダには緣談が降るほどあ

つた。ところが彼女よりも先にナラダのはうがそれに耳をかさうとしなかつた。彼のうぬ惚れは今は方圖がなくなつた。彼はかつて自分がもつてゐなかつたときにはそれを口にしようとせず、たまたま口に出せば出來るだけ貶さうとつとめた身分とか身代とかいふことをひどくやかましくいふやうになつた。あとからあとへとある緣談もそれらの點の不釣合を理由にひとつもうけつけなかつた。彼は相手の身分や身代がよければよいほど自分のはうをより以上のものにするやうな見かたを案出した。彼は自分をせいぜい高く評價することによつて過去の自屈を賠はうとする淺はかな成上り者根性を遺憾なくあらはした。

そんなぐあひでプールナとチューラナンダはしばらくのあひだ安穩に彼らの夢を見つづけてゆくことができた。が、ある日のことナラダはチューラナンダを呼びよせいつにない上氣嫌でいつた。

「チューラナンダ　今度こそはいよいよ見つかつたぞ。まことに申分ない相手ぢやでわしもうん　といはうと思ふがどうぢや」

それは彼のところとは段ちがひの、おなじ町でも五本の指に數へられるほどの家で、さしも思ひあがつたナラダもさすがにそれ以上を望まれなかつたくらゐの結構な話であつた。彼は永年の夢想が終に實現に近づいたことを感じた。

「チューラナンダ　まあそばへ來いや」

彼は喜びのあまり彼女を抱きしめようとした。彼女はその手をすりぬけてプールナのところへ飛んでいつた。ナラダはそれを嬉しさゆゑの羞らひだと思つて後姿を見送りながらひとり笑つた。

プールナは仕事のひまを菩提樹の木蔭に横になつてうとうとしてゐた。チューラナンダは彼を呼びおこして手短に一部始終を話した。二人はそのうちナラダにお互の戀をうち明けてと思ひつつ一日のばしにのばしてたうとうこんなはめになつてしまつたのを悔んだけれども戀にくらんだもののならひとして彼らはなほ一縷の望を失はなかつた。この眞心さへわかつたなら　この戀の力で訴へたなら　彼らもまたそんなことを考へた。併しもしもしも二人の願ひがきかれなかつたら　彼らはその場合の約束もした。で、彼らはナラダのところへいつてそのまへにひれ伏し一切をうち明けて涙ながらに許しを乞うた。そのうへプールナはナラダに彼がかつてもとのチューラナンダをプールナにめあはせるつもりだつたと語つたことを思ひ出させようとした。あまりに意外な事の展開にこのときまであつけにとられてこもごも嘆願する二人の顔を見くらべてたナラダは——彼は世間によくある、戀愛と物質とをどうしても離して考へることができないたちの人間だつた。彼は自分の娘がプールナのやうな者に手を與へるなぞとは思ひもかけなかつた——それをきくやいなや忽ち我にかへつて、戀人をかばつてすがりつくチューラナンダをつきはなしていきなりプールナに躍りかかつた。彼は忿怒に蒼ざめた顔をひきつらせながら詬びいるプールナをひきすゑて所きらはず打ちのめした。彼は幾十年の窮迫と屈從の後に自分の腕一本の力でつか

まへて——と彼は思つた——今ひと息で完全に我物にならうとする仕合せを蟲のくふやうに知らぬまにだいなしにしてしまつたその青二才の頭蓋骨を微塵に打碎いても飽き足らなかつた。彼は聲をふるはせて猛りたつた。

「この大かたりめ。永年養はれた恩義を忘れてだいそれたことをする奴ぢや。ずぶといど畜生ぢや。そのうへわしのいつたこととはなんぢや。いけづうづうしいにも程がある。その時はその時、今は今ぢや。貴樣のやうな石切り職人にわしの娘がやれると思ふか。大ぬすとめ。さつさと出てうせろ」

さういつて彼は泣きつくプールナを家からつき出してしまつた。ナラダはもとの自分をいはれたのにひどく屈辱を感じた。そして今の場合都合の悪い言葉をもち出されたのがことに腹立たしかつた。彼はまたそこに泣き伏してるチューラナンダにむかつていつた。

「あんなものにたぶらかされるたはけめが。おぬしはわしの造つたものぢやでわしが勝手にする。わしが造つたものならどこへ賣らうが棄てようがそつちに言ひぶんはないはずぢや」

彼のプールナに對する氣もちには「養育」といふことが始終ついてまはつたやうにチューラナンダに對しては、さやうな溺愛のうちにも「自分がこしらへた」といふことを忘れることができなかつた。彼は心の賤しくさもしい者の醜い怒りかたをした。

チューラナンダは今はじめて人生の苦といふものを知つた。彼女は今はじめて人間が彫像より

も幸福でないことをさとつた。彼女は自分に命を與へた父の妙技が恨めしかつた。彼女はもとの彫像のままでゐたかつたと思つた。さうすれば夜も晝もないやうに愛も戀もなかつたであらう。とはいへ彼女はもはやその彫像にかへることはどうしてもできなかつた。それは彼女の體が石になれないよりは彼女の心が石になれなかつた。彼女はその大理石の胸に人のなさけを消しがたく刻みつけられたのであつた。彼女は昔から多くの人がそこに迷つたやうに愛と戀とのふた道に迷つた。そしてそのいづれをもすてかねて、いづれをもすてないために死といふ別の大きな道を撰んだ。プールナもおなじ思ひであつた。

夜がふけてからチューラナンダはそつと家をぬけ出して星あかりをたよりに菩提樹の蔭へ忍んでいつた。

「プールナさん」

聲をころして呼んだ。

「ここです」

朕しあはせておいたとほりプールナが待つてゐた。二人は聲をたよりにさぐりよつてしつかりと抱きあつて泣いた。戀に命をすてる者にもまだ住みあきぬこの世に別れるのはさすがに寂しかつた。彼らはたがひの肌や薫にしるばかりで眼にはみあはぬ抱擁になれてはゐたけれどもこのやうな苦い涙でするのははじめてだつた。彼らは濡れた頬をひしと觸れあつてながいながい接吻を

かはした。さうしてそこに膝まづいて師であり父であるナラダのはうにむかひ先だつてゆく罪を詫びた。彼らの心はナラダを見棄てはしなかつたけれども體は彼を後にしてゆかねばならなかつたのである。さて二人は立ちあがつて後の世までもはなるまじく最後の手をとりあひながら足さぐりに流のはうへ降りてゆかうとしたときにチューラナンダは後ろから著物のはしをぎゆつとつかまへられて　あつ　と思はず聲をあげた。彼らはぎよつとした。ナラダだと思つた。が、ぢきにその鼻息と匂でいつもの羊だとわかつた。チューラナンダは手さぐりにその頸をかかへて人にものをいふやうに別れを惜んだ。眼のまへにせまつた死が人と獸のけじめを忘れさせた。彼女は心せくままにとらへられた著物をひきはなして行かうとした。と、すぐ他のはしをくはへた。それをやつとはなさせるとまたほかをくはへる、心あつて彼女をひきとめようとするやうに。で、彼女は著物をひき裂いて涙ながらに羊の頸をとある細い幹にゆはへつけた。さうしていよいよ水際までもうひと足といふところまで進んだときにそれまで黒ぐろと空を凌いできらめく星をちりばめてた菩提樹の梢が巨人の臂をまげるやうに一度にさーつと撓んできてみるみる行くてに垣をつくつてしまつた。けなげなチューラナンダは自らたじろぎつつも恐れをののいて我にもあらぬプールナにいつた。

「これはいつも私がお供へ物をするこの樹の神様が私たちを憐んで助けてくださるのではないでせうか。もしさうならこの神様にお願ひすればお父様のお心もとけて私たちの戀がとげられる

にちがひない」

彼女の聲は希望に高まつた。しかしプールナは彼女をさへぎつてうち沈みながらいつた。

「さうぢやありません。これには深い仔細があるのです。しかしそれはどうあつてもいふことはできないのです。ただ私たちはもう死ぬことをあきらめなければならない。私たちはたとへ火のなかへ飛びこんでも死ぬことはできないのです」

チューラナンダは訝つてその譯をたづねた。が、いま目のあたり神の誓のあらたかさを見たプールナにはその譯がいはれないばかりかそのいはれない理由さへも口にすることができなかつた。チューラナンダはまたこのいまはのきはに、怪しくも思ひがけなくも二人のうへに落ちかかつてきた不思議な宿命の因縁をそれを知りながらいふまいとする戀人の口からきくことができないのが堪へられなかつた。彼女は　この場合になつてそれはあんまりつれない　と恨んだ。すつかりうち解けてくださらないのがさびしい　ともいつた。よい思案がでるかもしれないものを　ともいつた。彼女はプールナの胸にすがりついて涙にむせんだ。プールナは途方にくれた。そしてかきくどきかきくどくチューラナンダをかかへて茫然としてゐるうちに彼の頭にふとこんな考が浮んできた。自分はもう死ぬことができないし、自分の戀は許されるきづかひはない。といつて年老いた師匠をすてチューラナンダを奪ひさつてガンダルヴ婚をする氣には到底なれない。自分はこれから先親がはりの師匠からは忘恩と憎まれ、戀人からは眞實を疑はれながらぬけ殻のやうに

生きながらへてゆかなければならないのだ。そしてもしもしもこのことがもとになつてチューラナンダが自分をすてるやうなことになつたら！　彼女がひとのものになるやうなことになつたら！　彼はたまらなくなつた。彼には生きながら奈落の底へおちてゆくよりも今の立場のはうが苦しかつた。その苦しみが彼をしていま目のあたり見た神威のあらたかさを忘れさせた。否、それを忘れはしなかつたけれども彼はまたかう思つた。なにもかもいつてしまはう。そして神慮のままにならう。どんな罰でもうけよう。さうしたなら憎みはとけ、疑ひははれて、師匠もチューラナンダもせめて自分を憐んでくれるだらう。で、彼は心をきめた。彼は師父の憎みと戀人の疑ひよりは神罰のはうを擇んだ。彼は終に神への誓を破ることのかしこさを忘れたのであつた。プールナはチューラナンダに夜があけてからナラダのまへですべてをうちあけようと約束した。チューラナンダは心をのこして家へかへつた。

翌朝早くプールナはいま一度ナラダのまへに出た。ナラダはまたしても手荒くプールナを追ひ立てようとするのをチューラナンダはプールナとともどもその足にすがりついてわづかのあひだの寛大を哀願した。プールナは自分がもうこのうへ迷惑を師匠にかけようとするのでは毛頭ないといふこと、ただこの町を去るまへに最後の暇乞ひをし、これまでの高恩を謝し、かつ自分の愚からこのやうな不幸な結果を齎した事の經緯を懺悔告白して思ひ殘りなく行くとろへ行きたいのだといふことをつげた。ナラダはもともとプールナその者が憎いといふよりは世間的な仕合せの

はうが一層可愛いのであつたし、それにこの際何等實損のない寛容を示すのは己の自尊心を滿足させる所以でもあつたので不承不承にプールナの懺悔をきくことにした。が、なほ片意地に一旦勘當した者は二度と家の中へ入れることはできない　といつてプールナを燒けつくやうな地べたに坐らせた。そこでプールナはもとのチューラナンダとの戀のはじめから彫像に對するもどかしいあこがれ、思ひあまつての耶摩への祈願、チューラナンダの還魂、古いあらたな戀、そして昨夜の不思議までの一部始終を殘らず話してしまつた。さうして最後に五體を地に投じて涙にむせびながら訴へた。

「私は恩しらずと思はれ、不實な者と疑はれるのがつらいばつかりに神への誓を破りました。私は今にも神罰をうけて地獄へ墮ちてゆくのでせう。この場になつて私にはなんの望もありません。ただどうか私を憐んでください。私は心からあなたがたを愛してゐます。どうか私のいふことを信じてください」

プールナの言葉は血が出るやうであつた。が、それをきいたナラダは前の日にもまして猛りたつた。

「默れ。貴樣はわしの娘ばかりか名譽にまで疵をつけようとするか。出てゆけ。外道めが。今後この町に姿を見せたが最後どんなめにあふかもしれんぞ」

ナラダはプールナの言葉が信じられなかつたばかりか己の自負も、權威も、名聲も、富も……

すべての幸福がそこにかかつてるところの自分の腕を無視されたのがむちやくちやに腹が立つた。プールナのいふやうだとするとナラダはこの間までのただの彫刻師にかへらなければならなかつた。チューラナンダはチューラナンダで父のそばからさもさもさげすむやうに笑ひながら

「プールナさん　あなたはこれまでひとを騙していいやうにしておきながら今更そんなしらじらしい作りごとをいつたつて、ごらんなさい、あなたは誓ひを破つたから罰をうけるといふけれど塵つぱひとつ飛びはしないぢやありませんか。神樣こそなによりの證人です。誰がそんな嘘つきの、下手くその、意氣地なしの相手になるものですか……」

彼女は仕事場へかけてつてもう出來あがるばかりの浮彫をもつてきた。

「さあ、あなたはあなたの大事な人といつしよにどこへなりとおいでなさい。穢はしい」

さういつて彼女はそれをプールナのまへへ投げつけた。彼が心をこめた浮彫はむざんにもまんなかから二つに割れた。プールナは言葉もなくそれを拾ひあげてすごすごとそこをたちさつた。彼は今はじめて神罰の恐ろしさを知つた。

プールナは名まへをかへてクリシュナー河をわたり、ゴダヴリ河をこえ、流れ流れて遠い海のはたなるカリンガパタムの市にかくれ、習ひおぼえた彫りものをなりはひにからくもその日を暮してゐた。それを招いたのは己の愚かと心弱さであつた。恨むべき人もなく、訴ふべき神もない。それだけまた彼の悲しみはやるせがなかつた。彼は毎日毎夜遙

に後にしてきた故郷のかなたにむかひ五體を地に投じて耶摩の神に懺悔をした、雨の日も、風の夜も、病をおしてさへも。彼はただの一度も怠ることはなかつた。そのやうにして彼は約束された七年がたどたどしいながらも一日一日と終りにちかづいてゆくのをせめてもの慰めにした。さうしてその過ぎてゆけばこそ大切な一日が日輪のめぐるよりは懺悔によつてからくも過ぎさつてゆくかのごとく一日もそれを怠ることができなかつた。月日のたつうちにプールナは心の惱みと、貧しい生活と、休みない勤勞のために影法師のやうになつてしまつた。さうかうするあひだにはやくも一年がすぎて彼が最初還魂の祈願をかけたその日が近づいた。彼は急に思ひたつて道みち食を乞ひながら故郷の耶摩の祠へと懺悔の參拜に旅立つた。さうしなければどうにも氣がすまなかつたのだ。で、日をかさねてはるばるなつかしい生れ故郷にたどりついたけれども彼は鳥が巢に、獸が穴に歸つたほどの安けさも見いだすことができなかつた。彼は故郷の人人に對してほんとに罪を犯したもののやうに野犬の彷ひあるく夜をまつてこそこそと市に入つた。理不盡にそこから追ひ放たれたがためにいつそう忘れられぬものとなつた故郷はさりげなく冷にしづまりかへつてゐた。彼はひどく人目をおそれながらもまた誰ひとり自分を見とがめて言葉をかける者のないのが寂しかつた。彼は耶摩の祠へはひつた。さうして涙ながらにくりかへしくりかへし心からの懺悔をしてるうちに食べる物にもことをかきがちななが い旅の疲れのためにそのままうつうつとまどろんだ。そして夢をみた。彼は一所懸命祈願しようとするのだがどうしても聲が喉をでな

い。それを出さう出さうと身をもだえてもだめなので泣く泣く泣く神像のはうにあざりよつてその足にすがりついた。そのとき神像が面を和げてわづかにうなづくやうにみえた。彼は狂喜の叫びをあげた。そして目がさめた。彼は恐る恐る神像をうかがつたがそこにはなんのかはりもなかつた。で、彼は心に疑ひながらもいくたびとなく神像のまへにひれふしたのち祠をでた。いい月夜だつた。彼は思ひ出のおほい町のはうを眺めやつていつまでもたち去りかねてたがやうやく氣をとりなほして祠のまへをはなれたときに、そこにたつた一本ぬきんでて參詣者の目じるしとなつてるマンゴーの木の根もとにいつのまにか棄てられてすやすやと眠つてる子供を見いだした。汚い毛布にくるまれてゐる。プールナは最初それが目につきの動物的な驚きを感じた。そしてすぐ次の瞬間には自分の貧乏を考へないわけにはゆかなかつた。併しそのまま見すてるのはそのかはいさうなものを僥倖と情ある人の手に殘すよりはむしろ野犬や豺(やまいぬ)の餌食にすることなのを思つて悪いことでもするやうに手をふるはせながら不馴れなしかたで子供を抱きあげた。子供は目をさましてけたたましく泣きだした。プールナは人目を憚つてあたふたと足を早めた。

プールナが家に歸つたときに人たちは自分ひとりの始末にも困つてる彼がそんな足手まとひを背負つてきたことの無謀を笑つた。といつて彼にはつけてやるべき一文の里扶持もなかつたし、素姓もしれぬ棄子を扶持もなしにひきうけるもの好きもなかつた。そのうへ己の境涯から極端に

涙もろくなつてる彼はあと先もなく子供を手ばなす氣になれず、なにかの緣あつて自分の手にわたされた子供は自分に養はれるのがつまりいちばん仕合せなのであらうとも思つた。それは榮養のわるい女の子だつた。貧しいうへに無經驗であり、それに男手ひとつの彼は言葉につくせないほどの難儀をしたけれども幸ひ日がたつてたためにどうぞかうぞそだつていつた。彼はそのためになにまれ仕事のありしだい身を骨灰にして働いた。自分の食べる物も食べなかつた。人の情にもすがつた。堪へがたい恥も忍んだ。そんなにしてるうちに彼は子供に對して日に日に愛著が深くなつてゆくのをおぼえた。その匂、その柔み、無心な笑顏、無垢なかた言が互の胸から胸へと絶ちがたい絆をかけてゆく。誰とてなつくべき者もない子供はプールナばかりを慕つた。誰とて伴侶をもたないプールナは子供にこよない慰めを見いだした。彼はそれによつて心の寂しさと、痛みと、かへつて生活の苦しみさへも和げられた。彼は愛するものにチンチャーといふ名をつけた。

そのやうにして日がたつうちにプールナは自分の膝のうへでやうやく形の整つてゆくチンチャーの顏かたちのどこかに戀人の面影がみえるやうな氣がしだした。たとへばかはいらしい耳朶のくれかたがさうだ。ぱつちりした眼のかたかただけ二重まぶちなのがさうだ。と思ひつつもプールナはまた自分の愚さを笑はずにはゐられなかつた。彼は故鄕を追はれてあてもなくここへさまよつてきた頃にはこの國の女たちの後ろ姿がともすれば戀人のそれにみえて胸をときめかしたことを思ひだした。けれどもチンチャーの身たけがのびるにつれて彼女はプールナのなまなかな分別を嘲るかのやうに頭から足へ、顏から姿へと、ちやうどあの菩提樹の芽生えが葉をだし、莖をのばして、はじめは似てもつかなかつた親木の形になるとほりに終にチンチャーはチューラナンダの生きうつしになつてしまつた。一方にプールナはまた別れてのちの戀人の消息を嘘もまことももつきまぜた人びとの噂をとほしてかなり細に知る機會を得た。昔噺にでもありさうな不思議な彼女の評判はいかなる時、いかなる處においても好奇心といふものを失ふことのない「人間」の耳から口をとほつて遙にこの町へまでもつたはらずにはゐなかつた。プールナはそのなかからこれだけのことを確めることができた。彼女が恩しらずの弟子にそそのかされてまうけた——と人はいつた——子供は澤山の扶持と緣切りの約束をもつてあるあまり裕でない家へ貰はれたが不仕合せにもその後人の手から手へと渡ることになり、そのたんびに扶持の金だかもへり、貰ひ手の身分や人柄も惡くなつて終には最後の引受け手であつた賤しい階級の者のために無慈悲に棄てられたなり行くへしれずになつてしまつた。彼女はその美貌と、多額の持參金と、他人のためにあやまられたその境涯に對する同情のため身分ちがひではあるがすこしはなれたグンツールの市のある確かな商人のところへ迎へられることになつた。彼女の結婚は思ひ設けぬことでもなく、かねて覺悟もきめてたのではあつたけれどもそれと知つてはプールナは今更足の下が崩れ落ちてゆくやうな力なさをおぼえた。彼は已に一度失つたものをふたたび失ふやうな氣がした、しかも命

を。彼の心はいひやうもなかつた。棄てられた者のみしる。彼は己の命をもつて徒に呪咀と、悪名と、漂浪と、貧苦と、失戀を買つたのであつた。彼は彼女の死のまへの、死ののちの短い夢のひとときを思つて涙を流した。しかしその沸きたつ苦惱の底に坩堝（るつぼ）のなかの黄金のやうに彼にひとつ貴い喜びがのこつた。それはチンチャーが自分の子にちがひないといふことであつた。彼はチンチャーの顔かたち、チューラナンダの生んだ子供の行くへしれずになつた月日や前後の事情、殊にはあの夜の夢を思ひあはせてチンチャーを耶摩から授つた自分の子だときめた。もしさうならば——彼はさう信じたのだが——耶摩は散りすぎた青春の夢の花をもとの枝にかへすかはりにその花のむすんだ果を彼にさづけたのであつた。彼は遙にアマラーヴティーの町の方を伏し拜んでいくら感謝しても感謝しきれない感謝を耶摩にささげた。チンチャーに對する彼の愛情はいはばこれまでよりもより鮮明な輪郭と實質をもつやうになつた。そのいぶせき草ぶきの小屋をもとの日は照さなかつたけれどもそこにしづかになごやかな月光があふれた。プールナはかつてチューラナンダとあの菩提樹の蔭の戀がたりに　もしも二人のあひだに子供ができたならばこの思ひ出のおほい木の名にちなんでピッパラヤーナと名をつけよう　とちかつたことを忘れずにチンチャーにピッパラヤーナといふ新しい名をあたへた。ピッパラヤーナ！　その新しい呼び名が彼の小屋に祝福の樂の音となつた。ピッパラヤーナ！　彼はその名を呼んでは子供を胸に抱きしめた。とはいへその思ひがけぬ喜びのうちに坩堝のなかの白金のやうに彼に溶

けがたいせつない懺悔がのこつた。チューラナンダの魂が呼びかへされてからのすべてのこと、それはたぶんかやうな傷ましい破綻にをはるやうにさだめられてあつたところのことはみな己の盲目な戀の愚しいすさみから起つたのであつた。とりわけ彼の心を苦しめたのは靜な彼女の魂——善きもの淨きものの死後天上の樂みをうくべしとの教に僞なくば——を惱ましい人界に呼びかへしてこの思ひをさせたこと、可憐なピッパラヤーナを無慘な宿命の孤兒——その悲みは彼自ら知りすぎてゐる——に生み落したことであつた。彼はその生るべきものを幸ならしめる神のごとき自信なくして徒に己の慾情の滿足のためにこの世に生れいでしめることの罪深さを思つて恐れ慄いた。そこで彼はすでにそのあらたかさを骨身にしみて知つた耶摩の名を呼んで戀人とわが子、年老いた師匠の短い今生と永い後生のために祈願をこめた。

チューラナンダの夫ヤシャスの家はもともとグンツールの町でも相當なところであつたけれども今を盛と時めいてるナラダの家とは比べものにはならなかつた。しかしチューラナンダには世俗的な意味での大きな缺けめがあるのでナラダは望まれるままに彼女をヤシャスのところへやることにした。それにつけてもナラダは赦しがたいプールナの忘恩を呪ふのであつた。ヤシャスは海岸の商人から舶來の品物を仕入れて內地のはうへ賣りさばき、內地で買ひ集めた品物を海岸の商人へ渡すといふ商賣をしてゐた。ナラダがその商才を見込んで彼のために、かたがた自分の慾も手傳つてかなり大きな資本を出すことになつたのでヤシャスはどんどん取引の手をひろげた。

資金の潤澤に加へて幸運と、度胸と、機敏と、勤勉……のために彼はとんとん拍子に當つた。彼はたびたび自ら大きな隊商の頭となつて遠くよその王の國國へまでも出かけ、また人手をまたず直接港へ行つて外國の船と取引するやうになつた。さうして幾年ののちにはすばらしい富を成した。ナラダは頗る上氣嫌だつた。彼は最初からヤシャスが眼がねにかなつてたのだといつた。いつもの癖をだして　自分の日頃の信心がこの果報をもたらしたのだ　ともいつた。彼にはもうなんの不足もなかつた。

耶摩の恵か、人の心のさだめなさか、チューラナンダはプールナのことや生み落した子供のことを忘れてしまつたわけではなかつたけれどもたまたま思ひ出したところでそれはひとごとのやうに彼女を苦しめなかつた。それほどまた彼女は現在の幸福に醉つてるのでもあつた。彼女の夫は有爲なばかりか立派な、愉快な男だつた。彼は彼女を溺愛した。なにごとも彼女の思ひのままだつた。さうして世間も誘惑者なるプールナを憎むほど善良な彼女に同情し、親愛し、またもてはやしもした。で、彼女も子供がないといふことをのぞいてはその父と同じくなんの不足をも感じなかつた。

そのやうにしてチューラナンダにとつては歡樂の、プールナにとつては戀と、貧苦と、懺悔の幾年がすぎた。そのあひだにナラダは世間の盲目がそれを與へ、己の盲目がそれを受けたところの非常な名聲と富とを樂しみながら死んだ。それはプールナにとつてせめてもの慰めであつた、

嚴しい耶摩の掟のために、今に敬愛をつづけてるその師の存命のうちに無實の汚名をすすいで、もとの師弟にたちかへることができなかつたのはかへすがへすも口惜しかつたけれども。

さうかうするうちにいよいよ彼の待ちこがれた命終のときがせまつてきた。彼にはもういささかの執著をものこすほどのかひのある生活もなかつたし、それにあまりにも奇異に變轉極りない生涯をへて、その喜びにも、悲しみにも、神の强さと人間の弱さを傷ましいまでに身にうけ知つた彼にはすべてをうちまかせて諦めはてた觀念のほかになにもなかつた。しかしいくらあきらめてもあきらめきれないのはピッパラヤーナのことだつた。それはこれまで痛んでやまない心の刺であつたのだが、今この絶體絶命のときにあたつてその痛みはひしひしと體にまでもこたへた。彼はこの父母よりはむしろ宿命によつて生み棄てられたやうなあはれな子を己の死後に托すべき身寄りも知るべももたないばかりか、彼らの不信と無情が手から手へと轉轉させて終にその父の手に彼女を落したところの世間の人に賴る氣には微塵もなれなかつた。彼は途方にくれたあげく子供を自分の手で先立たせることも考へないではなかつたけれど思ひきつてそれをしおほすにはあまりに心弱かつたし、それにさうしただいそれた人間のはからひがかはいいものの後生を幸福にするかどうかもわからなかつた。プールナはピッパラヤーナを膝へのせてじーつと頬ずりをした。彼のとぢた瞼からとめどもなく涙が流れた。

プールナはかねがねこの日のために乏しいなかから貯へておいた僅の路用の金と新しい著がへ

をもつて最後の懺悔と祈願をはたすために子供をつれてアマラーヴティーの市へと旅立つた。彼が子づれの旅の重い足をひいて市の郊外へたどりついたのは定められた日の前の夕べであつた。彼は遙にあの菩提樹の蔭からそこへ流れてくる川にはひつて旅に汚れた體を淨め、用意の著がへを出して自分もき、子供にもきせたのち程近い耶摩の祠へと急いだ。彼はピッパラヤーナに教へて神像のまへにひれふさせ、自分もそのそばに五體を地に投じて生き殘る子供のためにながいながい祈禱をささげた。彼の祈禱はさながら膏血であつた。

「神様、私の最後の祈願をおききください。どうぞあはれなこの子をお守りください。私はこれを人手にまかすことはできませぬ。私はこれを神様の思召しにまかせます。どうぞこの子を憐んでやつてください。これは私の愚かのためにこの世に生れて苦勞をしてをります。この後もどれほど苦勞をすることでありませう。これは明日から親のない子になるのであります。それを思へば私はこれまでも生きたここちはありませんでした。神様、私はもうどうすることもできませぬ。どうぞどうぞこの子に冥加をたれてやつてください。愚な父のお願ひでございます。いまはのお願ひでございます。私の地獄の苦しみは十倍してもいとひませぬ。どうぞこの願ひをおききくださいます。そのうへにはチューラナンダにも冥加をたれてやつてください。あれにもなんの咎もありませぬ。みんな私の愚かからおこつたことであります。どうぞあれの命のあるかぎり幸福にすごさせてやつてください。さうして先の世にもあれの魂に仕合せがありますやうに。なにもかもみんなこの私の所行であります。私は懺悔いたしますうぞふびんな母と子を憐んでやつてください」

プールナがやうやく起きあがつたときにピッパラヤーナはたわいもなく寢入つてゐた。彼はそれを幸に彼女をそのまま耶摩の神慮にまかせ自分だけかねてのもくろみどほりあの菩提樹の蔭へいつてきめられた時のくるのを待たうかと思つたが、そのときふとまだ母のあることをさへ知らないピッパラヤーナに息のうちに母と呼ばせることはできずともせめて顏なりと見させてやりたい、見せもしたい、また自分もできるならばひと目なりとあひたいといふ氣がむらむらとおこつて押へきれなくなつた、彼はわれ知らず命の瀨戸ぎはにのぞんでる戀人の胸の平和を自分たちとの思ひがけぬめぐりあひによつていたづらにかきみだすまいとかたく心をきめてたのであつたけれども。彼は子供を呼びおこし頸に手をそへていま一度神像のまへに跪拜させたのちまたも眠りこけさうになるのをおぶつて耶摩の祠を出た。夜であつた。折しも地平をはなれたばかりの滿月の光がほのかに彼らを照した。

チューラナンダは滿月の夜を樂みながら廣間のはしにて竪琴をひいてゐる。彼女の夫は商用のため大勢の仲間といつしよにながい旅に行つたのである。彼女のかたはらには氣にいりの侍女のスンダリが坐つてゐる。庭前の泉水には月天の愛で慈むといふ夜咲きの白蓮がしづかな夢のや

うにひらき、岸をとざす大木の木だちのなかに梟が時をおいては啼いてゐる。

こーほー　こーほー

今しも梢をはなれた月が豊にやはらかな光をおくつて二人の影を鮮に床ににじませた。をりをり風ともいはれぬかすかな空氣の流が花の香をはこんで彼女の肌のただよはせる白檀の薫をかきみだす。彼女は今や女の盛である。その體は昔の快いのびのびしさをうしなはないけれどもむきだしの頸や腕も、白絹にまとはれて繩牀のうへに曲つた足も見ちがへるほど脂づいてはちきれさうな圓みと彈力をもつてゐる。新しい血は湧きかへつて纏つた玉の緒にまでもかよふであらう。ふくよかな左右の手は巢にをどる蜘蛛のやうに二十五の弦をわたる。

戀は甘し　韶子のごとし
げにもかぐはし　鬱金の花のごとし
乙女らよ　おんみらはポラの山の麓のごとし
げにもうつくし　クリュシナの流にあそぶ銀鱗のごとし

彼女はふと手をとめて、侍女のはうを顧みていふ。

「スンダリや　おまへはもうこの歌をききあきておしまひだらうね。でも私はいくら歌つてもたふつもりよ。だつて鳥だつていつもおんなじ歌をうたふぢやないの」

歌ひたりないのよ。ほんとに私こんな好きな歌はありはしない。私いくつになつてもこの歌をうさういつて彼女はころころと笑つた。

乙女らよ　スーリヤの駒は足はやし
チャンドラの鵝はその翼とし
ときこと風のごとし　追ひてとらふることかたし

そこへ別の召使がはひつてきた。

「奥様　ただいま子供をつれた若い巡禮がまゐりまして……」

妨げられたチューラナンダはやや不氣嫌に眉をよせながら言葉のをはるのを待たずにいつた。

「どうしたの今じぶん」

「はい。アマラーヴティーまで行きたいのだけれど路用のお金がなくなつたから子供のお護りを買つてほしいつて、たいへんあらたかなのだからぜひ奥様にお願ひしていただきたいつて、なんていつても歸りません」

「いやな巡禮だね。お護りなら家にはたくさんあるんだから。すこしお金をやればいいぢやな

いの。それでもいかなければ男たちを呼びなさい」
「あ、それからね、私になにか果物をもつてきておくれ」
彼女は氣嫌をなほして歌をつづけた。

されば乙女らよ　髪にも花の華鬘をつけ
腰に黄金の瓔珞をまとひ
わかき日に　うらわかき日に　わかき日に
森に　園生に　池のほとりに
うるはし人の腕にまかれて　しとと青春の歡樂に酔へよかし

そのとき召使がさもをかしさうに笑ひながらマンゴスタンをいくつか銀の皿にのせてもつてきた。
「奥様たうとう歸りました。みんなに叱られてほろほろ涙をこぼしながら歸つていきました」
「まあ、でも手荒なことはしまいね」
「はい。ただみんなして押し出してやつただけでございます」
「さう。それならいいけども」

召使は退いた。チューラナンダは竪琴をおき、果物のひとつをとり、輪切りにされた皮をとりのけてまつ白な實をたべはじめた。歌に熱した舌のうへに品よい甘みと酸みをのこしてあは雪のやうに溶けてゆく。
こーほー　こーほー
「スンダリや　なんていいお月夜でせうね。こんな夜はいつまでも明けないでゐればいいのにね。ほんとにお月様が東から西へ、西から東へといつたりきたりしてゐてくだされば」
さういひながら彼女はにつと笑つて空を見あげた。清い光が抱擁するやうに滿身に照りかかつてゐる。
「奥様はいいお月夜でさへあればいつも御氣嫌でゐらつしやいますね」
「ほほ、おまいにもさうみえて。私もとからお月様が大好きなのよ。私お月様をみてるとどうしようかとおもふほどいい氣もちになつかしくなつてしまふのよ。私はあの蛾のやうな翅があればひとりでお月様のところへ飛んでつてしまふでせうよ……」
小さな白い蛾が月光のなかにちりちりと翅をふるはせながらしづかにしづかに舞ひあがつてゆく。はげしい子供の泣き聲がきこえる。
そこへまた召使があたふたとかけてきた。
「奥様さきほどの巡禮が子供をおいてつてしまひました」

「まあ子供を」
「今あんまり泣聲がするので出てみましたらまへの椰子の木に縛りつけてありました」
「かはいさうに。さうして巡禮はどこへいつたかわからないの」
「アマラーヴティーのはうへ行く路を捜してみましたが見つかりませんでした」
「困るわね。どんな子供」
「まだ小さな女の子でございます。それほど汚いなりもしてをりません」
「さう。つれてきてごらん」
やがてだまされてやうやく泣きやんだ子がしやくりあげながら召使に手をひかれてきた。痩せこけて發育のわるい體に粗末ながらさつぱりした麻衣をまとつてゐる。
「なんでも河むかうからきたらしいのですがなにをきいてもまだよくわからないのでございますよ」
「かはいさうにねえ。さあこつちへおいで。もう泣かないでもいいよ」
さういつてひきよせようとすればまたもや泣きだしさうに口をゆがめるのを
「ああなにか……おお、これをあげようか」
と皿の果物をひとつとりあげて氣嫌をとつた。子供はひもじかつたのですぐにそのはうに氣をとられてじつと目をみはつた。で、チューラナンダはそれを子供にやつた。子供はうまさうにがつ

がつとたべはじめた。
こーほー　こーほー
子供は口をやめて怖ぢけるやうな様子をした。
「怖かないのよ。梟だよ。耶摩の神様のお使ぢやないの」
チューラナンダはしづかに子供を抱きよせて濡れた頬を著物のはしでふいてやりながら女らしい細心をもつて子供の頸にかかつてる護り袋にしては大きすぎる袋に目をつけた。さうしてその口紐をゆるめてなかの物をとりだした。そこにはあの浮彫が、昔の姿が割れたままに仕上げられてあつた。チューラナンダはしげしげと子供の顔をみた。姿を。手足を。髪の毛から爪の先まで。
チューラナンダの胸はたかまつた。彼女は聲をふるはせながらいつた。
「おお　おお　いい子だね。私がかはいがつてあげるからね。かはいさうに。私のいふことがわかるかい。かはいい子や。おまいの名はなんていふの」
「ピッパラヤーナ」
やさしくいたはられたためにやつと安心した子供はさう答へてかすかに笑顔をみせた。
「ピッパラヤーナ？　おおピッパラヤーナ！　まあピッパラヤーナ！　さうピッパラヤーナつていふの」
チューラナンダは父の名母の名をきかうとはしなかつた。

短篇

(二)

「あら。この子は眠いのよ。いま泣いてたと思へばもう居眠りしてゐる。ピッパラヤーナや今夜は私と寐るのよ。おまいたち　この子は私が寐かせてやるよ。さあ」

チューラナンダはぐつたりする子供をかかへて目を見あはす召使たちを後に立ちあがつた。

朝になつた。人びとは臥榻（ぐわたふ）のうへに横つたまま冷い石像となつたチューラナンダの胸にひしと抱きしめられて乳首をふくんだなりピッパラヤーナの息が絶えてるのを見出した。さうしてあの菩提樹の蔭にはプールナが木の幹によりかかつて死んでゐた。

昭和三年十一月二十日

島守

これは芙蓉の花の形をしてるといふ湖のそのひとつの花びらのなかにある住む人もない小島である。この山國の湖には夏がすぎてからはほとんど日として嵐の吹かぬことがない。さうしてすこしの遮るものもない島はそのうへに鬱蒼と生ひ繁つた大木、それらの根に培ふべく湖のなかに蟠つたこの島さへがよくも根こぎにされないと思ふほど無慚に風にもまれる。ただ思ふさま吹きつくした南風が北にかはる境めに崖を駈けおりて水を汲んでくるほどのあひだそれまでの騒しさにひきかへて落葉松のしんを噛む蠹（きくひむし）の音もきこえるばかり靜な無風の狀態がつづく。

この島守の無事であることを湖の彼方の人びとにつげるものはをりをり食物を運んでくれる「本陣」のほかには毎夜ともす燈明の光と風の誘つてゆく歌の聲ばかりである。この人は昔村が街道筋にあたつて繁昌した頃の御本陣のあととりだが、時勢の變遷や度かさなる村の災厄のため落魄して今はここでも小さいはうの數に入る一軒の家のあるじにすぎないけれど通り名だけはもとのまま「本陣」と呼ばれてゐる。本陣は村ぢゆうでいちばん人がいいといはれるとほりおそら

く國ぢゆうでも最も善良な人のひとりであらう。その善良朴直のゆゑに私は心からこの人を愛する。性來、特に現在甚だ人間嫌ひになつた私にとつてもこの人が島へくることは一尾の鱒が游いできたやうな喜びを與へる。——追記。その後いちど逢つてしみじみ昔話でもしたいと思ひつつをりを得ずに幾十年かたつうちに本陣は亡くなつた。殘念なことをした。家も新築されてあとが榮えてると人づてにきいて喜んでたのだつたが。

たまさかに參詣の旅人をのせてくる村の人は芝蝦や烏貝といつしよにこの寒村のつまらぬ名物のひとつとして私の話をするのであらう。彼らは影法師のうつるのも忘れてそつと障子の孔から覗ひたり、または森のなかを歩いてるところを見つけて變化ものの正體でも見あらはすやうにじろじろと見まはしたりする。多くの者は私の不興げな顏を見て目くばせをし囁きあつてそこそこに歸つてゆくが、なかには好奇心にかられ煙草の火をかり宮の名をたづねなどするのにかこつけておづおづ話しかけるのもある。彼らの問ひは鼠の道のやうにきまつてゐる。こんな島のなかにゐてなにをするのか、寂しくはないか、恐しくはないか……これらの問ひに對して私はなんと答へたらよいであらうか。住むべき家もないゆゑ鴨のやうに迷つてきてこの島に宿をもとめたのである。寂しいといへば都會の喧噪のうちにすこしの理解もない人びとの群にまじつてるよりも寂しいことがあらうか。ここは湖の離れ島である。さりながら日月は追ひあふ水鳥のごとくにして朝夕に島を照して忘れることはない。私はこれらの木や、鳥や、蟲や、魚やと友となり、兄弟となつて美しい姉妹の神を送り迎へてゐる。私は今ひとりになつて世のさかしらな人びとに愚かな己の姿を見る苦しみからのがれ、またいかに人間はつまらぬ交渉をつづけんがために無益に煩はされてるかを知つた。世のあさましいことは見つくしまたしつくした。今はただ暫しなりとも清淨な安息を得たいと思ふ。旅人よ、私はおんみらがかしましいだみ聲をもつてこの寂寞を破ることをおそれるばかりである。

島にひとりゐれば心ゆくばかり靜かである。讀書と冥想のひまにはわが穴を嗅ぎまはる獸のやうに島のうちを尋ひあるく。その芙蓉の花びらに虻のとまつたほどのこの島にも雨につけ風につけなにかの新しいことがないでもない。栗の枝が吹き折られたこと、鳥が蜆の殻を落していつたこと……それらは島の歷史に殘るべき大きな出來事である。またをりふし夢野の神はしのびやかにきて冷かな私の眠りをいろいろの繪筆に彩つてゆく。それらのことを私は日にちこまごまと日記につけておく。これはこの島に隱れて島守の織る曼陀羅である。

明治四十四年九月二十三日

簑笠をつけた本陣に船頭をたのんでひどい吹きぶりのなかを島へわたつた。これから私の住居となる家は年に一度の祭禮に遠方からくる神官の泊るために建てたもので、羽目板はところどころずり落ち雨戸もまだついてゐないゆゑほんの雨つゆのしのぎになるばかり、夏が過ぎればすぐ

冬になるならひの山國の湖のなかにただひとつ浮いて出たやうなこの島をめがけて周圍の山やまからおしよせてくる寒さをこの都人に防いでくれるほどの用にも立たない。積んである疊を幾枚か家のなかほどにしいて座敷とし、かたかたの床には白木造りの神輿、かたかたには炊事の道具をならべ、疊の徹をふき、あたりの塵を拂つてみれば思つたより住みごこちのいい住居になつた。梁のうへには笠鉾、萬燈。枝と繩と藁で面白い粗野な織物になつてる屋根裏からは太鼓、提灯などがぶらさがつてゐる。本陣はそとから板屑を拾つてきて焚きつけをこしらへ、米はこのくらゐに、水はこれくらゐに、火はかうして　と懇に教へながら晝飯の支度をして、やがて飯ができたのでちよこなんと畏つて給仕をしてくれる。それから南の濱へおりて器を洗ふなどひととほり用事をすませたのち

「ごはんが殘つたらおじやにしておあがりなさい」

といつて歸つていつた。あとに殘つて私は　これでいよいよ獨りになつた　と思つた。

二十四日

安養寺さんへ御挨拶にゆくために島を出る。——註。島へ移るまで私は湖畔の安養寺さんの離れに御厄介になつてゐた。——池田さんの爐ばたで話してるところへ福岡の妹が危篤といふ電報がきた。池田さんの人たちが氣にかけてきいたけれど私は笑つて　なんでもありません　と平氣でゐた。

島へ歸る。晝飯の支度をするのも懶い。ぼんやり寢ころんでゐる。ふと　ああよく體を大事にしてといつた　と思ひ出して力なく焜爐に火をおこしはじめた。飯をかける。焜爐のまへに坐つて煮える音をきくともなくきいてるうちにはらはらと涙がこぼれかかつた。よくひとりで世話をしてくれた。——註。妹が嫁にゆくまへは小石川の家で母と私と妹の三人ぐらしだつた。——裁縫がすきでいつも針をもつてゐた。日に何遍もココアをいれさせるとなさけなささうな顏をしてやつてくれた。瀕死の床に寢てる姿が眼にうかぶ。飯がふきこぼれるのでおろして菜の鍋をかける。木蓋のうへで葱をきつて一つ一つ石を投げるやうに投げ込む。涙がはらはらとこぼれかかる。こんなに涙が出るのはもう死んだのではないかと思ふ。死ぬときどんなにか皆にあひたかつたらうと思ふ。焚きつけがなくなつた。晩飯のために拾はねばならぬ。死ぬ

後ろの森の杉の枯葉をひろふ。ひとつづつ拾つて左手にためる。涙がでる。かけすぐらゐの鳥がゲーゲーと爭つてゐる。

なにをするともなく夕がたになつた。けふは夜になるのが寂しい。その夜の闇のなかにひとつぶの晝の光をとめておくやうな氣もちで島の春を燈明をともしにゆく。落葉の音や木立ちにひびく自分の足音をききながら石段をおり燈明をともしてなにといふこともなく眺めてゐる。燈明の影が水にうつる。その水底に幾年となく落ちかさなつた枝、そのうへを小さな魚の子のゆくのが透いてみえる。彼らはまことに天から生みおとされたかのやうに處を得がほである。けふは曇。

飯網にも黒姫にも炭燒の煙がたつ。煙が裾曳くのは山風であらう。

二十五日

朝目をさますと同時に妹を思つた。けふの悲しい最初の思ひである。□□子はまだ生きてるやうな氣がする。そして私のやうに今目がさめたのだらうと思ふ。

雨まじりの風が烈しく吹いて島は終日波の音と木の葉の音に鳴りつづけてゐた。島には木の葉が雨のやうにふる。彼らは朝から日のくれるまで、日のくれから夜の明けるまで、ながいあひだ住みなれた梢に別れをつげてわるびれもせず土に歸つてゆく。さうして地に落ちてからも暫くは若わかしい心を失はずにあちこちと追ひあひざめきあつてゐる。□□子はまだこのあひだ　來春は子供を抱いて上京する　といつてよこした。私は　樂しみに待つ　といつてやつた。□□子は生きて約束どほり來春出てこなければならない。兄弟のなかでただひとりの可愛い妹だつたものを。

雨のなかを提灯をさげて燈明をあげにゆく。燈明が高いので水ぎはの石にのつてもまだいつぱいに手をのばさねばならぬ。風のまをみてともしてもともしても扉をささぬうちに消えてしまふ。あきらめて歸つたがなにか氣がすまないのでまた性懲りもなくともしにゆく。

燈明の下に立つ。風がますます荒れて波がをりをり裾を洗ふ。いらだつて凪ぐまも待たずともしはじめたが今度は三度めについた。石からおりて裾をしぼりはかない喜びにみちてちらめく影を見あげながら　湖の彼方にこの光を望む村の人たちは島守がけふの一日の無事であつたことを知らせるための燈火とばかり眺めるであらう　と思ふ。

二十六日

朝。晴。きのふ拾つた杉の葉で火をおこしてるところへ本陣が鉈と鋸に豆板、賴んでおいた鰹節と池田さんからことづかつた香煎をもつてきて　餅は燒いてばかりたべずに雜煮にするがいい　といつて大きなひね茄子を二つ袂から出した。兩手にあまるほど肥えて石みたいに堅い。また　麹が少いからまづからうけれど　と小さな瓶から味噌をくれた。そして俎がはりに拾つてきた板のうへへ鉈で鰹節をかいてくれたが私は雜煮は今度のことにして餅を燒いてたべる。かやうにしてこの佗び住居には不相應な珍味のかずかずがそなはつた。無性者の料理人は手輕をのみ心がけてなるべく材料を使はない。米も持つてきたなり袋に一杯、砂糖もそのまま、山田から送つてくれた浪華漬もまだあけない。玉子も笊に十ほど、葱が一本、はぜもろこしも殘つてゐる。今やこのソロモンの富を得た島守はこれらのものをどういふ順序に腹のなかへしまひ込まうかについてすくなからず苦勞をする。本陣は焚きつけをつくりをへて煙草をすひながら味噌汁のかげんやなにか教へていつた。

いつからかこの神輿のなかに夫婦者の鼠が住んでゐる。彼らは私ごとき人間に平和な生活を邪魔されるのを腹立つかのやうに毎晩言語道斷に荒れまはるのでゆうべから一きれの餅をいくつかに割つて床のうへにほうつておくことにした。お供物のおかげで一晩靜かだつたが見れば餅はきれいに運び去られてゐる。

二十七日

□□子の具合がいいといふ知らせがきてきのふは幸福な日だつた。けさ南の濱へおりてたらいつのまにかきた本陣が

「先生　先生」

とよんだ。私が二足三足坂をあがりかけたら

「はがきがまゐりました。たいそういいつてんです」

といつた。本陣はこのごろ私が氣分がすぐれないのを氣にかけてくるたんびに親切にたづねてくれる。また私が□□子のために心を痛めてるのにも深く同情してるのだ。

夕。棧橋に立つてるとき北の岡の峽から霧が吹き出してきたので今に島を包むかと思つて眺めてたが徐かに湖をわたり東の山にそうていつてしまつた。秋になつて霧が急にすくなくなつた。燈明をつけてもどつてみればもう鼠の音がしてゐる。ゆうべは餅のかはりに一摑みの米を供へておいたら床につくまもなくぱちぱちと內證らしくたべる音がした。今夜ははぜもろこしをささげよう。

俄に雨の音。

二十八日

夜半。恐しい風の音に呼びさまされた。いま人びとはみな眠つて私ひとり覺めてるのであらう。私はこの島の嵐のなかにただひとりなることを思ひ幸にみちて眠りに入つた。

二十九日

朝。散りしいた木の葉にまじつて翅のはえたいたやの種子が落ちてゐた。山やまがありつたけの風を吹きつくしたかのやうにけさは靜かである。樫鳥や、木つつきや、島ぢゆうを木づたひ鳴きかはす鳥のなかでひよどりの聲がことによく冴にひびく。なに鳥か大杉の梢で玉の梭を投げるやうに鳴く。湖水にうつる雲の影はしづかにうごき、雜魚の群は吹きかはつた新鮮の氣を吸ふやうに滑な水面に泡をたてる。

机にもたれたまま夕がたまでうとうとした。そのあひだにいろいろな鳥の聲がきこえた。目をさましたら手が痺れてなにを持つても乳のみ子のやうに落してしまふ。

島守の一日の暮しぶりはかうである。朝目がさめるとながいあひだの習慣にしたがつて睡後のけだるさが心臓から指の先まですつかりきえてしまふまでは靜に床のなかに仰臥してゐる。漸く五體が自分のものになれば起きて南の濱へ顔を洗ひにゆく。雨の日やあまり寒い朝は前日に汲んでおく水で用をすます。次には土間の蓄へのうちから一摑みの杉の枯葉とやや生のとを拾ひ五、六本の木屑をそへて焜爐に火をおこす。生の葉は燃えるときに濃い白い煙をたてるのと、ぱちぱちはぜるのがよくてことさらにまぜるのである。また一本のマッチのほかに藁の帶をした束から一枚のつけ木をぬきだしてそのさつとひいた硫黄の色、泡だちながら燃える紫の焰、つんと鼻をつく強いかをりのためにその一枚を無駄につかふ。燃えたつ火のなかへ三つ四つ手づかみに投げこむ炭のおこるころには杉の葉は灰に、木屑はほどよくおきになつてそのうへに土瓶がのせられる。掃除をして餅の黴をけづり、玉子や茶道具をそばにならべ、小皿に醬油をうつすじぶんにはちやうど湯がわく。そこで火箸を火のうへにわたして餅をのせ、その燒けあんばいによつて焜爐の扉のかげんをするのをひとりで興がりながら端から醬油をつけてたべる。それから玉子をのみ、豆板をたべ、茶をすすつて朝の食事ををへ、ひと休みののち食器をかたづけるまで火をたきつけてから約一時間半を費す。一晩のうちにからになつた胃のなかへ甘い、鹹い、澁い食物を充分につめこんだ滿足はたとへやうもない。小憩ののち讀書、もしくは日記。時間と手數のために晝飯をはぶき、もし暖かならば南の濱へおりて體をふく。膝ぶしぐらゐまで水にはひり、摩擦によつ

て充血した皮膚を日光にあてまた微風に冷しながら四方の山を眺める氣もちはまことに爽快である。もし濯ぐべき衣類食器などあればついでに洗ふ。歸つて心臟の鼓動のしづまるのをまつて讀書、要すれば午睡。三時半夕食の用意にかかる。これは二食なのと、暮れるまでにゆつくり散歩の時間を得たいためである。大體の順序は朝におなじ。但し夕食は雜煮なので餅の黴をおとしてからおなじ庖丁で鰹節をかき、茄子の皮をむいて銀杏にきり、つゆのかげんをして鍋をかけねばならぬ。しづかに休んでから手ばやく食器をかたづけ、火をけして鳥居へゆく。さうしてそこからお宮までのあひだの長い路を落葉をひろつたり、歌をうたつたり、木の根をまたいだり、石段をあがつたりおりたりして火ともしごろまで歩いてゐる。

夕。鳥居へおりていつたら棧橋のうへに鶺鴒が一羽ゐた。そつとしやがんで見てるうちぢきにこちらを見つけ　ぴぴ　ぴぴ　となきながら小島が崎の葦のなかへ、そこには二、三羽の友だちがゐておなじやうに鳴きつれて斑尾の道のはうへ飛んでいつた。

汀にひとふさの木の實がおちてゐた。枝わかれした淡紅の莖のさきになんてんに似た暗綠の實をつけてゐる。もつて歸らうとおもつて舟板のうへにのせておく。青い岩床の凹みに波がよせてはひあがるやうに遙に白根の山の峽に灰色の雲が打ちつけてゐる。暮れてきたので實をとりあげて燈明に火をともす。心づよくもひとりこの島にすみながら妙高、黒姫、飯綱の山やまをつつむ恐しい雲のかなたに秋の日のうすれて落ちてゆくのをみればさすがにわりない里戀しさをおぼえ

る。

三十日

餅にもあきて飯をたく。うまくできたので浪華漬をだす。型のごとくがんじやうな桶の蓋には青肉で浪華漬とおした紙をはり、朱印のにじんでるのもいい。天王寺、六萬體町、六萬堂も氣に入つた。小刀で目ばりの紺紙を切つてすこし蓋をこじあける。と、ぷんと粕の匂ひがする。そうつと粕をはいでみる。下のはうにすばらしい瓜の奴がうまさうに色づいて隱れてゐる。奥にはまだなにかゐる樣子だつたが樂しみにしてわざと見ずに瓜をだす。蓋のうへですこし切つて茶漬の菜にし、殘りは大切に埋めておく。

夕。鳥居から歸つたら褐色のてんたう蟲が机のうへをはつてゐた。

夜。雨。島のまはりを一本足のものが跳んであるく音がする。なに鳥か闇のなかをひゆうひゆう飛びまはる。雨の音はなにがなしものなつかしい、戀人の靈のすぎゆく衣ずれの音のやうに。

十月一日

明けがたまでふつたとみえ土も落葉もしつとりとぬれて、雲はそのままに殘りながら雨はあがつてゐた。湖の島の朝凪はたとしへなく靜かである。森はしんしんとしづまりかへつてをりを

杉の枯葉がこそりと落ちるばかり、幾億の木の葉のひとひらもそよぎはしない。

南の濱へおりて顏を洗ひ、米をとぐ。白根の山なみに淡黃の雲がみえてけふは晴かと思はせる。鍋をさげて坂をのぼる。家のうしろでなに鳥かきゆうきゆうと鳴く。火をおこしたところへ本陣が玉子をもつてきてくれた。鍔のひろい笊の底にまろびあふいろいろな鷄の卵は私のために乏しい村の隅ずみから寄せ集めたものである。飯がふくじぶんまで話して本陣は歸つた。

食後。島の脊をあるく。茱萸（ぐみ）の枝が落ちてゐた。けさ遊びにきた村の子がすてたのであらう。大きな鳥の羽根をひろふ。鳥の落してゆく羽根は天からふつた寶ものみたいに子供心に嬉しかつた。柔い羽根をひろふと家ではそれを羽箒にしてひき茶をはきよせるのを私は自分が拾つたのだといつて御褒美に數をきめて臼を廻させてもらふ。私はわざと臼を躍らせてぱつと茶の粉をたたせるのがすきだつた。すがすがしい薫りがする。しめやかな茶臼の音は今も耳にのこつて遠いとほい昔を偲ばせる。これはかすかに紺色の光澤をおびて絹のやうに透いてみえる幅のひろい羽根だ。栞にしようと思ふ。

南の濱には雜草のなかに小菊がさきみだれてゐる。そして汀に立つただ一株の大木のほかにはいつも水をくんだり米をといだりするところに一本のみづ木と柳が枝をまじへてるばかりでこれといつた木もない。柳は水のうへへのりだして風の日にはなびき、雲のない日には影をうつす。その根もとには蘚苔の絲根かなにかいつぱいに紅く波に洗はれ、渚には砂まじりの小石が綺麗に

すいてみえる。そこで器を洗ふと雑魚の群がよつてきて指をせせる。時にはまた蟹が鋏をあげて這ひよるのを匙ですくつて水のなかへ投げてやるとそのまま深みへはひ込んでしまふ。ここは崖と森に北風をせかれて島のなかでいちばん暖い処である。春の野に似て和かな南の岡は湖のかなたに波うち、そこにほとほとと模様をおいた灌木、榛の木の小村へかよふ小路、草を負うた馬や人のとほるのもみえる。秋になると皆が草刈りにゆくときいたが、見ればところどころ綺麗に刈られて幾圃にも刈草が積まれてゐる。

夕。鳥居へおりる石段のなかほどまでいつて立つてゐた。北風がひゆうひゆうと雨をうちつける。右ての小暗い葦のなかに筌がひとつうちよせられてるのでほかにもありはしないかと見まはしてたら鷺が一羽あはただしくたつて北浦のはうへ飛んでいつた。

夜。後ろの木立にけうけうと鷺の聲がする。

二日

朝。鳥は山をこえる朝の光をみて　さめよ　さめよ　と呼ぶ。呼ばれてさめるものはこの島に私ひとりである。さうしてさめて四周の清浄なことを思つて心から満足をおぼえる。濶葉樹の葉ごしに綠の光がさして切るやうな朝の氣が音もなく流れてくる。崖をおりて濱へ出る。村の人たちはまだ起きたばかりであらう、湖にも岡にも影がみえない。

食後。棧橋へでる。斑尾の道を豆ほどの荷馬がゆき、杉窪を菅笠がのぼつてゆくのは蕎麥を刈るのであらう。そのわきには焦茶色の粟畑とみづみづしい黍畑がみえ、湖邊の稻田は煙るやうに光り、北の岡の雜木の綠に朱を織りまぜた漆までが手にとるやうにみえる。妙高、黒姫も峰のはうはいつしか黄葉しはじめた。曳かれてゆく家畜のやうに列をなして黒姫から飯綱へかけ斷續した朝の雲がゆく。水の底が遠くまで透けて日光につくられた金いろの網がぶわぶわとゆらぎ、根こぎにされた水草の芽が浮きもせず沈みもせずにゆらゆらと漂ひあるく。

南の岡へゆかうとおもつて島をでる。――註。島には船がなかつた。たまたまきた船にでものつたのだらう。――池田さんへ寄つたらほかほか湯氣のたつ箕のそばでおばあさんが麥を蒸してゐた。ねせておいて醬油をつくるのださうだ。秣山（まくさやま）へゆく道は灌木の岡にそうて蔭になり日向になりうねうねとうねつてゆく。人どほりのないのと岡がせまつてるのとで斑尾の道よりいつそう淋しい。たまにゆきあふお百姓たちも村の人ではあらうが見知らぬ顔ばかりである。とある山蔭で粗朶を背負つてくる娘さんに逢つた。十六、七の痩せぎすで、まみえと目のあひだにほんのり上氣して、色白の頰に汗がひとすぢ流れてゐた。彼女は小鳥かなぞのやうにおぢけてちらりと見た眼を胸のへんにつけながらおづおづとすぎていつた。田の畦や湖ぎはに枸杞（くこ）もまじつて赤い實が澤山なつてるのをよくみればひとつひとつ木がちがふ。

秣山――南の岡――は美しい岡である。まどろむやうに横はつた草山のあちらこちらに落葉し

たのや黄葉しかけた灌木が小松の綠にまじつてるのがちやうどいろいろの貴い毛皮をもつた獸が
自然に睦みあつて草をくつてるやうにみえる。羊齒は枯れたが女郎花はまだ咲きのこつてゐる。
うす紫の小鈴をつらねた花の名はなにか。松蟲草のなかをゆくと虻の群が一齊に羽音をたてて飛
びあがる。風がないので日は春のやうに暖い。萩、うるしがもみぢして柏の葉がてらてらと日を
照りかへす。あらまし葉を落した山つつじの灰色の幹の群立ちも美しい。滑かな窪地をとほして
帶のやうに雜木が繁つてるのは清水の流があるのだ。草のうへに横になつてうつとり眺めてると
山やまの嶺に雲が自らに湧いてまた自らにきえてゆく。

三日

夜なかから嵐になつた。目をさましたら障子がはづれてるので起きて繩でからげた。枝の音、
島の根を打つ波の音、吹き落された鳥のあわただしい鳴聲がする。
白根嵐が強く吹く日には南の濱は水が濁るので北浦の水をくむ。
夕。一日吹きまくつた風がばつたりやんだ。わづかに日がさして山も水もしづまりかへつてゐ
る。と思ふまに北風がごうごうと雨をさそつてきた。湖水に風脚がみえて日が恐しく暮れてゆく。

四日

朝からしとしとと雨がふる。
午後。うたた寐の夢を板戸をたたく啄木鳥に呼びさまされた。目ざましに香煎をのむ。焚きつ
けがなくなつたので裏へいつて杉の葉をひろふ。じつとり土についてるのを拾つて土間に投げ込
むうちに山のやうになつた。かうして獨りくらしてることが身にしみて嬉しい。
夕。雨はやんだが晴れもしない。燈明をともしにゆく。葦の葉のひと葉もそよがず入江も淵も
もの凄いほど淀んでゐる。山には灰色の雲がきれぎれにまつはつて小搖ぎもしない。後ろの木の
梢に啄木鳥が二羽もきて競つて叩くのをきくともなくききながら水の底を眺めてると葦の芽が水
面へはなかなかとどきさうもないのに穗さきを天にむけ力をこめて突き出ようとしてるのを　そ
んなに日向がいいものかしら　と思ふ。湖が光つて小波が立つてきた。汀がちよろめき、葦がゆ
れ、やがて木の葉が蟬の翅のやうにふるへて鳴りはじめる。まつはつてた山の雲はいつとはなし
にほどけて山をはなれて漂つてゆく。北浦には波がよせながら南の浦は魚の息さへみえるほど澄
んでゐる。鴨の群はまだか、鴛鴦はと思つて眺めてもそれらしい影もみえない。いつもの漁をす
る人が洲のさきから葦のなかを舟を曳いてきたのできいたら水のなかに立つたままふりかへつて
山を見ながら
「いつも今ごろはもう妙高に雪がくるのですけれど　さうすればきますが　をととひ貝をとり
にいつたら琵琶が崎の入江に眞鴨が十羽ほどと鴛鴦もゐました」

といふ。それは南の岡の隣に琵琶の形に曲りでた岬にそうて蜥蜴の尾のやうに細く入りこんだ入江である。あのしづかな草山につつまれた入江に海のはてからわたつてきておのづからなる舟の形にむつみあふ浮寝の鴛鴦よ、古の猶太の神は萬物創造の終りにあたつてすべての色よい鳥の羽の殘りをつづつて羽衣とし、蜜のやうな愛のいぶきにその胸をふくらませて汝らめをとづれの游牧者をこしらへたのであらう。

燈明をあげ、白根の山の雲を殘りをしく眺めてかへる。

夜になると驚が島のまはりを鳴きまはる。雨にも風にもならず、月もみえずにしんしんと不安の闇がふけてゆく。

五日

終日氷のやうな西風がふく。山へ雪がきたかとおもつて出てみたが雪も見えない。西風がふけば雲が吹きはらはれると本陣がいつたけれどところどころ青空もすき日に照された雲もみえながらおほかたは根づよくへばりついてなかなか剝げさうにもない。ふと南の浦のはうを見たら一羽の鴨が白つぽい胸をみせて低く舞つてゐた。それをよく見ようとしてぼさのなかを汀づたひにゆかうとしたら足もとから小鴨が飛びたつた。楢の實を四つひろふ。三つは栗色に、一つは青くつやつやしてゐる。とげのある猪口にはひつたのと、二つの猪口なしと、まだ若い細いのと。どん

栗を捨つたことがなにか嬉しい。

夕。燈明へゆく。寒い風が灰色の雲を吹いて日が傷ましく暮れてゆく。風が强かつたのでいたやの葉が生の枝のまま落ちてゐる。花のさいた杉の葉を石段でひろふ。本陣が胡瓜の鹽おしと菜のゆでたのをもつてきてくれたので鴨の話をしたら　それは一つはよく舞ふ奴で　一つは水をくぐるのが得手なのだ　といつた。

夜。どん栗と杉の葉をならべて日記をつけてるとき南の浦にばさばさと水を打つ音がして鳥の群がおりたらしかつた。月は遠じろく湖水を照しながらこの島へは森に遮られてわづかにきれぎれの光を投げるばかりである。大木の幹がすくすくと立つて月の夜は闇よりも凄じい。

夢。ひとりの爺さんが右手に細いはけをもつて左手におとなしくとまつてる鳩の頸や肩のへんを鳩羽や紺色に染めてゆく。さうしておくとそのの色の羽根がはえてくるといふ。そばに桃色鸚哥（いんこ）が木の枝に嘴をひつかけてぶらさがつてゐた。……

六日

南の濱の木のところへいつて日にあたる。空が晴れて豊かな日光は濱をあたため、西風は崖と樹木にせかれて高く頭上をこえてゆく。この木は高さ四、五丈？　まばらな枝に楢の葉に似た濶葉をつけて根もとになにかの古い根つこ二株と無慘に裂けた枯木の幹が横倒しに水につかつてゐ

る。南の岡のうへをもかりもかりと浮いてゆく銀いろの雲に見とれてるとき一羽の魚狗（かはせみ）が背なかを光らせながら　ぴつ　ぴつ　と飛んでいつた。もし人が思ふままに生れかはれるものならばあの岩壁の隱れがに美しい衣をきて心にくくも獨りすむかはせみになりたいものである。秋はまはりの山の木が落葉するためか鳥はみなこの島をめがけてねぐらをもとめにくる。

幾日ぶりかの天氣なのでありたけの器を運びおろして洗ひ、ためておいた洗濯をし、水をあびてかへる。そして自らけふの勤勉をほめながら御褒美にすこし早く夕食の用意にかかつて味噌汁をつくり、浪華漬をあける。こつとりつつんだ粕の底からぽくりと西瓜の丸漬がでてきた。さもうまさうに太い皺がよつてずつくりと酒の氣がしみてるのを蓋のうへでほどよく切つて皿につける。汁も煮えた。いそいそとして飯をたべる。

棧橋。けふは岡の木も島の木もいつぱいに枝葉をひろげて日光をすひ、鳥居も燈明もめづらしく新しい影を落してゐる。湖畔の岡の東側にやうやく蔭がひろがつて晴れた日の太陽はひとしほ名殘をしげにたゆたひつつ沈んでゆく。黒姫山は日輪の冢（つか）か、きえがてにする微光をみれば晴れのタべもまたあはれである。柴舟も畑の農夫もみな歸つたのに秣山に草をくふ美しい獸の群はよい草の香に醉ひしれて穴に歸らうともしない。

鳥のしわざか島の脊に小さな蜆の殻がこぼれてゐた。四つながらみな仰むけに白い裏をみせてるのをなにとはなしにひとつひとつ裏がへしてみる。水色と泥色に染めわけられた波模様を手の

ひらにのせてみながら戻つて机のうへにならべておく。どん栗と貝殻と杉の花とで賑になつた机に頰杖をついてぼんやりと魚狗のことを考へはじめた。

南風の強くふく日私は手桶をさげて北浦の水を汲みにいつた。いつものやうにじつと足もとをみつめて思ひに沈みながらしづかに小暗い坂道をおりてゆく。大木の枝はいくへにも頭上を蔽うて空とぶ鳥もこの姿を見ないであらう。幾年となく散りつもつた木の葉はそのまま土になつて柔に爪先をうづめ、踵は餌をねらふ獸のそれのやうにすこしの音もたてない。崖の樹木は水をすふ化鳥の形に押し合つて青暗い淵のうへに頸をのばしてゐる。ふと見れば汀からのりだした朴の木の枝にひとりの女が腰をかけて一心に釣をしてゐる。翠の髪を肩になびけ、瑠璃の翼を背にたたみ、泛子（うき）をみつめる瞳はつぶらかに玉のごとく、ゆさりと垂れた左右の脛は珊瑚を刻んだかとうたがふ。みづはか、山嫗か、奇しく妙なる姿は底なしの淵の底までも照してゐる。私はおぼえずよろめいて手にした桶をとり落した。彼女は驚いて口笛のやうな叫び聲をあげ浦づたひに島をまはつて龍宮の岬のはうへ飛んでいつた。そのあとに私は溫もつた朴の枝に頰をおしつけ恍惚として影もない水を眺めてゐた。夕べをもまたず冷えてゆく朴の枝が教へるであらう、無慈悲な鉤に捕へられたのは淵にすむ鱒の子ではなくて私みづからであつたことを。

夜。鴨の聲がしたかとおもつて空の光をたよりに濱へおりた。滿月が無名樹のまばらな梢にかかつて湖畔の岡の裾に霧が幔幕のやうにひいてゐる。ただひとりこの月に照されて湖のはなれ島

のわづかな濱べに波をへだてて草ばかりのかなたの岡を眺めてる心は涙といへば涙である。月界の神女は昔ラトモスの山の窟にまだうら若い戀人をいだいてさめることのない甘い眠りに入らせたといふ。私は今ひとりここに立つてこのやうに憧れてるのに彼女はなぜはやくきて私を抱いてくれないのであらう。古い憧憬の蓮華は清らかな光にあつてふたたび花びらをひらいた。月天子よ、私は汝のやさしい面を仰いで夜をも明すであらう、姿は苦行の婆羅門のごとく、心は渇仰の信徒のごとく。

夢。まつ暗な寒い杉の森のなかで北浦のはうを眺めて鴛鴦や鴨のくるのをまつてゐる。やがて一羽の鴨が西のはうからさつとおろしてきて水につき入つた。つづいて五羽も七羽もきてふくらんだ胸のへんにささ波をたてて矢のやうに進む。頸すぢの眞紅なのや、鶸色なのや、見たこともない綺麗な鴨のなかに白鳥もまじつてゐた。

七日

夕。一の鳥居へ石段をおりるときふと柴栗の落ちてるのをみて　栗がなつたな　と思つて上を見た。高い枝に雫のたれさうな三つ栗がめつきりとふみわれてゐる。胸を躍らせ枯枝を拾つて投げつけるうち手心をおぼえてうまくうちあてた。大きないががぽかりともげてばらばらとこぼれるのをとんでいつて草のなかを捜してるとき落ちてきた枯れ毬にいやといふほど頭を打たれ　な

るほど　と昔の智慧を思ひだして羽織を頭からすつぽりかぶる。かた手に一杯ほどの栗を袂に入れてきて机の上にあけてみたら蟲の粉が美しくちらばつた。

焼山には雪がきたといふ。

八日

本陣が蛇のきもと蕎麥粉の饅頭をもつてきてくれた。栗の話をしたら　島の西に大きな栗の木がある　といふので宮の後ろの崖をあとについておりてゆく。透きまもなく繁りあつた雜木のなかに戰だらけの獰猛な腕をひろげた栗の木の姿はあつぱれ武者ぶりではあるがかんじんの栗は一つもない。

「去年はあぶなくて通れないほどなつてたが」といひながら心あたりの木から木へと捜しあるいても毬も落ちてゐないもので本陣は手もちぶさたな顔をして　南のはうに梨があるから　と崖の腹をまはつてゆく。私は栗のかはりにみちみち楢の實をひろふ。本陣は　木曾のはうでは楢の實を豆にまぜて味噌をつくる　とか　山奥へゆけば榧（かや）、はしばみ、ぶなの實もたべる　などと話しながら先にたつてゆく。南の崖に一株のけんぼ梨がある。これも「去年は降るほどなつた」さうだが高いところに七つ八つあるばかり。下草をかきわけてやつと三つ四つさがしだした。堅く小さいがかをりは高い。ぐみ、水引の花。

九日

朝なぎの濱におりる。山やまは雲の帳をかかげ、湖邊の灌木はさながら乙女となつて朝の姿をうつし、梢にはなに鳥かきてまろらかな鄙歌をうたふ。

夕。栗を落す。

十日

北風がひゆうひゆうと雪雲をはこんで今夜のうちに湖水が氷りはせぬかと思はれる。かんかん火をおこし栗をむいて栗飯をたく。肩をすぼめて森に吠える雪風の聲をきいてゐる。

夜半。思ひがけぬ月の光がかうかうとさしこんだ。怪鴟(よたか)の聲、波の音。

十一日

朝。小雨のなかを本陣が菜と雉笛と大笊に一杯のしめぢをもつてきてくれた。本陣はくるたんびになにかしら山里らしい話を積んでくる。しめぢはこのへんでいちばんいい茸だといふこと、なに茸とかいつて傘の徑が一尺もある氣味の悪いのもたべるといふことなど。

ゆふべのうちに山へ雪がきた。妙高に三度ふれば里にもくるといふいひつたへで村は今草刈りのをはり、とり入れのはじまりで大騒ぎだ　といふ。十二日の秋祭——祭とは名ばかりでこれと

いふこともない。——までに草を刈りをへ、新そばをたべ、收穫をはじめて霜月のなかばまでに凡ての農事をしまひ、それから人びとは身も心ものびのびとして思ひおもひの溫泉へゆく。

棧橋へ出る。山やまは寒さうな雲に埋もれて雪の色さへみえない。風に吹きさかれた霧のきれが目のまへの水のうへをそそとせせつてゆく。

木立ちの路を歸れば凍えた島のなかにあとりが鳴き、めじろもなく。

この住居のまへにある僅ばかりの平地のむかうは五、六丈？の急な崖になつてその下が南の濱である。崖には杉の大木にまじつて象皮色の欅の幹が枝をひろげ、瘤だらけのいたやは犀のやうに立ち、朽ちはてたえのみはおほかた枝葉を落しつくして葛蘿にまかれてゐる。暖い日には障子をあけてこれらの喬木のをのこどもの雄雄しい武者ぶりをみて心を樂します。我がちに日光を貪る木木の簇葉は美しい模樣を織りだして自然の天幕となり、ところどころのすきまからはきれぎれの空がみえ、その小さな空を横ぎつて銀いろの雲がゆく。そのなかでのやや大きな天幕の裂けめはこの家に天の光をもたらす唯一の路である。それゆゑ私には朝は遲く明けて日は時のまに暮れてゆく。夜になれば無數の巨幹はさながら魑魅(ちみ)となつて人をおびやかし、星は簇葉をもれて冷たい木の實のやうにみえる。

午後。晴。濱におりて茸を洗ふ。

夕。落栗をひろふ。三つ四つ。妙高、黒姫、飯綱の嶺にさらさらと初雪がふつてきのふまで恐

しげにみえた山の姿がなつかしやかになつた。なごりの雲が去りがてにたゆたつてゐる。水の底にすいてみえる筌のなかへ小さな魚がしづかにくぐつてゆく。彼はただ一夜だけれどもこの島の岸べにかかる安住の宿を見いだした。

うちよせるささ波の音をききながら小島が崎の洲をあるく。ここは灌木にはさまれて狭間のやうになつてゐる。まはりの岡はかなり黄葉が深くなつた。あんなにたくさん鳴いてた鶯はみんなどこへいつたのかしら　そんなことを思ひながらふと弓なりの枯枝をひろひあげて涙をうかめた。けふはいつになく遅くなつた。山も湖も暗くなり、鳥はみな島に歸つて木の頂にとまつてゐる。

十二日

秋祭。朝本陣が迎ひにきた。

斑尾の道をあるく。黍畑はいつまでも若わかしい綠色をしてゐる。粟畑は濃い海老色になつてもまだ刈られない。きのふ菅笠のみえたあたりは一段ほどの稻がふり干しにされてゐる。足の疲れたところからひきかへして村へはひるときちやうど托鉢の尼さんが讀經ををへてある家の軒下からこちらへくるところだつた。私はすれちがひながらなにげなく深い笠のうちをみた。染めたやうな豊な頬や、讀經のために充血した脣や、岩間を清水の流れてゆく尼僧の境涯には涙なしには住めまいほどなまめいてゐる。これからどこをまはるのか斑尾の道のはうへいつた。

かねて招かれてた本陣のところへいつて鳥鍋で燒酎をのむ。本陣は少しばかりの燒酎に醉ひ猩猩みたいになつて

「先生　もう舟がこげません」

といふ。で、一時ばかりそこらを歩いてもどつたらやうやう色がさめたがまだ鼻をつまらせてゐる。白根颪が無二無三にふく。本陣は一所懸命艪を押しながら　この風で鱒がとれるからいいのがあつたらもつてゆかう　といふ。幾年もまへに山からくる清水の落ち口に彼らの最初の鰭をふつた鱒の子はその父となり母となるときがくると稚いころ乳房を含むことを知らぬその口にはじめて吸つた清水の味を思ひだしてわが子にもそれを吸はさうとおなじ輩べに寄つてくるのをさし網を沈めてとるのである。四方の山から岡から無數の鳥が島をめがけて歸つてくる。これから山の鳥は雪に追はれてみなこの島に集るので島はいちめん鳥の糞になるが、春になつて雪のとけたあとをみると木の實草の實の種子が敷きつめたやうになつてるといふ。

夜になるとお宮のわきの坊主の木へ怪鴟が二羽もきてぐわつぐわつと喉を鳴らしながら闇のなかを漁りまはる。

十三日

午後。雨のなかを濱へおり水をくんで枝豆をゆでる。木つつきは始終島を見まはつて人の影さ

へみれば咎めでもするやうに鳴きたてる。この美しい深山の彫師は日にち小さな鑿をふるつてまへの夜の夢を木の幹に刻まうとするかにみえる。

本陣が玉菜と里芋としめぢをもつてきた。うまさうな葉を十重二十重にかさねた玉菜と、毛むくぢやらの里芋と、まだほけない面白い形の茸が笊のなかで轉り合つてゐる。本陣は

「また先生のお樂しみのものを拾つてきました」

といひながら恵比壽さまみたいな顔をして袂から柴栗を二、三十だした。またおかみさんのさとの味噌漬が三年めとかでよく漬いてるからといつて茄子と大根の唾のでさうな色に漬いたのをくれた。私が湯をわかし、飯をかけ、漬物を切るあひだに本陣は玉菜をきざみ、濱へおりて茸と里芋を洗ふ。それから駄菓子で茶をのみながら　越中越後にははうばうに尼寺があつて大勢の尼が托鉢にでる。このへんでも佛の忌日にでもあたれば讀經をたのしんだりまた宿をかす家もあるなど話すうちに飯がふいたので

「どうもおごちそうさまで」

といつて歸つていつた。あとにひとり王侯の富を得たきもちでほくほくしながら鰹節をかいてつゆをつくり、笊から玉菜と茸をとつて投げこむ。茸がひよくひよく煮えくりかへる。蓋でおさへつける。なかでことことといふ音をききながら　ここを離れるのがいやだ　と思ふ。

鼠が毎晩座頭蟲の身だけをくつて足をそこらへちらけておく。箒がなくて掃けないのでたくさ

ん溜つた。座頭蟲はくはれてもくはれても別の奴が相變らず長い脚をもてあましてよいよいみたいに歩き廻る。

夢。夜なかごろ私はちやうどこの島のやうに大木に蔽はれた大山の頂に立つてゐた。月か星かかりかかすかに地べたが見える。おりる路はいくつかあるがそれが人里へでるといふのでもない。私はそこに淋しいとも思はずに立つてゐた。そしてふと上を見たら枝から枝へ無數の熊蜂の巣がかかり數萬の蜂が火のつきさうな翅を立てて盛んに蠟をぬつてゐた。

十四日

朝。飯をすましたところへ本陣がさも一大事らしく

「鱒がとれました　鱒がとれました」

と息せききつて四百めあまりのあめ鱒をさげてきた。とれたてで眼など生きてるやうだ。腮から荒繩をとほされ烏天狗みたいな口をくわつとあけて鉤なりの齒を見せてゐる。頭は燒物のやうに黒くてらつき、體は赤黒く光澤をおびて、美しいといふよりは野趣のある魚である。切身にして味噌につける。

本陣は薪をとつてゆくといつて崖に倒れた朽木を濱へ落してとんとん鉈で叩いてゐる。

午後。南が凪いで日がほこほことあたつてきた。北風のこないまに濱へおりて米をとぐ。柳の

根もとにある穴から蟹が出てきて不思議さうに見てるのでそつと指をだしたら　チカ　とはさんでそこそこに穴へ這ひ込んだ。米をとぎをはる頃にはもう風が立つてきた。洗濯をし、水をあびて歸る。

晩飯には鱒を煮てたべる。湖水の味がする。

棧橋。湖畔の平地だけを殘してすつかり霧が包んでしまつた。晝は稻を刈り夜なべには稻こきをする　と本陣がいつたがもう暮れてきたのに田畑にはしきりに人の影がうごいてなにか堆く積まれた。烏の群が鳴きたて鳴きたて後を追つて歸つてくるのを眺めてるとをりをり雲がきれて思ひがけぬところに夕やけの空がみえたりする。はじめ四方の岡のうへに無數のほしがみえ、やがてそれが孑孑（ぼうふり）みたいに動きはじめ、次第に大きくなつて鳥の形になり、黑い翼がみえ、聲がきこえて、それはみな島をめがけて歸つてくる烏だということがわかる。烏こそはまことに鳥族の農夫である。彼らはその強い嘴の鋤をもつて終日耕して倦むことをしらない。それゆゑ彼らの衣は美しい紺黑に光り、健な唄の聲は野に山にひびきわたる。

一の鳥居をくぐつたところに島でいちばん綺麗な杉の木がある。一抱へほどの幹と三抱へぐらゐのとが根もとから二叉になつて幹にも枝にも更紗模樣をおいたやうに錢苔がはえ、どす黑い葉のなかにいちめんに花がさいてゐる。その高い枝の下にみごとにかかつた大きな蜂の巢は毎日こへくるときの一つの樂しみである。渦卷の浮彫をした甕形の玉宮にはうばうに入口があり、

暖い日には緋をどしの鎧をきた幾百の騎士が勇みたつて湖のかなたに笑顏をもつて彼らを待つ戀人の馨しい脣をすひにゆく。

十五日

歸る日がちかづいてからは毎朝目がさめるといひしれぬ寂しさが湧いてくる。けふはお爺さんがひとり參詣にきて越後の國中頸城郡何村とかの者だと名のつてから

「あんたここにかうしておいでになつてなにか行でもなさるのですか、行をなさるには私どもがかうしてお話するのもお邪魔になるといふことですが」

といひながらそろそろと腰をおろした。私が

「いいえ行はやりません」

といつたらすこしおちついて合點ゆかぬらしくひとの樣子を見ながら　自分は今申すとほり越後の者でこの村の身うちへきのふから子供をつれて遊びにきて一晩泊つて今お詣りにきたのだがこれからまた子供をつれて歸らうと思ふ　なぞとひとりで話してゐる。お爺さんはお宮へ燈明をあげてきたとみえ

「あぶないから消しておいで」

と子供にいひつけてまだ腑におちないらしく　なにをなさる　なにをなさる　とくどく尋ねる。

私は　都會に生れて都會に飽きたからこんなところに籠つたのだ　といいかげんな返事をした。

お爺さんはばくりと口をあいてまはりの森や屋根裏を見まはしてたが

「やはり夜になればお話においでのこともごわせうな」

と變なことをいひだした。私がわかりかねた様子をしたもので

「いや昔からかういふところではてんご様や神様がきてお話しくださるといふことを承つてをりますで」

といふ。私がまじめに

「もうこのせつではあまりさういふことはありません」

といつたら感にたへぬらしく仰山にうなづいて

「天子様がおとめになりますかな」

といつた。さうして孔のあくほどひとの顔を見たあげく

「どうも御失禮申しあげました」

と丁寧におじぎをして歸つていつた。小さいときにきいた伯母さんの話によると天狗様はをりをりこんなことをして人を攫(さら)りにくるといふ。まづはお氣にさはるやうなこともいはないでよかつたと思ふ。

けふもしぐれてきた。雲のやうに縺り合つた大杉の梢にしらしらと雨脚がみえる。

夕飯の菜に鱒をやき、里芋と玉菜を煮る。

十六日

朝あさ島を出てゆく鳥の聲によびさまされる。眼をあいたらぱちぱちと葉をうつ雫の音がした。降りしきる時雨をききながら栗をむいて栗飯をたく。

夕。けふをかぎりに雨の小やみのひまを棧橋へゆく。岡にも里にもたちこめた霧のたえまから濃い紅葉の色がみえて人たちは雨にもめげずこの遲くまで稻を刈つてゐる。なごりをしくいつまでもいつまでも立ちつくす。

鳥もみんな歸つた。稻刈りの人も見えなくなつて霧がそのまま闇になつてゆく。けふは兩方の燈明をともし、また棧橋に立つて水にうつる火影が「し」の字や「く」の字になるのを眺めてゐる。

十七日

恐しい白根颪がふく。朝早く本陣が荷造りにきて一つ一つ舟へ運びおろす。けふは風が强いから舟を小島が崎の入江につないできたといふ。鳥居のところへおり汀の枕につないだ舟にのつて後の掃除をしてる本陣を待つ。島の木は咆え、日光に溢れた雲が奔馬のやうに飛んでゆく。

舟をだす。讃むべきかな、島はもみぢして鴛鴦のごとくにみえる。この島は國のはじめのころはたぶん一羽の鴛鴦だつたのであらう。彼は禍津日の神の妬みにふれてただひとりの戀人をうしなひ嘆きのあまりにかやうな島となつてしまつた。それゆゑ幾千年の後の世の今になつても秋がきてその子の子らがあの入江にわたつてくると恩愛のきづなにひかれて美しい昔の姿をあらはすのである。

岬をまはるやいなや大きな浪がつづけざまにくるのを舟をかはしかはし湖畔についた。

貝桶

わぎもこをなことはいはじ安房の浦の夢のかよひぢ波はよるとも

大正十三年二月十六日

夜晝となく吹きまくる風にとぢこめられてちつとも外へ出なかつた。ここへ來てから二晩ともよく寐られなかつたのを今朝明けがたからぐつすりと眠つた。風がやんだのだ。目をさましたら急に寒くなつてゐた。併し靜なのは暫くのあひだで食事をすますじぶんにはまた風がたつてきた。けれども熟睡で元氣づいた私は勇んで散歩に出かけた。田舍には珍しくないが都會らしい都會では決して見られないやうなしんみりとしてかすかに寂しみのある路である。それはどこまでも一筋に長くのびて、よく繁つた生垣のあひまにぽつりと店屋などがある。そこには丈夫な荒骨の腰障子がたつてふつくらした感じのする障子紙に　荒物　とか　鹽せんべい　とか商ふ品物が黒黒と書いてある。私は　これは酒屋だな　とか　ここは穀屋だな　なぞと思ひながらゆく。穀屋と

いへば、そこには白豆や黒豆、粟、黍、ささげなど、それぞれの粒、形、色、光澤をもつた種種の穀物や、それをひいてつくつた粉類が淺い桶にはひつて並んでるであらう。いつたい私は美しい穀物を見たり、その粉の匂をかいだりするのが好きなのだが、またそれがただの砂金や寶石のたぐひではなくて食べては體の養ひとなり、蒔いてはみづみづしい草木となるといふところにもなにか有り難いやうな、不思議なやうな、いひしらぬうまみのある愛著をおぼえるのである。亭主はつるさげた束から紙袋をちぎつてふつと息でふくらませ、底ぬけみたいに口の太い漏斗をさしこんで一合二合とはかつてくれる。そのあひだに私は赤や青に彩つた花麩に見とれたり、昆布や椎茸の匂を吸ひこんだりしてゐる。——私はいつしか幼い頃の思ひ出に耽つてゐた。そんなにして店から店へと眺めてあるくうちにある家の障子に　蛇の目ずし　と書いてあるのが眼につい た。

これやこの　安房の國なる
蜑(あま)のすむ　海べの小村
潮風に　なやむ若葉も
花もなき　はにふの鮨屋
むくつけき　彌左はあれども
丸ぽちやの　お里はみえず
しまつとり　われはうゐたれ
まづかろな　蛇の目ずし

私は思ひついた誰かれに繪葉書を出さうとおもつてとある萬屋の店へはひつた。さうして埃でざらついた賣れ殘りの繪葉書をボール函のなかからよりどつてるうちに紙一杯の蘇鐵のついたのが出てきた。安房名所岩井村大蘇鐵　とある。私はかみさんに

「蘇鐵つてどこにあるんですか」

とたづねた。かみさんは　この道をまつすぐいつて、それから左へ曲つて、右へ曲つて、どこまでもいくと左側の家にある　といふ。私はちよつと退屈した旅行家の好奇心をおこしてさして見たくもないくせに

「見せてもらへるでせうか」

ときいた。

「ええ、ええ、ただの百姓家にあるんですから」

といふ。教はつたとほり曲り曲つてゆく。思つたより遠いし、道もまぎらはしい。とある寺の角で立ち話をしてる人に

「大きな蘇鐵つてのはどこですか」
ときいたら話をやめて　この道をどこまでも行くとはづれの家にある　といふ。
「見せてもらへませうか」
「ええ、ええ、ただの百姓家にあるんだから」
といつて笑つた。私はこんな問ひをくりかへすことによつて内心つまらないときめてる蘇鐵になんとかして勿體をつけようとしてるらしい。で、ちよいとむつかしさうな返事でもしてくれれば都合がいいものを彼らは私の氣もしらずに無造作に　縦覽隨意だ　と答へる。私はいよいよつまらない氣になつて行くうちに廣びろとしたところへ出てしまつた。蘇鐵が見えない。私も背が高いし、蘇鐵も背が高いのだから見えない筈はないのだが　なぞと埒もないことを考へる。結局路ばたの畑で草をとつてる女に三度めの蘇鐵をたづねた。女は私の來たはうを指して　この道をすこし行くと右側の納屋のある家にある　と教へた。ひつ返したら納屋があつた。それについて庭へはひつてゆく。庭といつても農家の庭で、廣いには廣いがただのあき地だ。母家の縁側に手拭を被つた婆さんが日向ぼつこをしながら子供の守をしてゐる。私は帽子に手をかけて
「こんちは」
といつにない愛想のいい挨拶をした。まだなんとかして物にしようとしてゐる。
「あい」

婆さんは氣のない返事をした。右手の井戸ばたでかみさんが洗濯をしてゐる。
「蘇鐵を見せてもらひます」
今度はそちらへいふ。
「あい」
まただ。どうしてみんなこんな腑ぬけなのだらう。そこに一株の蘇鐵が生えてゐる。なるほど大きいには大きいがただの蘇鐵だ。私はさも仰天したらしくそれを見あげて
「何年になるんですかね」
ときく。
「何年だかね」
さつさと洗濯物を干しに行つてしまつた。そこで性懲りもなくわざわざ後ろへまはつて見あげてみる。鰻になつて天上もしない。私はよく噺にある、初手から承知で出かけていつてつまりはやつぱり狐につままれる田吾作みたいな氣もちですごすごと歸つてきた。

海風の　寒きこの日を
名にしおふ　蘇鐵をみんと
いはゐ村　いはひもとほり

村はづれまで　たづねてくれば

あんだこの　蘇鐵の野郎
もくもくと　やたらはびこり
あらばこそ　なんのへんてつ
大きいは　づうたいばかり

なめげなり　都の人よ
我こそは　唐土舶來
そのかみは　天竺そだち
ぎしやくつの　山に千年

三國を　小股にかけて
今ここに　海に千年
いやしくも　はばかりながら
世のつねの　雜木にあらず

あなをこの　この蘇鐵もや
あなをかし　この蘇鐵もよ
自惚も　厚かましさも
づうたいも　我にさながら

さあれこそ　わがともがらぞ
はしきよし　わがはらからよ
生ひたてれ　千とせ八千とせ
のふぞうに　雲のうへまで

十七日

朝から貝をひろひに出かけた。路の兩側はおほかた背の高い槇の垣根になつて、樫や、珊瑚樹や、もつこくなどの濶葉樹がまじり、時には竹藪もある。日蔭の朝の氣が青く凝つてうす寒く肌にふれる。波の音がきこえてきた。背負ひ梯子をしよつて働きにでる人たちに度度出會つた。ちやうどそんな時刻なのだ。ぬけ穴みたいな小路をとほつて海岸の砂丘のうへに出たらそこに漁師

の婆さんがゐた。

「今日は。暖ですね」

私は氣嫌がよかつたにちがひない、めつたにこんなことはいはないのだから。

「西だね」

彼方は寧ろ不氣嫌に答へた。西だから寒い——尤だ。が、私は東京を標準にしていつたのだ。西が吹いちやなんにもとれやしない——婆さんの不氣嫌の原因はこの方にあるらしい。舟といふ舟は高く砂丘のはうにまで曳きあげられて、帆が稻塚の形に卷いて立ててある。私は人げのない濱へ降り七八町西のはうに双角の犀のやうな恰好に突き出てる岬にむかつて歩きはじめた。地震の時の崖崩れのために到るところ灰色の斑ができてゐる。私はしつとりと濕つて波模様のついた砂のうへを貝を拾ひながらゆく。潮に濡れた海藻や貝殻がとりどりの色鮮に象眼されてゐる。私はまづ小さな紫海膽（うに）の殻をとりあげた。これはネプチューンの王冠である。それから錫色のいた や貝を。呪はれたこの帆よ。汝は雄雄しいトリスタンの命をとつた。その次には燃えるやうな朱色の逆鱗をたてた錦貝をひろつた。直徑一寸ばかりのいびつな圓形のなかに大小三十幾個の灰白色の龜の手がびつしりついてゐる。サラセンの天幕だ。町といふ町は悉く兵火にかかつてゐる。その光は平野を紅にそめて彼らの天幕にまでも映つてゐる。そんなにして私はひとり興じながら知らずしらず海のはうへとひかれて不意にうちよせる波に足を洗はれたりする。濡れ

てるほど貝の色が鮮だし、深みへゆくほど澤山ありさうな氣がする。古いフィニシヤ人はこのやうな氣もちで岸から岸へ、海から海へと彼らの「紫」を求めて船を進めたのであらう。彼らはさくチルの町を建てた。その「紫」はチルの誇であつた。私はまたこれらの貝殻を集めて象牙の塔を建てようと思ふのである。

私はたうとう岬の根もとまできた。風蔭になつて靜に暖である。絶壁の頂をかざる綠のなかに鵯（ひよどり）が鳴き、一面に干あがつた岩礁にはまつ青に苔が生えて腹白鶺鴒があさつてゐる。ここは波の寄せ具合で海藻や貝殻のたまるところであるから、私は岩壁にかこまれたこの安穩なところがすつかり氣にいつた。そしてほんたうに子供らしい有頂天と貪婪をもつて眼うつりをしながら貝をひろひはじめた。昔モーゼの仲間が紅海の干潟をわたつて亞細亞へと逃れたときに彼らはそこで貝を拾ふためにどんなにか暇をとつたであらう。けれども彼らは決して追手を恐れるにはあたらなかつた、なぜならば追手もまた貝を拾はずにはゐられなかつたであらうから。

……是に於てパロとモーゼと互にいひけるは、見よ、我らはかかる美しき貝を得たり。我らの胸は喜に充てり。いざ、我らここによしみを結びて我らの神をたたへん　と。かくてイスラエルの人人埃及の人人と手と手をとりてこの歌を謡ふ。云く　我らラーを謡ひほめん。我らエホバを謡ひほめん。彼らは高らかに高くいますなり。彼らは紅海を干潟となして我らに美しき貝をさづ

けたまへり。その色は花のごとく、その光は玉のごとし。時にイスラエルの女たち發(ふりつづみ)をとり且つ踊るにパロの軍勢の頭たちも兜をぬぎてともに踊る。彼らは美しき貝をさづけたまへり。その色は花のごとく、その光は玉のごとし　と。彼らの歌は峙(そばだ)てる海に響き、その足踏みは紅海の底を轟せり。

これは私の出埃及記である。さうしてもしかうであつたならば、それこそイスラエルの子が夢想したよりもさらによい攝理だつたのである。

十九日

どれも美しくまぎらはしい濱への小路をたどつて目あての網小屋のところへうまく出ることができた。今日は東へむかつてゆく。と、烏が七、八羽集つてなにかしてゐた。私はそろそろ彼らのはうへ近づいた。

「おはやう。御免を被ります」

そんな氣もちで。彼らは歩いたり、ひよんひよん跳ねたりして、手近に積んであるしいらのうへにとまつて横目でじろじろ人を見てゐる。

「おはやう。さあどうぞ」

さういふやうに見える。私はこの烏のどこか在鄕臭いのが好きだ。私は彼らのあけてくれた道をとほる。先生朝飯に鮪の頭を食つてたのだ。彼らはうまくやつてるが私にはいつかう思はしい獲物がない。終に飛びこえるにはすこし廣い小川のふちへきてしまつた。私は落膽した。ほかのものはともかく螺(にし)の立派なのがひとつも手に入らない。しかしなほ執拗に望をすてないでもう一筋だけ陸へよつた貝殻の帶にそうて捜しながら歸ることにした。波うちぎはから遠いだけ貝が大きく疎におちてるので身を屈めずに樂に物色することができる。私は間もなくひな貝の完全なのを見つけた。なんといふ微妙な曲線だらう。それから淡紫色のうみぎく?を。外套の右のかくしに入れる。丈夫なのは右、脆いのは左ときめてある。存外油斷がならないぞ　さう思つて私はだいぶ元氣づいてきた。次にはまがきをひとつ、形は好かないが色の配合のために。總じて自然は私よりもよほど自由に寬大な藝術家のやうにみえる。そんなにして私はせはしいほどいろいろさまざまな貝をひろつた。概してこの帶には綺麗なものよりは澁いもの、凝つたもの、變つたものが多い。思ひがけぬ收穫にほくほくしながらゆくうちに奇態なものがころがつてるのに氣がついた。やつぱりなにかの貝だと思つたにちがひない。拾はうとしたらはこ河豚(ふぐ)だつた。私はそれをそうつとかくしへ——左のだ——入れながら思はずくつくつとふきだした。さうだ。ツータンカーメンだ。このファラオはすこし生臭いのに閉口するが。彼はたぶん二三日まへまでは廣大無邊なその領域を悠遊してたのであらう。それが一朝運命の波に弄ばれてこの濱にうちあげられた。

そして太陽という偉大な技術家が忽に彼をミーラにしてしまつたのである。私は得意に網小屋のところまで戻つてきた。小屋の戸があいて網が一面にひろげられ、そのうへに漁師たちがあぐらをかいて破れめをつくろつてゐる。坊主頭に紅木綿の向ふ鉢巻をして神妙にあばりをとほしてるのがなにかおどけた蟲けらみたいな感じをあたへる。私はその網の縁にそうて砂丘をこえて歸つた。

私は件のはこ河豚を机のうへに、大きなまま貝のうへに坐らせた。筏につて常世の國から吹き流されてきたかたちだ。見れば見るほど奇態な奴だ。いつたい海のなかにはときどきかうした剽輕者がゐる。これは造化の戯でもあれば驚くべき妙工でもある。私は採集した貝の水けを拭きとり、砂をおとし、溝のなかなぞにはさまつてるのを物のさきでたんねんに掃除して机にならべるうちに大小百何十の貝がいつぱいになつた。あらゆる形、あらゆる色、あらゆる曲線、無地も、小紋も、更紗も、飛白も、お好み次第にある。それに見とれながら　こんなにしてるがまた可愛い子供にでもねだられれば目を細くしてやつてしまふのだ　と思ふ。さうしてさう思ふことが嬉しくてひとりでにこにこしてゐる。

午後。庭の樟の木の蔭で子供たちがうすべりを敷いて遊んでゐる。どういふ場面なのかみんなころころ寐ころんで眠つたふりをしてゐる。とにかく夜だ。そのなかのひとりが赤ん坊――人形ではない。ほんとの赤ん坊だ――をそばにねかせ、自分の羽織をかけて守唄をうたひながらたたきつけてゐる。これはまねことでもあり、本氣でもある。

かちかちやーまのどら猫はー
人せえみーればくひたがるー

この小さな孟母は子供を坂田の金平にする氣らしい。

女中が茶菓子にあべかはをもつてきた。私は彼女が田舎娘らしいのと、そのくせなかなか利口で要領がいいのとが氣に入つてゐる。

「まあ綺麗な」

彼女は貝を見ていつた。もしそれがお愛想ならば私がここへきてから唯一無二のお愛想だ。彼女の名はお竹といふ。

お竹十七房州そだち
頬が赤うて丸顔で
鼻は圓子で目はさがりめで
世事はいはねど愛嬌者で

唐土傳來孟宗竹の
ほんにみのあるお竹どん

お竹十七島田にいうた。
花のかんざしたてやの字
鹿の子まだらにお白粉つけて
出尻鳩胸そと鰐あるき
いきでいなせでまつ黒助な
鮪みたいな殿もたしよ

だいだい飾りしめかざり
つくや牡丹餅杵の音
小屋にはうゑし牛の仔が
かひばをねだる胴まごゑ
どうだね爺さん　かひばをやんなよ
そんなに食はせちや　もと値がきれるよ

ぢやかとて爺さん　もぎどぢやねえかよ
婆さん世のなか　そろばんづくだよ
こけこつこつこつこつこう

安房の濱べの漁師村
今日は正月十五日
さらの駒下駄いそいそと
やどりに歸る娘つ子

二十二日

おれの素姓をかたるなら　はばかりながら九重の
花のお江戸のまんなかで　音にきこえし神田つ子
性にあはねば生粋の　纏もちにもならないで
四十男の今日までも　あきずにまはす火の車
大八車横車　おしてもとほす口車

たから車はむかふから　よけるぴいぴい風車
うき世三界くるくると　まはりあるけばぜひもなや
縞の財布もきんちやくも　江戸の名物からつ風

夕。この邊は氣候が暖いせゐか方方に柑橘類を植ゑてゐる。この中二階のしたにも二株の夏蜜柑がある。私は讀書に倦み筆をとり疲れたときなど障子をあけてそれを眺める。暗綠の厚ぼつたい葉のあひだに目のさめるやうな數十の黄色い果、それはおほかたの花のやうに風に散り色のあせてゆくあわただしさ、うはだたしさはなくて、唉いたものではなしに結ばれたものにふさはしい靜な落ちつきをもつてゐる。そこには桃や林檎にみるやうな柔み、あたたかみはないかはりにときじくのかぐの木のみらしい一種の趣がある。私はこの夕べをまだ歌ひならはぬ鳥がまぢかい木ぬれでこつそりと囀りこころみるのをききながら、しめやかにふる春雨がその葉をぬらし、甘露のやうな雫がその實をつたふのをじつと眺めつくしてゐた。さうしてふと幼少の折のことを思ひだした。そのじぶん私はあまりに美しいものの刺戟に堪へかねて——その息のつまりさうないらだたしい惱を今も感ずる——それを無茶苦茶にしてしまふことがよくあつた、たとへば草双紙の繪を墨で塗りけしたり、麥藁細工の綺麗な箱を踏み壞してしまふといふやうに。そしてこの頃でさへも私の五感はそれが謂ふ所の快感を齎す場合のみを考へても已に大きな重荷である。もし

このうへなにかの感官があつたら私は感覺に殺されてしまふであらう。

二十三日

山あひの　勝山みちを
うねうねと　のぼりゆけば
春なれや　路ばたの
馬糞より　犬の糞より
ほほらだつ　かぐのかぎろひ
林に鳴く　ひよどり
めじろ　すずめ
のさり　ばたり
たらたらと　たれる涎
山なす　肥たご
背負ひくる　すほんだ
そのあとに　千鳥足

くはへ烟管の　仁右衛門
ぺたりぺたり　ほういほい
すれちがふ　都人に
愛想にたたく　牛の尻べた

二十四日

この部屋から見降す西側の畑のくろには枇杷の若木がならんで綿毛の生えた葉のあひだに白つぽい蕾がふくらんでゐる。そのなんの風情もないすうつとした枝や木ぶりがなにがなし私を喜ばせる。この枇杷を見ると私はあの山田を思ひだす。彼が死んでからもう十年にもなるだらうか。私はひと夏彼が保養してた播州のある片田舎へ遊びにいつたことがあつた。山田は家で持つてる一軒の田舎家に一人ゐて大阪通ひの百石船の船頭夫婦に世話をさせてゐた。私はそこで厄介になりながら我儘一杯にふるまひ、威張り放題に威張りちらした。そのじぶんのむしやくしやした私にはそれがなによりの氣保養だつたのだ。併し永い間には善良な山田も流石にたまらなくなつてなにか愚痴みたいな苦情みたいなことをいつたにちがひない。で、ちよつといさかひみたいな具合になつた。彼はほんとに勘忍袋をはちきらしたらしかつたが、こちらは平氣だつた。私はいつものやうに庭へもちだした帆布張りの手製の安樂椅子に寐そべつて默つてゐる。むかふも默つて

たが、やがてそばにある枇杷の木へ登つて實をとつてくひはじめた。ちやうどこんな若い木で、あまり大きいはうではない山田が登つても折れはしないかと思ふほどゆさゆさした。默つて食つて默つて種子をはきだしてゐる。やや暫くそんなにしてるうちに

「おい枇杷をくはないか」

てなことをいひかけた。聲がふるへてゐる。知らん顏してゐる。するとこんどは人をめがけて種子をぶつけはじめた。で、たうとう私が笑ひだしたかどうかして芽出度く和解した。十五、六年も前のことである。山田は善良そのままの人間だつた。その善良は生れつきだつた。悪いことをしないのではなくて出來ないのだつた。彼は道德的方面に於てはもとより藝術的方面に於てさへも感謝すべき多くのことを私に教へた、彼はそれらについて心から己を貧しいものとして卑下してたにもかかはらず。もうひとつ私に山田を思はせるものは眞理に對するその最も眞摯な、無私な、微塵も曇りのない熱愛である。私の仲間のうちで彼のみが眞に眞理を愛する者であつた。彼こそ眞に眞理を求める者であつた、さういふ私はかつて眞理を知らず、また求めるすべも知らないのであるけれども。

二十五日

宿のおばさんが小浦の濱へ行くと貝が澤山あると教へてくれたので朝早くから出かけた。ひと

つ村だけれど隣の濱で、その名のとほり小さなところだ。沖には紫の幕を張つたやうに濃い霞がたちこめて、帆前船の歪形の帆が幻のやうにそのなかへ消えてゆく。濱には足の踏みどころもないほど貝があつた。よく夢で七珍萬寶が山のやうに積んであるところへゆくとそれが化けもののの住みかだつたりする。ちよつとそんな魘(おそ)はれるやうな氣もちがした。併し私は幸みこし入道につるしあげられもしずに無事に根氣よく拾ひはじめた。

小浦のはまに　きてみれば
さくら貝　帆貝
きぬがさの　貝もよれ
その貝の　な色にほふ　この濱を
わたつみの　寶の濱とこそよばめ
あはれこのはま

二十六日

石原に　のりとる乙女

渚に　貝ひろふわれ
ほのぼのと　海はかすみて
春の雲　しづかにうごく
うららかに　光さして
かぎろへる　あしたの濱に
なれはとる　いのちのたづき
われはひろふ　こころのかて

鯖よしかねえ　かん鯛安いよう
歸りくる　海べのそばぢ
すれちがふ　賤の女が
肩なる籠に　はねるいろくづ
かははぎ　かさご
かん鯛　ぶだひ
いさぎよき　魚のかずかず
宿六が　けふの海さち

山かげに　姿はきえて
潮風に　のこるよびごゑ
さばよしかねえ　かん鯛安いよう

三月二日

きほふかぢきかすつきりと
五つならんだ新造ぶね
艫にはなびく大漁ばた
赤の大の字二つびき

今日は大漁ぢや大吉ぢや
鯖ぢや小鯛ぢやびんながぢや
えんやえんやらえんさつさ
みよしをみがく小若い衆

闘球盤

茶の間の縁先で爪をとつてる時むかうの坂のあたりから調子の高い口笛がきこえてきた。くるな　と思つて待つてゐる。どこもかしこも松ばかりのこの海岸に家をたてるのに松風や波の音は考へたがこの口笛は夢想もしなかつた。小さなお友達はまつたく拾ひものだつた。やがてざくざくと玄關まへの玉砂利をふむ音がしたかと思ふと　ごめんください　と神妙にいつた。相當のやんちやながらさういふことはよくしつけられてもゐるし大人らしくやつてのけるはうでもある。出ていつて扉をあける。とたんに　勘坊や　と妙にふしをつけてくすぐるやうにいひながら可愛らしい笑顔がはひつてきた。得意が口もとからこぼれさうだ。こいつ！　とひと睨めしてあとの扉をしめる。「銀の匙」を讀んだか、誰かにきいたにちがひない。茶の間へ案内して私はいつもの席に柱を背にして坐る。と、飼猫みたいに默つてすつと膝へのつてくるのを背中へ兩手をまはして支へてやる。頭がちやうどこちらの顎の下にある。虚弱ながら榮養の充分な子供によく見るやうに柔くふとつてまだ乳の香が殘つてゐさうだ。お友達は膝にまたがるやいなやひとの胸もと

をひろげて

「やあ、中さんの胸白くて綺麗だねえ。僕もさうなりたいなあ」

といふ。

「家でもそんなことするのかい」

「このあひだパパの眉毛のにほひをかいだらうるさいつて叱られた」

「叱られるのがあたりまへだよ」

「さうお」

といふそばからひとの眉毛をかいでみてパパのとちがふといふ。よく食べるとみえてはだかつた著物から大きな腹がのぞいてゐる。その臍を指でいじる。

「なんだひとのとこへきて臍なんぞいじつて」

とわざと怒鳴りつける。

「僕お臍いじるのだーいすき。でも家でいじると叱られるから中さんとこへきていじるんだ」

といい氣もちに笑つてゐる。そのうちお友達は袂から映畫のプログラムを出して見せはじめた。貰ひためてだいぶある。大事の、そして自慢の蒐集だ。これがチャップリンで、これがダグラス・フェヤバンクスで　といふけれど殆んど全く映畫を見たことのない私には相槌の打ちやうもない。ふんふんきいてゐる。知らずに留守へ遊びにきてがつかりしないやうにと

「あしたは東京へ行く」

といへば

「ずるいやーい　ずるいやーい」

と身もだえして

「いつしよにつれてつてよう、よう、よう」

と鼻聲になる。東京といへば映畫と思ふのだ。で、暫くにやにやして焦らしたあげく家の用事のためだと說明してやつと納得させる。

「ぢや品川のサンドヰッチをおみやげに買つてきてちやうだい。僕品川のがいちばんすき」

「中さん遊んでちやうだいよ、僕こつちにお友達がなくてつまんなくてしやうがないんだから、お友達の家への往復は品川のりかへなのだ。

僕東京へ歸りたいんだけどさういふとパパに叱られるから」

毎日日がな一日ママとさし向ひではどうしやうもないらしい。せつかくここまで丈夫になつたのだからもう暫くといふのだらう。子供にとつて遊びや遊び相手がないのは生きがひがないことである。しみじみとうつたへるので可哀想になり

「ええ　ええ　いつでも遊びにいらつしやい、仕事の忙しい時や東京に用のある時は困るけれど」

「さう？　ほんたう？　お邪魔ぢやない？　僕東京へ歸りたいんだけどなあ」
と小さな胸に思ひあまつて嘆息する。そんなにして甘えたりかこつたりしてるうちに
「中さん今夜遊びにいらつしやらない、闘球盤するから」
といひだした。いつぞやから　闘球盤は家ぢゆうで自分がいちばんうまいのでママも姉ちやんもみんな負かしてしまふ　といつてゐた。そこへまた私を負かして手下にしようといふ算段らしい。甘んじて手下になるつもりで承諾する。
「ぢやきつとよ。指つきり」
とちつちやな小指をだす。で、倍もある私の小指とからめあひ堅く約束をして膝をおり、またざくざくと玉砂利をふんで歸つていつた、今夜の花ばなしい勝利を豫想して威勢のいい口笛をふきながら。
入浴後夕食をすませ、外出用のゆかたに著かへて出かける。鹽けと濕氣を含んだ海岸の空氣は油のやうに肌に粘りつくので浴後の氣もちが殊に爽かである。ママとはまだおちおち話したこともなく、散歩の往き戻りに始終垣の外を通りながらつひぞ訪ねたこともないゆゑいささか窮屈な氣もする。で、たゆたはしく押し戻されるやうな工合でなにか口ずさみながら重い足を運んでゆくのだが、むかうの高臺へ二町ばかりしかはなれてゐないのでおきに行きついてしまつた。裏口の生垣の間をはひつて井戸ばたを玄關へまはる。綺麗に掃除して水がうつてある。もとの別莊が

地震でつぶれたあとへ建てた假普請の瀟洒たる洋館だ。なに心なく住居のはうへ一足家の角を廻つてみたら、松の綠のなかに夾竹桃が目ざましくさいてる肱かけ窓のところに夕方のお化粧をすませたママが鸚哥のやうに坐つてゐた。小さな胸に溢れる喜びに迎へられて部屋にとほる。建物は程よく傾斜した南表の廣い邸の北側の平地にあつて、やや伸びすぎた松のひまから數町先の海が思はせぶりに透いてみえる。あごととのふる蜑のよび聲の歌も思ひ出される。潮風が夾竹桃をそよがせて香料の圓やかな匂ひをはこぶ。今はじめてゆつくりと向ひあつたママと私の儀禮の金絲をまじへてとりかはす言葉の色絲の綾とりのうちに殘光につめたく照された波や帆がやうやく暮れて、色深くなりまさる夜の帷から天上のもののかいまみる瞳のやうに星がちらほらと耀きだした。そこへ手ぐすねひいて待ちかまへてたお友達のために闘球盤が持ち出された。私は窓を後ろにママを左に可愛らしい敵と相對した。敵は必勝を期して緊張のうちにもにこにこと餘裕を示しながらじやん拳をして先をとる。それぞれちがつた意味をもつ六つの目の注視のうちに形のいい指がパチリと一の矢を放つ。うまい！　なるほど自慢するだけのことはある。だがこちらも昔とつた杵柄だ。狙ひすましてパチリと彈く。とたんにお友達の顏からすつと微笑がきえる、油斷ならないぞ　とばかり。黑白入り亂れて討ちつ討たれつするあひだにママは傍からお愛想まじりになにかと話しかけるのをお友達は焦れて　話しちやつまんない　話しちやつまんない　と駄けてつてママの口を手でふさぐ。勝たないやうに、負けすぎて興味をそがないやうにと加減してあ

しらへば夢中になつて　すこし位置をかへてもよござんすか　とあつちへ動き、こつちへ動き、しまひには汗ぐつしよりになつて盤のまはりを走りあるく。運動がすぎて熱が出はしないかとママははらはらして　俊一さん氣をつけてちやうだい　俊一さん　と俊一さんがその場で壞れさうに注意する。さういふママもいつしよに壞れてしまひさうだ。潮風にも吹きちらされぬ母の愛の妙なる花のかをりが修羅場となつた部屋のなかに充ち溢れる。有り難いものだなあ　とお友達にかはつてお禮がいひたくなる一方　これは困つたことになつた　と負けよう負けようとすれば意地惡く點がすれすれになつて相手はますます熱中してくる。いよいよこれが最後の私の番になつた。お友達は蒼白い頰に上氣して息をはずませながら目をすゑてこちらの指先を見つめてゐる。私は那須の與一を逆に　弓矢八幡この一發をはづさせたまへ　と一所懸命見當をちがへてパチリと彈いた。タッ！　球は柱にあたつてはねかへりからりと穴にはひつた。扇の的だ。私は　アッといつて思はずママを見た。はじめからわかつてるママは私の當惑した樣子を見てとつて氣の毒さうに笑つてゐる。と、敵は急にくたくたと凋れて

「負けちやつたあ」

と今にも雨になりさうにママに寄りそつた。が、やさしいママに

「中さんお上手なんだからしかたがない。俊坊も大きくなればもつと上手になれる。まあ、こんなに汗をかいて」

と體をなでられてやつとこさ元氣をとり戻した。私は鍔ぜりあひでへとへとになつたお友達を早く休ませなくてはと思つて匆匆に暇をつげた。お友達はママといつしよに海岸へゆく小路の邸の角まで送つてきた。寂寞渺茫とした松の林の上に月が皎皎とかかつてゐた。私は目のあたり貴いものを見た喜びを抱いて人げのない道を家に歸つた。松のなかから松のなかへ。

大正十三年—昭和二年

母の死

これらの斷片は昭和九年九月の初旬母が重態に陷つたときから十月の初旬その最後のときまでのあひだに書かれたものである。

斷片。この愛別離苦のうちから私が人人におくる贈り物は「律法を妄りに人情の自然のうへにおくな」といふ忠告である。私どもは世の親と子があるやうに、はたあるべきやうにお互に心から愛しあつてゐながら、すくなくとも私のはうではよくそれを承知してゐながら眞にうち解けて馴れ親しむことができず、いつも一枚のガラスを隔てて眺めてるやうな趣があつた、そこには律法のほかに別にまたいろいろ錯雜した理由、原因もあつただらうけれども。

今夜私は連日のみとりに疲れた人たちを休ませ、看護婦さんとふたりで夜どほし母のそばについてゐた。きのふの脈搏不整からけふの結滯。浮腫、チアノーゼ。力弱く數の少い呼吸が見てるうちにときどきとまる。看護婦さんが輕く胸をたたく。と、息を吹きかへす。母は麻醉劑のため

に些の苦痛もなく眠りつづけてはゐるが、それは母といふ特殊の意味で親しい肉體を戰場としての生と死との最後の戰ひであり、力つきた生が今しも打ち倒されようとする瀨戸際である。その音もなく形もない凄じい戰ひを極度に澄明な、靜寂な、胸に充滿しながらどこまでもひろがつてゆくやうな感慨をもつて凝然と、また茫然と眺めつくしてゐる。そのうち看護婦さんがなにかの用で臺所のはうへ立つていつたあとに私はとんだ悪いことでもするやうにそつとひとつ母の額に口つけた、私にとつても母にとつても生れて最初の、そしておそらくは最後となるであらうところの愛の表示！　すべて體の使用されない部分が萎縮し退化するといはれるとほり、私の愛の表示もその肝心な幼若の時期において不自然な束縛と禁遏をうけたがために奇怪にも特に父母のまへに萎縮し退化してしまつた。で、母に對する私の愛もいはば內攻して、その表示も間接的であつた。さうして母が獨りになり、年をとり、淋しくなつて私にもつと直接な、もつと明瞭な、もつと熱情的な愛の表示を求めるやうになつたときには幾十年の宿痾はすでに膏肓に入つてもはや如何ともすることができなかつた。十年もまへのことだつたらうか、夏、母と二人きりでこちらの留守番をしてたときに母は私に訴へるやうにいつた。

「このせつは話し相手もないし私はそりや淋しいもんよ」

私は胸いつぱいになりながらしかも眉毛一本も動かさない無表情で答へた。

「私も淋しいんですよ」

これが餘人に對しては全く自由な、あまりに自由な、屢ば粗野、非禮にさへわたるほどの愛の表示をする私である。

斷片。昨夜は重態のままどうにか越した。朝、私が茶の間から行つて病室の障子をあけたら□さんが坐つてゐた。おお　私はそんなことをいつてなにか挨拶をしたらしい。姉が知らせたので長野から夜行で今著いたところだつた。

「折角いいものを送つて下すつたのに……」

さういひかけたらいちどきに涙がこぼれさうになつたのをそのままさりげなく茶の間のはうへきてしまつた、先頃母へ自分で編んだ溫かさうなちやんちやんこを送つてくれたそのお禮もいはうと思つたのだが。

斷片。ただ末期をらくにするために思ひきり注射した麻醉劑がきいてゐるあひだの昏昏とした眠りから醒めたときに母は奇蹟的に元氣を恢復した、病苦もなく、浮腫もへり、脈も呼吸もよくなり……蘇つたやうに、併し結局は壽命はないのだけれど。たぶん時の問題が日數の問題になつたのであらう。病苦と共に心の煩ひも忘れて靜に横はつてゐる。

「みんなきとくれたはねえ」

母はもう一遍あいた目で枕べによる兒孫たちの顏を見まはしながらそんなことをひと言いふ。凡てが自然と天命である。逝く者もとどまる者も落ちついてゐる。

斷片。母は今度病氣が重くなつてから　末さ　末さ　と姉を呼んでばかりゐる。病氣といへばいつもよく看護してもらつたからといふばかりではなく偶然の事情から充分に姉を信賴することができたからである。お互はもとより私たち皆にとつてまことに仕合せなことである。

斷片。母の力ないとぎれとぎれのひと言ひと言を私は金言のやうにききのがさない、若い母親がはじめての子供にするやうに。それは生への進軍の最初の雄たけびなるがゆゑに、これは死への退却の最後のかたみなるがゆゑに貴い。

斷片。私はちよいちよい病室の樣子を見にいつて換氣のためすかしてあるガラス障子の間からのぞく。眠つてゐればそうつと歸つてくるし、醒めてゐればはひつて暫く顏を眺めたり、枕もとに坐つたり、短い言葉をかけたりする。朝はいちばん母の氣分がいいので私は大抵起きぬけに寢卷のなりいつて　おはやう　をいふ。母もゆつくり微に　おはやう　といふ、はなれたところから反響してくるやうに間をおいて。はじめのうちの衰へながらも晴れやかな　おはやう　が日が

たつにつれて張りのないうす暗いものになつてきた。

母を見舞ふ私は看護婦さんのゐないときには——後ではゐてもやるやうになつたが——二、三度しづかにその頬をなでる。あるとき母はけげんさうに

「くるとどうしてさするの？」

といつた。私たちが笑つたもので母も釣り込まれて笑ひの影を浮べた。愛撫——これが私の愛の特質らしくも思はれる。私は何人に對してもさうした愛をもつ。過日の重態ののち母が急に病み耄(ほ)けて子供らしくなつたために私は憚るところなくこのやうに母を愛撫し、母もまた快くそれを受けることができるのである。

断片。母は目はみえても人の識別ができないことがあるらしい。で、私は仰向けに寝て目をあいてる母のうへへ身をかがめ顔を近づけて名のりながら

「かはいいでせう」

といつた。と、青天の霹靂(へきれき)とでもいふやうに

「そりや子だもの」

といつた。皆が一度に笑つた。よくわかつてたのだ。

断片。ちやうど病室に兄がゐたときに——健康なじぶんからこんな場合になると兄は私よりもずつと氣が弱いのだが、今は自分もものがいへないのではたの見る目も氣の毒なほどしよんぼりと心配さうに母を見まもつてゐる。——母のところへ葛湯がきた。母は葛湯ときいて

「葛湯なら半分おぢいさんにあげませう」

と微かながらそれはいい笑顔をみせた。可愛いのだらう。平生は名をよんでたのに今度悪くなつてから兄のことをおぢいさんといひだした。葛湯がたいした珍味でもあるかのやうに飲み殘しの半分をくれるといふのをほしくもなささうにためらつてる兄にそばから私たちが　折角だから　とすすめて飲ませる。どちらも病ひに暗まされた頭である。あはれに涙ぐましい。

母は姉にむかつて

「□□さんにおぢいさんのことをよう頼んでちやうだい」

といつた。私に兄の世話を頼むといふのだ。病身の子を思ふのである。私は母のはうへ顔を出して

「心配することはありません。これがゐるから大丈夫です」

と自分の鼻の先を指でちよんの叩いてみせた。

断片。□□さんがなにかたべさせながら

「たんとたべて八十八のお祝ひをなさらなくちや」
といへば母は
「まあ生きたいことない。はよ死にたいが死ねん」
といふ。ふだんは生に對する執著が隨分強かつたがかうなると自然そんならくな氣にもなるとみえる。どことも疎遠な私は知らないけれども家に子供がないので母はよその孫たちを可愛がつたのであらう。かはるがはる見舞にきては枕べに坐つてゆく。そんなにされながらもはや生への執着も後に殘る心配もなく、あすのおやつの果物の注文や好物のあづき粥のことなど考へながらこの世を去つてゆく母は。

斷片。この頃は頰を撫でてももう笑顏をみせなくなつた。いよいよ衰弱が加はつてきたのだ。けふまたさうしたときに母は
「さすつとくれてももうようならん」
といつた。アイスクリームを匙にすこしづつとつて子供みたいな口をあいて待つてる母にたべさせる。記憶にはないが私も母にかうしてもらつたことがあるにちがひない。反哺（はんぽ）といふ言葉の味をしみじみと知る。

斷片。何遍となく顏を見にゆく。いつも眠つてゐる。すやすやと眠りつづける母を呼びさましたい氣もちだ、子供のときのやうに。脈管が絲のやうになつてきた。目をあいたらしらせてくれるやうについてる□□さんに賴んでおいて茶の間でこれを書く。

斷片。目をあいたといつて呼びにきた。行つて冷たい手をとる。こんなときよく母の目にわづかに涙がにじむことがあるのは偶然かしら。それともなにかの涙かしら。私は笑顏が見たいばつかりに譯もなく笑ふ。と、表情を失つた顏、殊にその目と脣に微笑の影がほのめいた。私はそれにたんのうせず人さし指で母の鼻の頭を輕く叩いて笑つたらどこにどうとはいへないが微笑の影が濃くなつた。それで滿足した。そして舌の先を見せたまま小さくあいてゐる口へ一匙二匙の水をいれた。

母が目をぱつちりあいた
待ちかねた目をぱつちりと
みんなこい
みんなこい
目をあいたぞぱつちりと

けさから待ちかねた目を
けさからさ
見える？
かすかなうなづき
水？
かすかなうなづき
一匙　二匙　三匙
ついぞ見ないみみづくみたいな顔をして
三匙　四匙　五匙
不思議にのんだ　目をあいた母が

斷片。鼻を叩いて笑はせたのはきのふの朝だつた。ものがいへん　といつたのがその午後だつた。けふはもう微笑の影もない。朝病室へいつたら目をあいてゐた、妹の最後のときのそれとおんなじ切れの長い目を。蒲團のうへをずらすやうにそろそろと私のはうへのばす手をとつて前屈みに顔をよせる。母は顔をしかめながら苦痛と衰弱にもつれる舌をやうやく働かせて

「けふは死ぬ」

といふのを
「灌腸がきいたかららくになつたでせう」とそらせる。その返事もただやつとこさとうなづくばかりである。妹の死ぬときもさうだつた。

斷片。子供子供した氣嫌のいい顔はもう見られなくなつた。目をさました母はいつも惱んでゐる。覺醒して苦しんでるのよりは麻醉した寢顏のはうが見たい。赤子みたいに力なくうめいてゐる。母よ、母よ。膝のうへに手をとつてゐても母は刻刻に私を離れてゆく。

斷片。魚のやうに喘ぎつづける。痩せ細つたその手をとりつつ思ふ、私どもは五十年母と呼び子と呼びあつた。お互のこの呼び名もいま暫くのあひだである。
大きな自然の力によつて律法、道德、等、等多年の障礙が取除かれたがために私どもは赤裸裸の親子として完全に相愛することができた。これがいはば最高の道德である。
母とのみいはず、凡て家人に對するこの年頃の奉仕に何等かの報恩、または悔過の意味があるとするならばそれは甚しい誤りである。これは私の自然であり、持つて生れた愛である。さうして律法的にはもとよりただのあたりまいのことだけれども、道德的にはしがない私の生涯に於ける最も大きな建設である。

斷片。病勢？は急に進んできた。呼吸困難。昏睡。

お互に認識しあふ機會は永久に去つたかとあきらめてたら夜の十一時になつてひよいと目をあいた。手をとる。みづ　みづ　といふので少しづつ匙でのませる。やつと嚥下することができる。一夜の宿をかした旅人の別れ去つたのがふとふりかへつて遠くからもう一度挨拶をしたやうな氣もちだ。

斷片。右にも左にも向くことができず、舌がもつれてものもいへず、仰臥したまま徒(いたづら)に意識ばかりはつきりしてる母の手をとつて一日を暮す。老衰して命を終へるにさへもこれほどの苦痛をうけなければならないとは。

斷片。意識は確だが目をあかなくなつた。母よ、母よ。私はもつと見てほしいのに。

斷片。朝目をさますと　ああまだ母は生きてたなあ　と思ふ。呼び起されなかつたからだ。けさは綺麗な夢をみた。うつつの國の言葉のたどたどしさは夢の國の有樣、夢みる人の心もちを十に一つもいひ現はすことができないけれども、今試みに書いてみようならば、西のはうの海岸にみるやうな赤ちやけた地肌のあらはな花崗岩の丘がぎざぎざに連り、うねうねと彎曲して、

かなり間遠く兩岸を形づくつてゐる。そこには小松などまばらに生えてたやうに思ふ。そのあひだをよく南畫などにある一面隙間なく小波のたつた海が流れてゆく。見かけからは河とか瀨戸とかいふべきだらうがそれがどうしてか海だつた。かと思へばあるところは潟みたいに水が溜つてもゐる。さうして全體の景色がパノラマのやうにどんよりをどんで霞んでゐる。せいせいと柔に潤ひのある眺めである。私はその丘のひとつの峯に立つて無數の小さな入江をつくりながらどこまでもうねつてゆく岸に沿うて見わたした。荒涼として人影もない。里遠いところだなあ　と思ふと同時にいひしらぬ寂寥が一時に襲つてきた。それがまた目のまへの自然に反映していつそうその淋しみ懷しみを深くした。と見るとあちらこちらの入江にすこしばかりの人が水をあびてゐる。それが寂寥の精でもあるかのやうに微塵も風情をそこなはない。私も潮をあびようと思ふが夢の常のもどかしさでどうしてもはひることができない。はひれないのかはひらないのかもはつきりしない。ただはひらうはひらうとするらしく丘のうへを彷(さまよ)つてるうちに目がさめた。蒲團からのり出した右腕が冷たくなつてゐた。ひえびえとした時雨の朝である。私はすぐに母を思つた。そしてまた思つた、これほどまでに思つてるのに夢のなかには母もなければ生死もなく、ただ夢ばかりがあるのはあやしくもまた不思議なことである。

斷片。夏の留守番のあひだ母の希望によつて私どもは隣り合ひの部屋に寢る習慣だつたが、そ

れでもまだ淋しがつて母は境の襖をあけて眠つた。さうして度度うなされては私に呼びさまされて　ありがたう（國風にがの字にアクセントをつけて）牛にぼはれた（追はれた）なぞといつた。よくそんな夢をみるのだつた。

断片。蒼白い死の色の漂ふなかに鉢植ゑの雞頭の花ばかりが燃えさかる生の色をめざましく日光に耀かしてゐる。

断片。きのふ耳下腺のあたりが脹れる痛みで悩んでた母は脹れてしまつたけふは痛みもなくらくらくとしてまたみみづく顔になつた。ぶくぶくしたところに皺がすいすいとよつてゐる。ぱちつとあいた切れの長い目。赤ん坊みたいにあいた歯のない口。私はいはば幾十年このみみづくにあこがれ、待ちこがれたのである。

断片。けさは氣嫌のいい笑顔をみせたさうだ。私は寐坊をしたためにそれを見そこなつてしまつた。夕がたの診斷によるとあと一兩日だらうとのことだ。もう見られないかもしれぬ笑顔だつたものを。冷たい手を自分の溫い手のあひだに挟んでたらなにかいひたい様子なので耳をよせる。あした　といふだけがやつとききとれた。あした死ぬといふのかもしれない。

夜。母の眠つてるひまに茶の間で兄と碁を打つてるとき目をさましたといふ知らせがきた。碁を崩してゆく。顔を近づける。切れぎれに細ぼそと　あした　といつた。それから先は聲がつづかないのだ。なぜか「あした」にこだはつてゐる。あしたは死ぬ　だらうと思ふ。で、額を撫でながら

「あしたはけふよりらくになりますよ。今日は昨日よりらくになつたでせう」

と話をそらせば

「そうお」

といふ。すこし口をしめしたらぢきにまた眠つた。

断片。妹の死から二十幾年を經て私の智慧はいかほどかより明になつたかもしれないが、年をとつた私の氣は目にみえて弱くなつた。私は母を失ふ悲しみにくづほれてしまひさうだ。

断片。吐氣がくる。けさはかた目だけ半分あいた。しかし見分けはつく。口をしめしたらぢきに眠つた。

断片。いよいよ最後の時が迫つてきたやうだ。ときどき見えさうな目をあいて見まはしたり、

人の顔に視線をとめたりするがわかる様子もない。なにをきいてもうなづくこともしない。ただ反射的に手足を動かしてるらしい。苦痛もない。おそらく苦痛を感ずる力もないのだらう。私との感情關係は母のはうからはもう斷たれてしまつた。きのふあの力ない聲でけふのこの狀態を豫感したかのやうに　あした　といつたつけが。

夜。冷つこくなつた母はこの世につくべき息の殘りをしづかについてゐる。母の臨終が精神的にも肉體的にも安らかなのが嬉しい。をりをり首をうごかして　ひゆう　と微かな聲を出す。ひとりでに出るのかもしれない。そんなとき急に母が近よつてきたみたいな氣がする。母か、これはもうなかば母の記念像である、最初に私を抱愛したであらうときから五十年母であつたところの人の。

斷片。夢からさめてまじまじしてるとき□□さんに呼ばれた。母の樣子がをかしいといふ。起きて行く。ひと息ふた息の間にあつた。昭和九年十月八日午前四時十五分、母は八十六年の長い壽命を終へた。

不信の信
無道の道

白玉
琅玕（らうかん）

母の死霹靂のごとく
音なき谷のごとし
五十にしてわれ幼な兒のごとく呼ばん
母よ　母よ
去りてゆくところをしらず
雲のごとく
風のごとし
とどまるものもおなじ
すべて虛空にひとし

ああ不信の信
無道の道
白玉

黒幕

ことしは先生がなくなつてから二十年めになるので「思想」の十一月號を漱石號にして緣故のある人たちがそれぞれなにか書くのださうだ。今から樂しみだ。それは、餘人はもとより先生自身も氣づかれなかつたことかもしれないが先生が私にとつてやはりなにものかであつたばかりでなく、執筆者の多くは程度の差こそあれ直接間接にその人を、またその人と先生との關係を私が知つてる人だらうからである。話は私のところへもあつた。原稿の〆切まで十日ばかりしかない。書くこととなると惡くいへば我儘一杯な私がいつになく卽座にそれをひきうけて末席を汚すことになつたのも畢竟その「なにもの」のためである。——先生は生前には私の最も敬愛した人のひとりであり、その後は懷しい記憶のひとつなのである。

私は「末席を汚す」といつた。これは私の柄にもない儀禮や謙遜ではない。私だけの感情は別として先生と私の個人關係は他の誰彼のそれにくらべると末席が當然なほど短く且つ淺かつたからである。

個人關係がさうなばかりでなく學校での師弟の關係に於ても同樣であつた。一高の一年から大學の二年ごろ先生が辭職されるまで私はまあ直系の生徒、學生のひとりだつたけれど、敎はることを覺えようとしないのが悪い學生なら私は疑ひもなくいちばんといふよりは唯一の悪い學生だつたらう。高等學校はともかくずつと自由な大學では十八世紀の英文學史の講義のはうは頭へさへ入れておけばいいと思ふところは筆記をしなかつたし、自分に必要がないと思へば缺席したし、偶ま筆記をするにしても頗る不熱心だつた。といつて私は決して講義そのものを輕視した譯ではない。ただそれがそのじぶん私の棲息した世界とはまつたく別の世界に屬してたからである。私はシェクスピアのはうへは割合實直に出席した。

先生の作物に對しても私は愛讀者でないばかりかただの讀者といはれる資格さへない。あれほど評判だつた「猫」も全部は讀んでゐないし、新聞小說を書かれるやうになつてからはまつたく讀まない。鶉籠といふ創作集だけはどうしてか學生時代に面白く讀んでその豐富が羨しかつたことをおぼえてゐる。近年俳句の選集をみて、私はつい知らなかつたが　なかなかいい句を作られたのだな　と思つた。先生の作品の價値については尊敬する友人たちの高い評價をそのまま認めてもいいのだらうとは思ふ。しかし私には今にいたるまで御緣がないのだ、恐らくはめくらに繪畫が、つんぼに音樂が緣がないと同じ意味に於て。

それからこれは餘技にすぎないが、先生の書畫についても私はいつかう無關心であつたためひ

とのやうにあれこれとねだつたこともなく、見る機會も殆どもたなかつた。その後版にした記念帖など頂いてみると素人藝ながら結構なものがあるらしい。先生はなんでもわかる明敏な頭と、やればなんでもできる器用な手の持主だつた。

そんな譯で私は學者としての先生にも藝術家としての先生にも御緣がなかつたものの一個の人間、有德の人としての先生にはひそかに心をひかれてゐた、それを先生にはもとより友人にも多分漏らしたことはなく、また性來はにかみ屋の億劫がりで引込思案のうへにいつたいに心醉的渴仰的態度をとり得ない私は友人の誰彼のやうに特にこちらから親近することをしなかつたけれども。

私が大學を出た翌年、病後の保養のために小田原にある親戚の別莊へ厄介になつてた間に先生の最初の胃潰瘍がおこつた。私は電報で修善寺へお見舞を出した。その後先生がよほどいいといふことをきいて、やぼではあるが美しく彩色した蝶形の麥藁細工の籠にいろんな色紙や千代紙でこしらへた折物、ちりちりなどを入れて送つたら小宮の代筆かなにかで手紙がきて、驚、ふくら雀と目錄を讀みながら枕もとへ並べるところが書いてあつた。先生はそれをみて

「このなかに中のこしらへたのは一つ二つしかないんだらう」

といはれたとか。いかにも私の作つたのは蓮花と鶴だけだつたかもしれない、今でもそれつきりしか折りかたを知らないから。二十幾年前の氣もちをはつきり呼びおこす由もないが私は先生に

對してよつぽどいい感情をもつてたにちがひない、單なるお義理でそんなことをする私ではないのだから。

先生のどこにいちばんひきつけられたか。この點では私よりもずつと關係の深い、いはば直參とか愛弟子とかいふべき人たちでも多分私とかはりはないであらう。學識に對する信頼、作品に對す傾倒だけが私の見うけるやうな風に人びとを先生に結びつけようとは思はれない。さうして一個有德の人間として敬愛されること、それは先生が最も高い意味に於てみんなの「先生」だつたことである。

先生と私の師弟としての關係は三十幾年前私が一高の一年の時からだが、個人關係は大學を卒業後二、三年して「銀の匙」を書いた時から始まる。それは先生の御盡力で朝日新聞へのることになつた。先生は私が不承不承にも原稿書きをしなければならなくなつた事情を人からきいて知つてゐられたのだらうと思ふ。なんだかよほど好意的、同情的に感じられた、誰に對しても親切だつたらしいが。その後ほかから新聞のはうでだいぶ迷惑らしい話もきいた。尤もなことだ、特に新聞といふものの性質上。それが掲載されたことも、中止されなかつたことも、紹介者、推薦者である先生のお蔭だつたらうと想像してゐる。その後また後篇をかいた。その時は先生と朝日の關係も前とはちがつてたためよほど御迷惑らしい様子だつたのを結局ずるずるべつたりにお願ひして再度朝日へ載せてもらつた。それを私は今でもたいへんすまなく思つてゐる。先生にかけ

た御厄介がどの程度のものかは知らないけれど私としては當時の事情が事情なり、今日までも深く恩義を感じてるのである。間もなく先生がなくなつたので私は作品を見て頂く機會を永久に失つてしまつた。時たまつまらぬ著書を出すたんびにこのことを心淋しく殘念に思ふ。

昭和十年十月六日

追記。黒幕云云は私ではなく別の人のことだとたびたび小宮豊隆氏から注意があつたからその部分を削除した。從つて表題の意味が不明になつたことをお斷りしておく。

チャリネ

半世紀にすこし足りないぐらゐ昔のことである。まだ學校へもあがらなかつた私は小さなかはごに——たぶん國の習慣でかういふ古風な言葉を使つてたのだらう。竹行李をとげのたたないために幾重にも草紙ではつたものだつた——ほかのおもちややがらくた物といつしよに澤山の繪草紙をもつてゐた。みんなが　澤山あつて羨しい　といふからさう思つてたもののたかだか十枚か二十枚しかなかつたのだらう。それは伯母さんの上手な繪ときをききながら自分でも見て樂しみ、人に見せびらかして樂しみもする大切な寶ものだつたが、そのなかに私がつまらながつていつも見ずにとばしてしまふのが一枚あつた。チャリネの繪で、馬が幾匹も並んで後足で立ち上つたり、奇態ななりをした西洋人がなにか藝當をしてるところだつたらしい。もともと好かなかつたのだからよくはおぼえてゐない。それはあまりに異樣なばかりか想像もつかないそれらの光景を樂しむには私の頭が幼弱すぎたからでもあらうが、また伯母さんも見たこともない異國のことには子供の心を浮きたたすやうな繪ときをしてきかせる術がなかつたからでもあらう。チャリネ？　私

は異人さんがそんなことをするのをチャリネといふのだと思つてたが、その後わかつてみるとチャリネ大一座とでもいふものが來たことがあつたらしい。舶來品でさへあればメリケンといふ時代のことでチャリネといふ發音もどうやら疑はしい氣がする。しかし今この机のうへでそれを確めるには私はすこし若すぎる。目のあたりそのチャリネを見た人もまだいくらも生きてるであらう。私が本當の曲馬を——サーカスなどといふ言葉は使はれなかつた——見たのはそれから幾年ののちアームストンといふのがきた時である。たしか三崎町の原——あの邊がかなりな原つぱで兵隊が演習なぞやつてゐた——だつたと思ふ。家の者と俥をつらねて日本にない曲馬といふものを見にゆく氣もちは譬へやうもなかつた。曲馬ばかりではない。今とちがつて交通機關の不備や生活程度の關係から乘物にのる機會をあまりもたなかつたその頃の子供にとつてはこんな時にのる俥はいはば物見遊山の重要な一部でもあつた。

原にはすばらしく大きなテントが圓く張られてゐた。それが最初の驚異だつた。そんなテントを見るのは勿論はじめてだし、テントからは雨が漏らないといふことを知つたのもたぶんはじめてだつたらう。居留地はしらず、東京でさへ西洋人といへば虎や象と同じぐらゐ珍しかつたじぶんのことゆゑテントのなかは驚異の連續で、まるで不思議の國であり、無上の樂園でもあつた。なかでも面白かつたのは異人の道化——ピエロといふ言葉も知らなかつた。——だつた。おしろいをまつ白につけて珍妙な樣子をしたのがとんちんかんなことばかりして仲間に笑はれたり叱ら

れたりする。かと思へばとても上手に逆立ちをしたり宙返りをしたりする。さういふふたりが馬場の反對の側に遠くむかひあつて、ひとりのはうがいくつも重ねて被つた筍帽子をひとつづつとつては相手のはうへ投げてやる。くたくたな筍帽子がしやんと生きて獨樂みたいにまはりながらねらひたがはず飛んでゆくのを相手は自分の被つた筍帽子のうへへちやうどよく重なるやうに頭でちよんとうけとめる。そしてへんないきみ聲で　メヒトチュ　といふ。モヒトツなのだ。その面白さが忘れられず、その後暫くの間まねをしたことをおぼえてゐる。

爾來幾十年、繪草紙や伯母さんはとうになくなり、私だけが生き殘つて年をおいて渡つてくるサーカスのかずかずを見ながらかやうに半白の老書生となつた。もとより今ではそれを見て昔のやうな興奮や驚異を感ずるわけではないけれどサーカスときくとアームストン以來この懷に眠つてる不思議の國のアリスがむくむくと目をさましてなんとなしに圓い天幕のなかへさまよつてゆくのである。

古今未曾有のオットセイのげいと
鼻のあたまで鞠をつく
パッ　パッ　パッ
ひとつできれば魚をもらふ

そばで轉げて拍手する
パッ　パッ　パッ

魚ほしさに海からあがつて
をかで働くオットセイ
パッ　パッ　パッ

年は十七今唉きそめた
一座花形メリー嬢
青い瞳に綠の上著
あけの脣白いシャツ
梢こづたふ小鳥のやうに
樂にあはせて　ラ　ラ　ラ
君はサーカス針金わたり
わたしやうき世の綱渡り

おしろいつけて墨ぬつて
かぶるとんがり赤帽子
ギターかかへてあじやら聲
唄のひと節うたふのも
お子供衆のお慰み
支度まつまの御愛嬌
客の御氣嫌とりむすび
世界を股にかけたとて
戀もぶげんもなるぢやなし
つもるは恥と年ばかり
運河に泊る幾艘の
荷船のともし影みえて
夕潮みつる芝浦や
あすの土曜は雨もよひ
はるばるきぬること國の
ピエロに寒き秋の風ふく

柳先生

生れつき臆病で人嫌ひな私は學校へあがるのがいやだとだだをこねてさんざ家の者を手こずらせたあげく學期のはじめも幾日かすぎてから伯母さんに手をひかれ屠所の羊よろしくとぼとぼと登校した。半世紀たらずの永い年月をへた今日でさへその時の不安、心細さ、氣が遠くなつたやうな、足が宙に浮いたやうな氣もちをまざまざとこの胸に感ずる。負け惜みではないがいはばかり弱い雛鳥にとつての塒ともいふべき家庭から學校といふ未知の世界へ追ひ放たれるのを平氣でゐられる子はよほど心臓が強いかぼんやりかであらう。私がはいつたのは尋常一年の乙の組で、柳先生の受持ちだつた。柳先生といへばすぐ私はその油けのない髪がぱらぱらと風に亂れた様子を思ひ出す。教室は南向きの石崖の上にあつて日あたり風通しがよかつた。學期のはじめといへば四月だつたらう。春風に柳先生では落し話めくが、先生は文字どほり風に柳の溫柔さをもつてまだ玉子の殻のついてる子供に讀み書きを教へるかたはら鼻をふいてやつたり、喧嘩の仲裁をしたり、教師と保姆の役目を半半にやつてゆくのだつた。先生はあばたがさして珍しくないその當時

にそれがあだ名になるくらゐのあばたで、そのためやさしいといふ評判とは反對に見かけが怖ろしく、おそらく年に似合はずぢぢむさくみえた。そして疱瘡のためかめくら聲とかいつて昔の音曲家によくある濁つた聲をしてゐた。先生はかねて話にきいてる弱蟲の私を馴染ませようとしたのだらうか、學科が早めに終つたあと私の手をひいていつぱいに藤棚に蔽はれた狹い運動場を圍む廊下を　ここが大きい姉さんの教室、ここが小さい姉さんの教室　などと教へながらひと廻りしてくれた。その白墨だらけの手につかまつた私はたぶん棒を呑んだみたいになつてたことであらう。學科は姉たちが家で豫習をしてくれるので困らなかつたが、學校にはまた生徒が勝手にやるいたづら半分な習慣みたいなものがあつて私をまごつかせた。唱歌の時間に教室から目と鼻の唱歌室へ引率されてゆくときになると惡太郎どもは先生から命じられもしないのに　ダッピ　ダッピ　と聲を合せてやけに足を蹴上げて歩く。ダッピは　ヒダリ　ミギ　で、足を蹴上げるのは歩調をとるつもりなのだ。濛濛と埃が舞ひ上るし、よその授業の邪魔になるのでしまひには叱られるのだが、それを承知で面白半分にやるのだつた。私たちが粗末な板の腰掛に目白押しに並ぶと先生はれいの汚れた手でオルガンをひき濁つた聲を張りあげて歌つてきかせてから立ちあがつて妙な具合に鞭を振りながら皆に歌はせる。私たちはいはれるままにその棒を見ながら無我夢中にうたふ。

まはれこまー
ひーとりだちしてたふれずにー
まーはるしんぼはかねなるぞー
かねなるぞー

この歌の文句の響きや節まはしが子供心になにかおどけた感じを與へた。皆は上級に進むにしたがひ自分らが大層偉くなつたつもりで下級生を見さげると同時にこんなのは一年生の歌として假にも口にのぼせなくなつた。そのうへ不心得にももとの先生までが自分より下級になつたやうな料簡でとかく蔑視する傾があつた。或は私がその先達だつたかもしれない。柳先生は學年がいくたびかはつてもいつも尋常一年の受持ちだつた。話がもどるが、私は乙の組からぢきに甲の組へかへられたので柳先生についてはただこれしきの記憶しかない。しかし小學校へ通つてるあひだは毎日先生の顔を見たはずだが中學へはいると同時に私は內外のいろいろな理由から未練げもなく、むしろ冷淡に、不人情に、先生もろとも小學校を忘れてしまつた。ところがその後十年、中學から高等學校、大學と進んだ時に、ある日學校からの歸り路で思ひもかけずばつたり柳先生に出あつた。私は柳先生に逢つたといふよりはやはり內外のいろいろな事情から變りはてた自分が——見かけは普通の大學生にすぎなかつたけれど——尋常一年生の自分に出くはしたやうにと

胸をつかれた。それは高臺の狭い路が急にS字形に曲つてるところで、かた方はある大名屋敷の高い土堤、かた方はこれも大きな家の樫の並木がつづいて晝でもあまり人通りがないくらゐ用のない淋しい場所だつた。そこで他人なら久びさの挨拶をして暫く立ち話でもするところを私は兵隊がするやうにばたりと足をとめてにこりともしずに謹んで帽子をとつた。

「へえ御機嫌よう」

いささか當惑氣味の先生はさういひながらひとわたりこちらの様子を見ただけで行き過ぎてしまつた。ただもう病的に命がけで緊張しきつてた私の姿は先生に異様の感をあたへたにちがひない。柳先生は昔ながらのぢぢむさい羽織袴だつたが不思議なことに若くもならないかはり年をとつてもゐなかつた。あばたが年齢を超越させたのであらう。小學校を出て以來成人もし、いくらか學問もしたお蔭で少しはものがわかつてきた私はたぶん現在も尋常一年の受持ちであり、今後も相變らずさうであらうところの柳先生をゆめゆめ輕蔑なぞはしなかつた。先生と私の歸り路は家からその邊までがちやうど反對になつてるらしくその後もいくたびか逢つたやうな氣がするが、こちらが大學をへてからはさういふ機會もなかつた。

まはれこまー
ひーとりだちしてたふれずにー
まーはるしんぼはかねなるぞー
かねなるぞー

私はこの頃でも夕食の後など長椅子に足をのばしながらうつとりとしてこれをうたふ。人生五十年、我ながらよくも廻りつづけたものだと思ふ。その五十年もすこし過ぎた私はもはやあの鐵の心棒を貫き、鐵の輪をはめ、互にかちあつて火花を散らす威勢のいいこまではない。足もと危く廻りながら消えてゆく壽命に對して自ら哭する背の高いゴンゴン獨樂である。

林園

いつ頃からか木地の味に興味をもちはじめた私は世間のぶげん者がするやうに珍貴な材料をあつめて贅を盡した普請をするかはりにそれらの小さな標本を屛風にでもこしらへて眺めたらといふ思ひつきをした。貧弱な人間の考へさうなことだ。しかし肝腎な蒐集の便宜がなく、またたつてといふほどの熱心もなかつたのでその企ては忘れるでもなくそのままになつてゐた。ところがいつだつたか上野に小さな博覽會があつたとき下級の學校で使ふいろいろな教材のなかにすこしばかり木地の標本があるのを見つけた。で、とかく無精で引込思案な私としては破天荒にもそれを出品したある教材製作所へわざわざ訪ねていつた。製作所といふから工場を想像していつたところ普通の門構への二階家で、ただ奥に金槌の音がしてるだけがそれらしかつた。玄關へ出てきた主人といふのは六十前後のがつしりした人で、はるばる訪ねたこちらの志を喜ぶといふ風に身のうへ話をはじめ　自分は元來職人あがりでどうとかいふ譯からかういふ仕事をやりだしここまでやりとげたのだが横文字を知らないためこのスプルスといふ言葉がおぼえられないで人

に笑はれた　なぞといつてきかせた。標本はそのスプルスとも百枚になるところが今六枚だけ手に入らない　といふ。私は九十四枚だけを箱入りにするやうに注文した。成功なすつてよござんしたねえ——そんな氣持で應對してた私は話の樣子で主人が私を田舍から上京した學校の先生とおもつてることに氣がついた。やぼなみなりにぼろ袴までつけて教材の注文にいつたのだから無理もない。坊さんと思はれたり、軍人と思はれたり、役者、旅あきんど、會社員とみられたり、ある時は天狗樣とまちがへられたといふ噂もある私はここでまた村夫子の肩書きがふえた譯だ。いつたい私は風體ばかりでなく時と場合でいろいろなものごし言葉づかひをするためかういふ勘ちがひをされるらしい。だがよく目をあいてこの本來の面構へを見るがいい。さうした世間出世間の商賣といふ商賣にはなにひとつ向いてゐはしないのだ。閑話休題。幾日かたつて標本は屆けられたが私の期待はまんまとはづれた。それは一種類の木に一枚あてで、ありふれたたちのものばかりだつた。それだからこそ一般に適當な標本であり、教材であり、最も自然に幸福に生長した樹木の木地の見本なので、はじめからわかりきつたはずだつたのだけれど。しかしひとたびこれらの木片を追憶の土にさして想像の呪法の水をそそげばそれは枯木に花がさくといふやうに忽ちみづみづしく芽をふき、枝葉を繁らせて、色とりどりな詩歌の花を開き、實を結ぶ。この幅一尺五寸、奥行八寸ばかりの淺い箱のなかの私の林園には北は樺太千島から南は琉球臺灣までいろいろな樹木はもとより、紫檀、黒檀、たがやさんなど唐木のたぐひから新に舶載されたチーク、

ラワン、マホガニー等にいたるまで鬱葱と繁茂してゐる。これらにくらべてはわづかに檳榔毛の車に乘つて喜んだ御堂關白の奢りなぞはものの數ではない。永年家の世話、殊に家人のうへを氣づかふがために、そして近來は自分の不健康のためにも好きな旅行に出たことのない私は幸にも居ながらこの狹くて廣い不思議の林園に逍遙して飽くことをしらぬ樂しみにひたることができるのである。

本朝二十四孝

用箪笥のひきだしをかたづけたら古い繪本が出てきた。いろはも讀めないじぶんのだから五十年にもなるだらう。本朝二十四孝。表紙だけに色がついてゐる。荒熊の精みたいな頭をした赤つ面の男が白旗をひろげながら目ばかり光らしてるそばに紫の袴をつけ絲の着物をきた柔和なおさむらひが卷物をもつて力んでゐる。繪ときによれば　よこざうまなこをくりぬきやまもとかんすけはるよしとかいめいしすぎしものがたりをなす。じひざうなほえやましろのすけとなのる　ところだ。それはさてこのぼろぼろの繪本が私に久しく忘れてゐた昔のことを思ひ出させた。私の小學校時代といへば式日にきてゆく羽織の紋を源氏の平家のといひ爭ってとかく平家方の旗色が悪くなるくらゐ舊弊が殘つてたものだが、それでさへ私の名の「勘助」は子供の耳にも古すぎたとみえ、みながよつてたかつて私のことを　山本勘助びつこでめつかちはなつかけ　といつてからかふのであつた、當節なら金鵄勳章にも値する名譽の戰傷に鼻つかけのおまけさへつけて。私は山本勘助が天下の名將だといふ點でわづかに自ら慰めてたが、今ふと歷史の本をあけてみたら

彼はほんの一部卒で傳へられるやうなたいした人物ではないとある。味方と賴んだ勘助がこのていたらくではどうにも立つ瀬がない。で、どう見ても二十四孝にはいれる柄ではないけれど出來ることなら世間をすぐには歩かぬ横藏と縁を切つて、世間の人びとを慈悲藏になりかはりたいと思ふのである。

網ひき

これは小さな思ひで草の花である。五十三年といふかなり大部な記念帖のちやうどなかほどにはさまれたこの花は今はもう色はあせ形もくづれてみづみづしく鮮かだつた昔の姿を偲ばせるよしもないけれど、私にはなほほほゑましくすてがたい殘りの香を感じさせる。

私は病後の靜養その他の事情のため入營前の夏の幾月を小田原にある親戚の別莊でくらした。そこには姉の母と妹の初子さんが子供をつれていつてゐた。私はわけ隔てのない母の心からの親切にあまえて我儘一杯にふるまつた。そして見るみる健康を回復して病氣前より幾層倍か丈夫にさへなつた、肩にしつかり肉がついたものでそれまでの著物のゆきたけが足りなくなつてしまつたほどに。いまだに申譯なくて穴へでもはひりたい氣がするのだが、病後のせゐもあり、その時の事情のせゐもありで、とかく苛立ちやすく、ひねくれやすく、反撥しやすい私の神經をいたはりいたはりよくもまあ世話をしてくだすつたものだと思ふ。——私は思ひでの花を忘れていつか枝葉のはうを語つてゐた。——別莊は談話室でもあり遊戲室でもある茶の間をふくむ母屋と、廊

下つづきで小高いところに建てられた高間といふ一棟と、新座敷といふはうとにわかれてゐた。茶の間の北側には欄子格子がはまつてそのまへになぎの木があり、床にはよくすばらしい山百合がいけてあつた。高間からは海が見晴らせて、襖にはこつくりした文人畫の魚がぽたりぽたりとかいてあつた。はじめ私は高間にゐたのを東京から家の人たちがくるについてずつと離れた別棟へ移つた、といつても寢るときだけのことで、朝から晩まで大抵茶の間に入り浸つてるのだつたけれど。母屋と別棟のあひだには花壇があつていろいろな花がさいてゐた。

ある日の夕がた私が茶の間で日記をつけてるところへ庭のはうから三人づれの旅支度のお客さんがきた。はつきり思ひ出せないが山登りをするにも蓙に脚絆わらぢといふ時代のことで當節のやうな仰仰しいでたちではなかつただらう。威勢よく先頭にたつたのは確に初子さんの甥の誠ちやんで、そのつぎは私と同年配のどこかで見おぼえのある人、しんがりは學生服をきた知らない子だつた。あとできけばそれは春ちやんといつて誠ちやんより二つ年下の十四になる從弟、もうひとりは誠ちやんの家庭教師の木村さんで、同じ一高出身でもあり、東大の同じ科に席をならべて始終顔を合せてた人だつた。私はれいのとほり無愛想な様子で一行を眺めてたにちがひない。勸進帳の判官めいて遠慮がちに後からきた春ちやんはちらりとこちらを見るや目をそらしてはにかみ笑ひをした。

新來のお客さんには新座敷があてられ、私たちはそれまでどほり茶の間に集つた。それから二、

三日のあひだ皆はひとつ食卓に向ふにもかかはらずほとんど口をきかなかつた。子供ながらものなれた誠ちやんは努めて愛想よく私に話しかけ、私のはうでもできるだけ親しむやうにはするものの偶然一、二回逢つたことがあるだけでものをいふのは今度がはじめてだし、年もちがひすぎて折角口をきつた話もぎきにとぎれてしまふのだつた。誠ちやんは西洋生れの、フランスで揃ねてロシヤで固められたいたづらつ子で、笑ふとき兩方の頬つぺたに深い靨をいらせる。まだ不確な日本語を教へるために國文科出の木村さんが家庭教師になつたのだ。春ちやんは卵なりの頭にビロードみたいな髪と描いたやうなはえぎはをもつてゐる。とりわけ人の心をひくのはぱつちりと大きな目で、柔和なうちに力のあるつややかな瞳だつた。その目が食後の談笑のあひだに内氣らしく人の顔を見まはしてはすぐ伏目になるのがうひうひしく可愛らしい。笑ふと小さい心もちうけ口が聲のこぼれるのを惜むやうにあいてすこし齒なみのみだれた絲きり齒が愛嬌をそへ、口もとが小氣味よくあがつてたべちまひたいやうな頬がほんのりと上氣する。春ちやんは忽ち皆のお氣に入りになつた。母は

「ほんにええ子ぢや」

といひ、初子さんは

「ほんとにかはいい」

といふ。私も早く話がしてみたいと思つた。

問もなく誠ちやんの誕生日がきた。母は皆を喜ばすために前の濱で網をひかせてくれた。懇意なところへも案内を出したので子供たちが大勢見物にきた。世話人の池田さんが「網はかけるのになかなか手間がとれますから支度ができましたらお知らせします」といつてかなり永く家で待たされた。そのうち　もうか　もうか　と待ちあぐねてるところへ知らせがきた。皆は　それと私ひとりをあとに殘して飛んでいつた。私はそんな場合によくやる流儀でのつそり遲れて出かけ、昔砲臺だつたとかいふ高間のわきの小山から久しぶりに海岸へおりてみたら連中は面白さうに泳ぎまはつてゐた。そこへ春ちやんが海からあがつてきたので私は曳き網のそばに寐ころんではじめての話の口をきつた。眞夏の太陽は頭上から赫赫と日光をあびせかけ、燒けつく砂からは濛濛と陽炎がたつ。海の風はきてもなま溫く粘つこくてかへつて暑苦しさをます。ただしづかにまきかへるひき汐どきの波ばかりが綠の管玉をまろばすやうに涼しげにみえる。濃厚な支那酒にでも醉つたやうに懶く陶然としてると流れるでもなくにじみでる汗がねちねちと肌に匂ふ。春ちやんの頬から、肩から、二の腕のへんが日射のために美しく充血してゐる。春ちやんの話題はもとより私にとつて些の興味もない子供つぽいものだつたがさうして話してるといふことだけで私には充分な滿足があつた。

ところへ沖の船から合圖の手をふつたので皆は一度に曳き網にとりついた。誠ちやんもひく。春ちやんもひく。木村さんも私もひく。濱に店をだしてる甘酒屋もひく。誰も彼もみんなひいた。

ところがふとした拍子に私は網のかけ手の二三人のあひだに妙な笑ひが押し隱されてるのに氣がついて　おや　と思つた。やや暫くして網があがつた。濡れてずつしりとふくらんだ網のなかに無數の小鰺がぴりぴりとふるへてゐる。青貝色にかかつてるのをさばいてはさばいては樽にいれる。瞬くまに山もり二樽になつた。大鯛小鯛も十匹ばかり。そのほか、ひらめ、をこぜ、矢がら、鮫の子、翼みたいな鰭をもつた斑の魚もゐた。獲物をさし擔ひに波よけの土堤をこえて高間のまへへ運びいれ、籠にわけて松の蔭においたらとびだしてぴちぴちと草に跳ねる。よそゆきの子供たちは美しい輪になつて魚に見とれる。後ろの小さいのはひとりひとり抱きあげて見せてやる。小魚の腮を松葉でとほしておみやげにやつたら氣味わるさうに手にさげて眺めてゐる。母をはじめみんな大喜びの大はしやぎで、まことにいい天氣の、いい誕生日の、いい網ひきであつた。

後刻木村さんと池田さんと私の三人だけが茶の間に落ちあつたとき木村さんが私の顏を見て意味ありげに笑ひながら　なんだかうさん臭い　といふやうなことをいひだした。すると池田さんが口をとがらせて

「默つてらつしやいよ、折角皆さん喜んでらつしやるのに」

と半分口のなかで、半分目でいつた。すつかりわかつた。ほんとにはひつた魚もあるにはあるのだがお景物をいれるのに暇がかかつたのだ。魚の彩りといひ、恰好といひ、細工は上出來だつた。はづれたときの皆の落膽を思へばそれも他意ない機轉だし、たかが鮫やひらめのことゆゑそれと

知つた私にもむしろ時にとつての肴となつた。

その日から私たちはからりとうち解けて親しむやうになつた。いはば魚同様うまうまとひとつ網に追ひ込まれたのである。

新座敷と茶の間とはかけ離れてゐてお互に様子はわからないのだがどうかして私がひとりだと知れると春ちやんは來て樂しさうに話す。ほかの人がゐると窮屈なのか、きまりが悪いのか、ぢきにいつてしまふ。箱入娘みたいに內氣らしい。話のあひだに私は春ちやんが徹頭徹尾まじめで、子供らしく正直なのに驚かされた。

ある朝母屋へ食事にゆかうとするとき花壇のそばで春ちやんに逢つた。春ちやんはいつものとほりはにかんで挨拶をした。起しにくるところかときけばただ出てみたのだといふ。別棟に移つてから私はよく朝寢をして待ちくたびれた母のお使ひ役の誰彼により起されるのだつた。ある朝には庭の小松の中で逢つた。春ちやんは自分だけのとき私の姿を見かけるときつとそばへくるがお仲間といつしよだと箱入娘の遠慮やはにかみに負けてしまふらしい。始終話したさうにみえながらつひゆつくりするをりもなかつた。

春ちやんは間がなすきがな誠ちやんにからかはれおもちやにされてゐる。ある晩家ぢゆうが茶の間に集つたとき私たちは春ちやんが寫生帖をもつてるのを見つけた。で、はづかしがつて必死に隱すのを私と誠ちやんとで無理やりにとらうとした。と、意外な春ちやんの援兵が現れた。初

子さんのとこのばあやが可憐な敵に同情してむきになつて味方した。やつぱりひいきだつたのだ。しかし寫生帖は結局腕づくでとられた。そこには人物、風景、靜物などの寫生や模寫があつた。春ちやんがいろいろにいひわけをするのを誠ちやんが意地悪くそばから囃したてる。私は好奇心から寫生帖をとつてはみたものの消えてもしまひさうな樣子をみてとんだ氣の毒なことをしてしまつたと思つた。最後に運悪く皺くちやの婆さんがでてきた。誠ちやんはしめたとばかりひとの手から寫生帖をとり高だかとさしあげて

「これが春ちやんの未來の妻君です」

と披露する。まつかになつた春ちやんはひつたくつて繪を破りすててしまつた。誠ちやんはたんのうして無上に面白がる。私は春ちやんが一層可愛くなつた。

ある日茶の間でさし向ひになつたとき春ちやんは私が永く滯在するのかとたづねたゆゑ滯在すればどうなるのととひ返したら口ごもりながら

「手紙をかかうかと思つて……」

といつた。

「そんなら僕もださう」

さういはれて嬉しさうに

「僕手紙をもらふのが大好きなんです」

といふ。
「そんなに好きなら澤山あげよう」
春ちやんは飛びたつばかりに目をみはつて
「きつとですよ　きつとですよ」
とはにかみも忘れて念をおす。その後も度たび念をおしたので
「手紙をもらふのがすきだからつて人が一所懸命かく手紙を慰み物にするならかかない」
とちよつと手管をかければ、生まじめになつて決してそんなことはしないと誓つた。またある日茶の間の縁側で二人だけになつたときだしぬけに
「あさつてここをたつんですつて」
といつて淋しさうな顔をしたが、それつきり何もいはなかつた。その晩茶の間の雑談のあひだに活動寫眞――映畫といふ言葉はなかつたらう――の話がでたときに春ちやんは外國の風景やなにかのが大好きだといつた。それはとにかくとして活動寫眞には誰も賛成しなかつたし、私も實はまだ見たこともなく、見たくもなかつたけれど、もしやつてるなら行かう　といつたら嬉しさうにした。翌朝母屋の廊下で行きあつたら
「今夜いつしよにいきませうね」
といつてすぐまたあとから

「きつとですか」
と念をおしたので私は
「僕が嘘なんぞいふものか」
といつて安心させた。その後また春ちやんは人目をしのぶやうにして
「あしたたつんですつて」
となごりをしさうにひと言いつた。私はいつぱいになつたコップをさしだされたやうにそうつと受取つてそのままにしておいた。
その晩私たちは連れだつて芝居小屋へいつたがあいにくなにもかかつてゐなかつた。默つてる春ちやんの落膽が思ひやられて可哀想でならない。誠ちやんは往きもかへりも私の肩へ手をかけたり手をつないだりして春ちやんにからかひながら歩く。たとへば春ちやんがちらりと私の顔をぬすみ見ると
「見た　見た」
と囃したてる。さうしたいたづらはただされへ内氣な子をいよいよ固く封じこめてしまひ、ひとりぼんやり足を運ばせるのだつた。
終にお別れの朝がきた。一行はぢき前の濱から小さな汽船でたつので私は艀（はしけ）まで見送ることにした。濱へ出る細い道でたぶん皆が並んで歩けないために木村さんと誠ちやんが先に、私と春ち

やんが後になつたとき春ちやんは小聲で

「東京へ歸つたら手紙をたくさんくださいよ」

とさも大事な、きかれてならない願ひ事でもするやうな調子でいつた。それを誠ちやんはききつけてまたからかひだしたもので顏を赤らめてしよげてしまつた。

濱へでたが船は影もみせない。で、葭簀(よしず)ばりの待合所に四人並んで腰をかける。誠ちやんは私の隣にゐていたづらをしなければ春ちやんをいぢめる。でなければ喋る。ちよつとのまもおちつかない。春ちやんは私と反對のはじつこに木の柵に頤をのせて淋しさうに海を眺めてゐる。胸一杯らしい。可哀想になつて私はそのそばへ席をうつしたが人がゐるもので口をきかない。そこへまた誠ちやんがまたもよつてきてはしやぎまはる。

船がみえた。伊豆のはうから遙に初島と眞鶴の岬のあひだをまはつて次第に近づいてくる。春ちやんはなごりをしさうにするばかりでひと言もいはない。半時ばかりして船が磯近くとまつた。私は春ちやんの重い鞄をもつてやらうとしたが遠慮して渡さない。たうとう春ちやんのと誠ちやんのを兩手にさげ歩きにくい砂濱を波うちぎはの艀まで運んで積みこんだ。それほど私の體は回復してゐた。船頭たちがシイラ?を並べて舟をゆすぶりはじめたときに私も手傳つて威勢よくおしおろした。舟は滑つてさつと波にのつた。春ちやんは荷物のあひだに立つてじつとこちらを見てたが顏がかすむくらゐはなれたころ帽子をとつて淋しさうな笑顏をみせた。私も帽子をとつた。

誠ちやんも笑つて帽子をとつた。私がふりかへりふりかへり家の山の下へ歸りつくまで皆は見送つてゐた。その後私は一度も春ちやんに逢はなかつた。

それから永いやうな短いやうな二十幾年がすぎた。五、六年前ふと思ひたつて昔の跡をたづねてみたら別莊は荒れはてて今は持主もしれず、建物も庭も花壇もあとかたもなくなり、ただ小山へのぼる路にならんだ石佛のうち私の好きだつたのがもとのままに齒をかみだして音もせぬ鈴をふつてゐた。朝晩に顏を合せ言葉をかはした人びとのうち年寄たちのなくなつたのはしかたがないとしてまだほんの子供だつた誰彼もがいくたりか先にいつてしまつた、とりわけ可愛い子供たちだつたのに。そのなかには春ちやんもゐる。春ちやんは今も私の手紙を待つてるのだらうか。

木村さんは高等學校の教授になつたときいたし誠ちやんは立派な外交官になつた。さうして私は「人を漁る者」となつたつもりのところ、網はぼろなり、腕はわるし、さつぱり獲物がはひらない。「沖へいで網をおろして漁れ」さういつておいて誰かあの世話人の池田さんのやうに要領よく獲物を入れてはくれまいか。

きもの

生垣つづきの小路が交叉してるところで私たちはばつたり出逢つた。飛田は意外な面もちをした。そしてほんの目と鼻の近處へこしてきながら知らせもしずにゐた私に尤もな苦情をいつた。私はなんとかいひ紛らしたにちがひない。

「遊びにきたまいよ」

飛田は口を尖らせていつた。そこで私たちは短い立ち話を切りあげて別れた。彼は役所の歸り、私は散歩か郵便を出しにゆく途中だつたらう。そんなことでもなければうち絶えたままになつたかもしれない交際がそれからまた始まつた。さうして一高時代からのどちらかといへば羽織袴のおつきあひがちよいちよい著からふだん著のそれへとかはつていつた。それには流れ去つた十數年の歳月や私自身の心境の變化のせゐもあつたらうが、直接にはその時から私の生活、私たちの交際の圈内へ不意にギャロップで飛び込んできた可愛らしい子馬——鳰子の無心な解きほぐしが原因となつたのであらう。私は小さな草原を横ぎつてむかうの閑靜な高臺の表つきの氣に入つた

家へ足繁く通ふやうになつた。

あるとき私は柄のいい米琉の袷をきていた。高臺には生垣のかなめ、ひば、杉などがみづみづしい若芽をふき、沈丁花がかをり、蘇芳や連翹がさき、木蘭が盃をたて、どうだんが提灯をさげ、梢には四十雀が鳴きかはし、陽炎のたつ地べたには穴に出はいりする蜂の影が小忙しく動く頃、程よくさびのついた郊外の住宅地が最も美しく住み心地がよくなる季節だつたであらう。お母様は私の袷をみてまづその柄をほめたあげく

「あなたにはもつたいないうございますよ　私が頂きますよ」

といはれた。私はすこし得意に承知してその次の訪問のときもつてつてさしあげた。ところが間もなくそのお返しに駒江さんが當時流行の立派な堅絽の羽織をもつてきてくだすつた。私が一帳羅の古い横絽しかもたないことを氣がついてなのであらう。有り難いとはいふものの海老で鯛を釣つたかたちでいささか恐縮したことであつた。その後また遊びにいつたときに飛田は

「こなひだいい縮があつたからお揃ひに買つといたよ」

といつて反物を渡しながら

「これにいつかの羽織をきて銀座を歩くと女が惚れるよ」

とつけ加へた。あさぎと鶯とねずみの縞を縦長の細かい格子にしたもので、いかにも飛田の好みらしいいきな柄だつた。上等の品だけにしつとりと著心地がよかつたけれど生れつきしんからや